

建てゐる。下層を法水院、中層を潮音閣、上層を究竟頂と稱する。下層中層には組物を用ひず、上層に舟肘木を用ひ、中層と上層との勾欄を受ける爲めに三斗を使つてゐる。垂木は兩層とも疎垂木を用ひてゐる。下層は五間四面、前面一間を廣椽とし、更らに狭き落椽を廻らし、内陣には佛壇を設け、彌陀三尊と開祖夢窓國師の像を安置し、今は義滿の像も置いてある。中層は階段の上つた所を廣く椽の如くし、前面にも一面の椽を取り（別に狭い廻椽がある）、部屋は方三間で鏡天井とし、中央に天人、伽陵頻迦を描き、縁には牡丹唐草を廻らしてゐる。下層中層には正面に菴戸、出入口には唐戸を附してゐる。上層は方三間の正面一間を棧唐戸とし、左右には火燈窓を開き、内部は鏡天井とし、禪宗風の逆蓮頭を有する勾欄を廻らし、内外とも黒漆を塗り、金箔を貼してある。之れによつてみると、下層と中層とは「和様」を用ひ、大體寢殿造の手法により、上層は禪宗風即ち「唐様」を用ひ、金箔を貼したのは

金色堂あたりを學んだものらしく、屋根に銅鳳を載せたのは鳳凰堂に倣つたのであらう。寢殿造は平家であるが、三層としたのは佛教建築を學び、又別荘建築として庭園鑑賞の爲めからでもあらう。さうして建築の中から庭園を眺めるばかりでなく、建築そのものが庭園中の一風物として庭園の美を助け、庭園建築と稱さるべきものである。外部の表現は優美輕快を極め、日本趣味を發揮してゐる。要するに此の建築は、其の特殊な性質の上から、又表現の上から、當代の代表作であるばかりでなく、日本建築を通じて貴重な遺物である。慈照寺は上京區淨土寺町に在る。これは將軍義政が文明十二年別業とした所で、所謂東山の山莊である。當時は十二の殿舎を建て、廣大な林泉を作つて豪華を極めたが、義政の死後寺とし、慈照寺と名づけた。當時の建築で現存してゐるのは、銀閣と東求堂とである。銀閣も金閣と同じく池に臨んで建てられてゐるが、これは重層である。下層は正面四間、側面三間で、上

建築

建層は方三間である。下層にも屋根を葺下ろし、上層には勾欄を廻らし、柿葺の寶形造で、露盤の上に銅鳳を載せてゐる。下層は潮音閣と云ひ、組物なく疎垂木で、正面に腰高障子を用ひ、側面には障子の窓もあり、純然たる書院造である。上層は心空殿と云ひ、金閣と同じく全く禪宗風で、正面は三間とも火燈窓を開き、側面は中央に棧唐戸、左右は火燈となつて居り、組物も三斗を用ひてゐる。但し勾欄は金閣と異り、「和様」のもので、三斗によつて支へられてゐる。而して上層の外内には漆を塗り、義政の考では銀箔を置くつもりであつたが夫は實現されなかつた。銀閣も金閣と同じく住宅建築と禪宗建築とを結び合せたもので、更らに相阿彌設計の林泉とも調和し、庭園建築と考へられるものである。恰好としては金閣に劣るが、瀟洒、淡泊の表現を有し、金閣と共に當代建築界の一異彩である。而して其の住宅の分子が金閣に於いては寢殿造の風を帯び、銀閣に至つて書院造の形式になつてゐる點が

前後八十年の時代の差を明瞭に示して興味が深い。

住宅建築の遺物

庭園建築のついでに住宅建築の遺物を擧げて置かう。それは慈照寺東求堂、妙心寺靈雲院書院、妙喜庵書院の三つである。東求堂は東山山莊の一建築で、義政の持佛堂である。桁行前面五間後面四間、梁間三間、單層、入母屋造、柿葺で、廻縁をつけてゐる。組物は舟肘木、軒は二軒、疎垂木となし、すべて木割が細い。周囲は腰高障子、細棧の窓、舞良戸等を用ひ、正面の入口には花狭間唐戸を用ひてゐる。内部は四間に分れ、正面の花狭間唐戸を入つた所は八疊の佛間で、左方に佛壇、厨子を置き、右方と後方とは襖で仕切られ、天井は小組格天井とし、他の間は總べて棹縁天井である。佛間の右の間は四疊で、其の奥に四疊半があり、佛間の奥は六疊となつてゐる。此の四疊半には六尺の書院構と三尺の違棚とを有し、中央に爐が切つてある。これは四疊半茶室の起源を示すものとして有名であるが、茶

室町時代

建築

室と云ふよりも小書院に爐を切つたと見るべきものである。斯くの如く東求堂は持佛堂ではあるが、純然たる住宅建築で、書院造の手法を持つて居り住宅建築史上重要な遺物である。妙心寺の靈雲院書院（御幸間）は、天文十二年（一五四三）前後に建てられ、桁行三間、梁間四間、單層、切妻造、柿葺の建築である。後奈良天皇が參禪せられた時玉座となり、御幸間と云はれてゐる。玉座の間には張臺構があり、天井は張付天井である。隣に次之間、三之間があり。次の間には違棚があり、猿頬天井を用ひ、三之間には床の間があり、棹縁天井となつてゐる。即ち簡單ながら書院造の平面を有し、張臺構違棚、床の間等のある點が書院造を大成する上に面白いと思ふ。妙喜庵は京都府乙訓郡大山崎村に在る。山崎宗鑑が一休に仕へて悟道に入り、一休の寂後、草庵を結んだのが此の庵の起源であつて、現在の本堂は當代の末期のものである。桁行二間、梁間三間、單層、切妻造、棧瓦葺の建築で、廣椽の外

室町時代

に落椽を附け、内部と廣椽との間には腰高障子を置き、内部の間仕切は襖で、廣椽の端は杉戸とし、廣椽の柱には肘木なく、内部に舟肘木を用ひ、疎垂木を用ひてゐる。すべて書院造の特色を有し、續いて桃山時代の數寄屋の建築がある。これも妙喜庵の茶室として有名であるが、次章に述べる。猶書院も今は本堂として十一面觀音を安置してゐる。住宅建築に附隨して述べて置きたいのは、妙心寺玉鳳院の四脚門の事である。それは後小松天皇の皇居の門を應永十六年に移建したものと傳へてゐる。四脚の平唐門で、屋根は檜皮葺となり、如何にも住宅建築に應はしい優雅な門である。

神社建築の遺物

當代の神社建築は種々の變態を生じ、千紫萬紅の有様を示し、遺物の如きも百以上あるが、最も主なものを列記すると、

貞和元年

(一三四五)

出雲神社本殿 (京都)

貞治二年

(一三六三)

錦織神社本殿

應安三年	(一三七〇)	住吉神社本殿	(山口縣)
永和四年	(一三七三)	大山祇神社本殿	
明德前後	?	建水分神社本殿	
明德元年	(一三九三)	吉備津神社本殿	
應永二十九年	(一四二三)	向神社本殿	
永亨十年	(一四三八)	春日神社本殿	(近江)
文明二年	(一四七〇)	御靈神社本殿	(兵庫縣有馬郡貴志村)
同 四年	(一四七二)	御靈神社本殿	(奈良縣宇智郡牧野村)
同 九年	(一四七七)	八幡神社本殿	(寶飯)
文龜二年	(一五〇二)	地主神社本殿	
同 三年	(一五〇三)	今八幡宮社殿	
享祿五年	(一五三二)	談山神社十三重塔	

弘治二年 (一五五六)
元龜元年 (一五七〇)

嚴島神社本社々殿
土佐神社々殿

吉備津、土
佐兩神社

以上の中でも初期の吉備津神社と末期の土佐神社とは最も代表的なものである。吉備津神社は岡山縣吉備郡真金村に在る。仁徳天皇時代の創立であるが、現代の社殿は明德元年の建築で、平面、立面とも全く前例のない奇抜な意匠から出来てゐる。即ち、殿は桁行七間、梁間八間で單層であるが、拜殿はその前に三間四面の重層とし、屋根は本殿に入母屋造の破風を前後に並べ、俗に之れを比翼造と云つてゐる。拜殿は上層は切妻造で、妻を正面とし、下層の屋根は前面に葺下して向拜となつてゐる。而して本殿は内側一間通りを外陣とし、次に正面一間丈けを向拜之間とし、次に方五間の内側一間通りを中陣とし、其の中に方三間をとり、之れを二分し、前の一間を内陣とし、後の二間を内々陣としてゐる。而して向拜の間から階段

建 築

で中陣に上り、更らに階段で内陣に上るやうになつてゐる。又本殿の土臺を龜腹として一段高めたのも珍らしく、これが爲め拜殿を重層としたのである。組物は「和様」に「天竺様」を加へ、廻椽なども挿肘木で支へてゐる。神社建築に「天竺様」を用ひたのは珍らしく、他に例がない。要するに此の建築は其の平面、立面に奇抜なる形をとり、拜殿の如き奇抜に過ぎる位で、更らに細部に珍らしい手法を用ひ、變化に富める事當代神社建築中でも、最も甚しい一例である。次に土佐神社は高知縣土佐郡一宮村に在る。創立の年代は不明であるが、現代の社殿は元龜九年長曾我部元親によつて再建せられたものである。本殿は五間四面、單層、入母屋造、柿葺の建築であるが、前面に幣殿、拜殿、左右翼廊、拜の出等を有し、嚴島神社又は今八幡宮の平面に似た複雑な平面となつてゐる。即ち幣殿は方三間で拜殿は方一間の左右に五間の翼を有し、拜殿は中央高屋根となり、翼は切妻とし、更らに拜の出は桁行七間、

梁間一間で長く前に出てゐる。之れ等の平面は桃山時代に權現造として現はれる神社建築の新形式の先驅をなすものである。而して此の社殿の彫刻裝飾は最も見るべく、題材、意匠とも珍奇巧妙を極めてゐる。例へば繫虹梁の鼻は龍となり、その下の斗は象鼻で受けられ、虹梁を受ける爲め魚の形を以つて柱を貫いてゐる。之等の意匠は奇抜、自由で、將に次の桃山時代に入らんとする事をよく示してゐる。

其 他 の 遺 物

室 町 時 代

猶主な神社について述べて置かう。一錦織神社は大阪府南河内郡川西村に在る。桁行三間、梁間二間、單層、入母屋造、檜葺皮で、入母屋造の前だけ向拜を葺下ろし、其の端が軒唐風となり、更らに其の上に千鳥破風をつけてゐる。この屋根の形式は後世に影響を與へ、日光や上野の東照宮、芝の靈廟の拜殿は之れによつてゐる。繪様線形も雄健に出來てゐる。住吉神社は山口縣豊浦郡本上村に在る。神功皇后時代の創立であるが、現在

建 築

の社殿は、應安三年大内弘世が再建したものである。祭神が五座あるので五社殿を並べ、合の間で聯結し、九間社流造となつてゐるが、各社の正面に千鳥破風を持つてゐるので、正面から見れば春日造の如く、即ち流造と春日造の折衷とみる事が出来る。檜皮葺で五つの千鳥破風が並んだ所は壯觀である。組物も雄大で、向拜の柱間に在る臺股には寶相花などを透彫としてゐる。南北朝時代の神社建築としては代表的のものである。建水分神社は大阪府南河内郡赤阪村に在る。崇神天皇の五年に創建せられ、現在の社殿は建武元年楠正成勅を奉じて再建したと傳へられてゐるが、構造様式の上からみると、やや下つて南北朝の終で、明德前後の建築と思はれる。住吉神社のやうに祭神五座であるが、中央の一間社春日造に一座を祀り、左右に二間社流造を對稱的に並べて各二座を祀り、三社殿を渡廊でつないでゐる。從來祭神五座ある時は必ず同形式の五社殿を並べたものであるが、斯く二つの形式の三社殿と

室町時代

した事は頗る珍らしく、又變化に富める當代の神社建築の一例とする事が出来る。兵庫縣寶飯郡平幡村の八幡神社は、社傳白鳳年間の創立、文明九年の再建と傳へてゐるが同十九年説もある。三間社流造、向拜一間を有し椽葺である。普通の流造であるが、此の建築に見るべきは彫刻裝飾の豊富な點で、破風の下は全部一種の線形を以つて裝飾し、臺股、小壁等は、蓮、菊、柏、藤、牡丹、獅子、雁などの動植物の外、雲間に現はれた三日月などを題材とした彫刻を以つて裝飾し、其の手法は雄健にして派手の内に落付がある。又渡金の金具も多く用ひてゐる。此の裝飾法は百年後桃山時代に盛に行はれたもので、實に其の先驅をなしてゐる。談山神社は吉野多武峰に在る。其の十三重塔は檜皮葺で、頗る珍らしいものである。嚴島神社については、藤末時代の建築の項で大體を述べ、客神社のことは鎌倉時代の章で述べた。本社殿は毛利元就によつて弘治二年に再建されたものであるが、其の平面は勿論、

建築

立面に於ける調子、細部の手法に至るまで平氏時代即ち藤末時代の風によつてゐる。本殿（八間四面、單層、切妻造、檜皮葺）の前に幣殿（方一間）、拜殿（九間三面、單層、入母屋造）、祓殿（六間三面、單層、入母屋造）がつゞき、其前は廣い平舞臺（間口七十五尺三寸、奥行二十九尺五寸）となり、其上に高舞臺（間口十八尺、奥行二十二尺）が載つてゐる。すべて檜皮葺で、勾配ゆるき屋根の恰好は、さながら平氏時代の優雅な建築である。神社建築の遺物を終るに當つて一つ附け加へて置きたいのは園城寺境内にある新羅善神堂である。園城寺の守護神たる新羅善神の社殿で、曆應三年（一三四〇）足利尊氏の再建にかゝり、純然たる三間社流造で、其の形が中々美しい。當代の神社建築は變態のもの以外は三間社流造が多いが、これは代表的のものである。

佛寺「和様」の遺物

佛教建築の遺物は、「天竺様」が消滅したので、「和様」、「和様新派」、「唐様」の三つに分けて述べる。先づ「和様」の遺物の主なものは、

- 貞和四年 (一三四八) 明王院五重塔
- 延文五年 (一三六〇) 常樂寺本堂
- 應永五年 (一三九八) 同寺三重塔
- 同十一年 (一四〇四) 瑠璃光寺五重塔
- 同十八年 (一四一一) 興福寺東金堂
- 同三十三年 (一四二六) 同寺五重塔
- 永享十二年 (一四四〇) 法觀寺五重塔
- 永正十二年 (一五一五) 大傳法院大塔

室町時代

等である。中で明王院の五重塔は、廣島縣沼隈郡草戸村に在る。當代の最も初期に屬し、本瓦葺の勾配緩き屋根を有し、全體の恰好に落付があり、木割も雄大に、鎌倉時代若しくは其の以前の調子を持つて居り、五重塔の遺物を多く有する當代に於いても代表的の一佳作である。常樂寺は滋賀縣甲賀郡石

部村に在る。創立は和銅年間であるが、現在の本堂と三重塔とは何れも當代初期の再建である。本堂は七間六面、單層、入母屋造、檜皮葺の建築で、内部に「和様新派」の厨子を安置してゐる。三重塔も屋根は檜皮葺で、古い調子を有し、本堂と共に優美な表現を持つてゐる。内部には四天柱、側柱、長押、方立、幣軸等に寶相花、天人、雲龍などを彩色で描き、當代初期の裝飾として貴重な遺物である。瑠璃光寺は山口縣吉敷郡上宇野令村に在る。その五重塔も古い様式により、檜皮葺で輕快の感じを與へるが、内部の圓形須彌壇は「唐様」である。興福寺については既に第三章の白鳳時代(頁參照)に創立、沿革、配置等を述べたが、當代中期に再建せられた東金堂、金堂とも其の位置及び平面は當初の儘で、様式、手法も天平の古風を模してゐる、殊に兩金堂に於いて五間四面の前面一間通りを開け放しとした如き、また屋根の四注である點の如き、五重塔は全體の恰好頗るよく、高く猿澤池の上に聳えたところは

天平の昔を偲ぶ事が出来る。大いさも塔身百十六尺餘、相輪四十八尺餘を有し、東寺のものに亞いで現存の五重塔中第二に位する。法觀寺は京都市下京區八坂上町に在り、聖德太子時代の創立であるが、現在の塔は當代中期の再建で、俗に八坂の塔と稱してゐる。矢張古い調子を有し、木割なども興福寺に似てやゝ雄大である。すべて「和様」は擬古派で、換言すれば古式の復活である。大傳法院は和歌山縣那賀郡根來村宇西坂本に在る根來寺の事である。其の大塔はもと高野山の塔を模したもので、大塔唯一の遺物として貴重なものである。この大塔については既に第五章弘仁時代の金剛峯寺草創の項(頁參照)で述べたが、下層は方四十九尺一寸、高さ百十七尺餘、普通の五重塔の高さを有つてゐる。

和様新派の遺物

次に鎌倉時代に於いて「和様」が「天竺様」を攝取して出來た「和様新派」の主なる遺物は、

建 築

貞治三年	(一三六四)	善水寺本堂 (滋賀縣)
永和四年	(一三七八)	道長寺本堂 (和歌山縣)
嘉慶二年	(一三八八)	長保寺大門
應永四年	(一三九七)	鶴林寺本堂
永亨十一年	(一四三九)	法隆寺南大門
康正元年	(一四五五)	金峰山寺本堂、樓門

等である。中で長保寺は和歌山縣海草郡濱中村に在る。本堂、多寶塔、鎮守堂等は鎌倉時代のものであるが、大門は當代の建築で、三間一戸、入母屋造、本瓦葺の樓門である。上層下層とも三手先の組物を用ひ、大體「和様」であるが、拳鼻を持つて居り、當代の樓門としては佳作である。鶴林寺は兵庫縣加古郡鳩里村に在る。聖德太子の開基で、養老二年再興した事に傳へられてゐるが、現在の本堂の再建年代は明かでない。併し内部の厨子に應永四年の棟

室町時代

札があつて、本堂もそれと同様式であるから、同年の再建と見て差支なからう。七間六面、單層、入母屋造、本瓦葺の比較的大建築である。内部は前二間を外陣とし、後を内陣とし、中央に三間の厨子を安置してゐる。組物は「和様」の二手先であるが、組物間には「唐様」の双斗と「和様」の板蓋段とを結合したものを附け、繫虹梁には「唐様」の蝦虹梁を用ひ、所々に「和様新派」の線形を應用するなど、縦横自在な手法を用ひ、よく調和を保つてゐる。これは所謂「第二折衷派」と云ふべきもので、又「觀心寺様」の一層進歩したものである。當寺の太子堂は前代の建築であつたが、鐘樓(應永十一年)と護摩堂(永祿六年)とは共に當代のものである。法隆寺南大門は規模小なる八脚門であるが、觀心寺本堂の双斗の變化した面白い形のものを持つてゐる。金峰山寺は奈良縣吉野郡吉野村に在る。本堂(藏玉堂)は桁行七間、梁間八間、重層、入母屋造、檜皮葺の

建

比較的大建築である。同寺樓門も同時のものである。

築

唐様の遺物の

最後に「唐様」即ち鎌倉時代に輸入された禪宗風の建築遺物として主なるものを挙げる。

正慶二年？ (一三三三?)

清白寺佛殿

？

安樂寺八角四重塔

文和元年 (一三五二)

永保寺開山堂

明德元年 (一三九〇)

安國寺經藏

應永年間 (一三九四)

東福寺三門

永亨六年 (一四三四)

妙心寺玉鳳院開山堂

同十四年？ (一四四二?)

向山寺三重塔

文明三年 (一四七一)

東禪寺藥師堂 (愛媛縣)

天文年間 (一五三二)

不動院金堂 (廣島縣)

室町時代

清白寺は山梨縣東山梨郡後屋敷村に在る。正慶二年足利尊氏が創立し夢窓國師を開山と傳へてゐる。果して眞ならば鎌倉末期に入るべきものであるが、疑があるので當代初期に入れて置いた。佛殿は方五間、重層、入母屋造、檜皮葺の建築で、規模は小さいが「唐様」の手法を見るべく、線形も巧に用ひられてゐる。此の建築で注意すべきは内部に彩色裝飾ある事で、圓覺寺の舍利殿は素木であるが、元來宋元から輸入した禪宗建築には彩色があつたので、此の清白寺佛殿が我が國では彩色ある禪宗建築の最古のものである。安樂寺は長野縣小縣郡別府村に在る。寺傳によれば藤初時代の安和二年平維茂が信濃守に任ぜられた時、勅を奉じて國家鎮護の爲め塔を建て、内部に金光明最勝王經を納めたと傳へ、壽永年間木曾義仲が平氏と戦つた際も、寺は兵火の爲め焼けたが塔は災を免れたと云はれてゐるが、構造様式の上から當代初期以前のものとは考へられない。八角塔は支那には澤山あるが、我が國では珍

らしく、藤原時代には有名な法勝寺に八角九重塔があつたが焼け、これが現存せる唯一のものである。又四重といふのも珍らしいが、之れはよく見ると三重塔に裳層を附けたのである。之の塔の屋根は椽葺（柿葺の板の厚いもの）で組物は各重とも「唐様」である。即ち各重とも「唐様」三手先の詰組で、二軒、扇垂木、裳層は出組となつてゐる。この「唐様」を用ひた事は、塔としては頗る珍しいと云はねばならぬ。要するに此の塔は八角である點、裳層を加へて四重に見ゆる點、「唐様」を用ひた點の三點で頗る珍貴のものである。但し恰好としては上乘といふ事は出来ない。永保寺は岐阜縣加兒郡豊國村に在る。正和三年夢窓國師の開基に係り、現に當時の觀音堂が存してゐる。開山堂は遅れて文和元年に建てられた。此の建築は祠堂と禮堂とから成り、祠堂は方一間、重層、禮堂は方三間、單層で、兩堂を合の間で連結してゐる。兩堂とも入母屋造で、祠堂は裳層を有し、合の間は切妻造で結び、すべて檜皮葺で

ある。組物は祠堂は三斗、禮堂は三手先の詰組で、垂木は兩堂とも扇垂木を用ひてゐる。柱には粽があり、礎盤の上に立てられてゐる。祠堂の地盤は一段高く屋根は却つて低く裳層をつけ、巧に變化を有しながら巧妙に連結し、細部は「唐様」の手法を巧に自由に用ひてゐる。外部の恰好は軒の反強く、輕快なる調子を有し、初期「唐様」建築の代表作の一つである。又祠堂と禮堂とを合の間で連結する形式は、權現造又は廟建築の先驅をなす點で注意を要する。安國寺も岐阜縣で、吉城郡國府村に在る。曆應年間足利尊氏が勅を奉じて建立し、經藏は明德元年の建築である。方三間、重層、入母屋造、柿葺で、「唐様」の簡単な建築であるが、内部の輪藏が珍らしい。八角形で中心の軸で回轉する様に出來てゐるが、これは現存最古の輪藏である。東福寺は京都市下京區本町通十五丁目に在る。嘉徳二年藤原道家によつて創建せられた禪宗の大伽藍で、京都五山の一つである。現在も各堂の配置整然たるものがある

建 築

建が、鎌倉時代のものは月下門一つで、三門、禪堂、東司、浴室等が當代に屬し、他は近世の再建である。三門再建の年代はよくわからないが、構造、様式の上から應永頃のものと思はれる。五間三戸の樓門で、上層の屋根は入母屋造、本瓦葺で極めて低い石壇上に立ち、左右に山廊がある。山廊中に階段があつて上れる様になつてゐるが、これは禪宗の三門に限られてゐる。大體「唐様」であるが、挿肘木を用ひた點は「天竺様」が入つてゐる。又組物が詰組でなく、疎組で、平組物を用ひ、扇垂木も二重目には使つてゐない。樓上の内部は禪宗風の彩色裝飾を施し、兆殿司の筆と稱されてゐる。全體の恰好立派で、三門として最古のもので、立派な作である許りでなく、室町時代禪宗建築中の傑作である。妙心寺は京都府葛野郡花園村に在る。延元元年、即ち當代の劈頭に創立せられた禪宗の大伽藍であるが、三門、勅使門が桃山時代の建築で、佛殿始め他は多く江戸時代に再建せられ、玉鳳院開山堂、同四脚

門、及び靈雲院書院(御幸間)丈けが當代のものである。開山堂は永亨六年に建てられ、三間四面、單層、入母屋造、本瓦葺の小建築であるが、「唐様」を自由に用ひてゐる。四脚門の事は前に述べた。向上寺は廣島縣豊田郡瀬戸田町に在る。寺は應永十年大通禪師の創立であるが、三重塔は永亨十四年に建てられ、大體「和様」の形式手法によつてゐるが、細部は「唐様」を用ひてゐる。三重塔としては唯一の例である。内部の柱、長押等に幾何學的模様、牡丹唐草等を、天井には天人を描いてある。

三 彫 刻

概 観

室町時代

彫刻は鎌倉時代の初期に運慶、定覺、快慶、湛慶の如く大家輩出し、復古的氣運を高め、幾多の傑作を遺したが、中葉以後は早くも技術頽廢し、名人も出でず、其のまゝ當代に至つて益々墮落し、衰微する

彫刻

許りであつた。これは彫刻家が師法を墨守し、舊格を守るばかりで、精神を忘れた爲めでもあるが、從來彫刻の題材として勢力のあつた佛教が衰へたのにもよるのである。併し他の方面で當代に勃興したものは、能面彫刻と、建築の裝飾彫刻とである。能面は能樂の流行につれて盛んとなり、其の大家もいで、傑作も出來た。又建築裝飾としての彫刻は、漸く當代より盛んとなり透彫、薄肉彫の外、丸彫を以つて建築を裝飾する事となり、次の桃山時代に至つて其の全盛を極める先驅となつた。

主なる彫刻家

當代の彫刻家は、京都を中心とし、四佛所がある。一つは定朝から三代目の院助から系統を引き、他の三つは運慶の子から出てる。即ち七條大宮佛所は院助の子院覺を始祖とし、院信、院乘、院勝などが出た。七條中佛所は運慶の子康辨を始祖とし、康吉、康永、康珍、大藏、康琳、治部卿、康秀等が出で、七條西佛所は運慶の子康勝を始祖とし、康榮、

室町時代

康秀、康清、康温等が出で、七條東佛所は、運慶の子運助を始祖とし、康祐、康俊等が出た。其の中著名なのは、中佛所の康永を始めとし、大宮佛所の院信、西佛所の康榮、康永の孫康琳、其の子康秀等である。康永は十七年の時、東福寺三門内の釋迦と二童子、建仁寺の本尊等を作り、院信は建武三年に東福寺佛殿の本尊釋迦像高さ二丈五尺のもの、脇侍聖觀音、彌勒其の他四天王等何れも高さ一丈二尺五寸のものを作つた。又康秀は應永二十七年、一遍上人、遊行上人の像を彫み、康琳は高野大塔の本尊胎藏界大日像を作り、康秀は總持寺釋迦脇侍文珠普賢及び大山寺の佛像を彫んだ。能面の彫刻は佛像彫刻とは別人の手になり、能面彫刻の名人が出た。即ち増阿彌福來、春若、寶來、千種、三光坊の六人が殊に秀で、六作と稱せられた。就中三光坊は文明頃の人で最も著れ、其の門から能面彫刻の三派を生じた。

越前出目派——二郎左衛門滿照(三光坊男)——二郎左衛門則滿

彫

近江井關派——上總介親信(三光坊弟子)——次郎左衛門

大野出目派——大光坊幸賢(三光坊弟子)

刻

佛像遺物

當代の佛教彫刻の遺物は相當澤山あるが、多くは墮落した作で、唯初期から中期にかけて多少見るべきものがあるのに過ぎぬ。其の主なものについて述べて置かう。法隆寺上堂の四天王像は、文和四年(一三五五)寛慶、順慶、幸禪などの作つたもので、面相誇大に失し、姿勢衣文は活動の状を現はさんとして却つて精神を失つてゐる。しかも當代初期のものとしては佳作である。東京帝室博物館の觀音像は、寶冠臺座完備し姿勢もよく、面相は當代の特色を有し、衣文流暢、頸から長く瑤珞をかけてゐる。全體に色漆を用ひて彩色した上に截金で模様を現はし、眼及び白毫に水晶を拵し、裝飾優美を極めてゐる。當代初期の代表作の一つであらう。猶同博物館には地藏像もあるが、矢張截金を施した裝飾優美の像である。法隆寺護摩

室町時代

肖像及神像遺物

堂不動明王二童子像は、康暦二年(一三八〇)舜慶の作で、作者年代の明かなものであるが、あまり優秀な作ではない。奈良縣北葛城郡王子村に在る達磨寺の達磨像は、永享二年(一四二〇)の銘がある。座像で面相巧に、衣文も流暢で、當代の佳作である。海龍王寺の愛染明王は、永享十二年の作で、高さ一尺三寸の小品であるが、木彫着色で、臺座も完備してゐる。猶法隆寺の五髻文殊像、白毫寺の司祿半迦像(奈良博物館陳列)、奈良箕輪寺の地藏像、金地院の地藏像、原六郎氏藏の地藏像(東京帝室博物館陳列)等も當代の代表的遺品である。

當代には肖像遺物が比較的多い。其の主なもの挙げると、先づ法隆寺護摩堂の弘法大師像は、應安八年(一三七五)慶秀、舜慶の作つた等身の座像で、面相に氣品があり、衣文も流暢に出來てゐる。前述の同堂の不動明王二童子よりも優れてゐる。金閣の義滿像、慈照寺東求堂の義政

彫刻

像、何れも寫生風に作られ、當代の肖像彫刻としては佳作である。足利學校の遺跡たる足利市昌平町の小學校に隣接した聖堂の内に置せられた孔子像は、天文三年（一五三四）の作である事が胎内銘でわかり、題材の上からも珍しいものである。尾張國分寺覺山和尚像及熱田大宮司夫妻像は三像とも寫生風の座像で佳作である。神像の遺物としては、熊本の藤崎八幡宮に女神像がある。これは應永二十五年の胎内銘があるが、或は修繕銘で、もつと古いものかもしれない。

其他の遺物

猶其の他の遺物として興味あるものが二つある。一つは東京府北多摩郡立川村に在る普濟寺の寶幢である。これは六角の石幢で、延文六年（一三六一）七月の銘を有してゐる。各面の高さ五尺五寸、幅一尺四寸、六枚の板石を圍つて作り、中は空である。六面には四天王及び仁王を彫刻し、風雨に曝されてゐるに係らず、精細な彫刻が割合によく残つてゐる。

室町時代

而して西方に面せる廣目天の右側に「延文六年辛丑七月六日、施財性了立、道圓刊」と刻まれてゐる。像は各散火焰付の圓光を負ひ、巖上に立ち、上部には寶珠、貝、天華等の七寶が配され、手法雄健、浮彫として珍らしい許りでなく、形も珍らしく、貴重の遺物である。滋賀縣三上村の御上神社にある牽馬人物木像は、恐らく當代初期のもので、馬の高さ七寸六分、後脚は缺損してゐるが、他は殆んど完全に残つてゐる。寫生風に作られ、今は剝落してゐるが、多分彩色を施したらしく、胡粉が残つてゐる。これは神馬を献ずる代りに彫刻として献じたもので、一種の風俗彫刻、又動物彫刻として珍らしいものである。最後に建築裝飾として用ひられた彫刻は、神社及び佛寺に多くの遺物がある。殊に末期になるに従つて豊富となり、次の桃山時代に最も盛んとなる事を示してゐる。其の最もよい例としては、建築の所でも述べた通り寶飯の八幡神社と土佐神社とを挙げねばなるまい。猶能面の遺物は工藝

繪 美術の項に譲る事とする。

畫

四繪 畫

概 觀

建築と彫刻とは、鎌倉時代が新様式を拓き新手法を生じ面目を一
新した後を受けて、室町時代は建築は繼承しただけで、彫刻の如
きは衰微し墮落して了つたが、繪畫は大に趣を異にし、鎌倉時代には大和繪
繪卷物を繼承したに過ぎなかつたのを、室町時代に入つては、新畫風を興し
名家輩出し、非常に活躍し、全く面目を一新した。即ち大まかに云つて鎌倉
時代を建築と彫刻の時代とするならば、室町時代は繪畫の時代である。その
繪畫は流派から云へば、前代を繼承した土佐派もあるが、最も勢力を振つた
のは新興の宋元派で、室町時代の宋元派と云ふよりは、宋元派の室町時代と
云つた方が適當する位である。先づ順序として從來の流派の消長を述べると、

室町時代

巨勢派は既に前代の初期から托摩派及び春日派に抑へられてゐたが、春日派
はまた土佐派に勢を奪はれ、同派で土佐派を學ぶものが多くなつて、當代と
なつては、大和繪の方は、巨勢派は勿論、春日派も衰へ、土佐派ひとり残つ
た。しかし其の土佐派も亦新に非常な勢で勃興した支那系の宋元畫派の下に
屏息せざるを得なかつた。略言すれば室町時代は、藤原時代から鎌倉時代ま
で榮えた大和繪が新興の漢畫に壓倒されて了つたのである。猶託摩派は前代
の末葉に榮賀が水墨畫を始め、これは大和繪と漢畫との間を行くものであつ
たらしいが、これも餘り振はないで、當代となつては宋元畫派に壓せられて
了つた。宋元畫派、即ち漢畫派は、前代末期に來朝歸化した元の僧一山が傳
へ、それと殆んど同時に可翁が出た。可翁は元に遊ぶこと十年、牧溪を學ん
で歸り、我が國に漢畫を輸入し、宋元畫派の端を啓いた人である。當代に入
つては、應永頃に如拙が現はれ、宋元派最初の大家として同派の價値を高め

た。それから周文、三阿彌、雪舟、雪村、祥啓等の大家輩出し、我が宋元畫派をして世界的價值あるものたらしめた。かくして當代末期に至り、狩野派の二世たる元信が出で、當時の土佐派の正統たる光信の娘を娶り、漢畫と日本の大和繪との結合の原因を作つた。蓋し元信は元來漢畫に秀で、居り、大和繪の風を取り入れたからである。而して此の和漢合體の新機軸によつて、狩野派が次の桃山時代から徳川時代に至るまで畫界に大勢力を持つ事になつたのである。

土佐派の
畫家、遺作

次に當代の主な畫家と其の著名な遺作とを挙げやう。先づ土佐派では、吉光の子行光の次に行廣がある。行廣は子行秀及び隆兼の子光顯の三子永春、寂濟、隆光と共に清涼寺の「融通念佛緣起」二巻を描いた。寂濟は六角繪所頭に補せられ、六角寂濟と云はれる。隆光は粟田口に住したので、粟田口隆光と稱せられる。其の遺作には横川元三大師像（叡山横川元

三堂藏)がある。又光顯の弟に隆成がある。京都市外花園村の春浦院に藏する「福富草紙」繪卷は其の筆と稱せられ、滑稽な物語を現はすに自由な筆致を以つてし、詞書は畫中に隨所に書かれてゐる。光顯、隆成は當代初葉の人で、他は應永頃までの畫家であるが、四五十年を経て、光信(一四三四—一五二五)が出で、しばらく振はなかつた土佐派の爲めに氣焔をあげ、子光茂も亦巧であつた。光信の遺作には、「清水寺緣起」(東京帝室博物館)、「石山寺緣起」五卷の内一卷(石山寺藏)、「多武峰緣起」四卷(談山神社藏)、北野緣起の内三卷(北野神社藏)、「百鬼百行圖」(大徳寺眞珠庵藏)、「竹生島祭圖」(東京帝室博物館藏)、「厩圖」屏風一双(本國寺藏)等があり、光茂の遺作には當麻寺の「中將姫緣起」がある。光茂の姉千代女も又光信に學んで巧に書き、光久と稱し、狩野元信の妻となつた。光信より少しく溯つて應永頃に明兆がある。東福寺殿司となつて南明院に住したので、兆殿司と呼ばれた。宋元畫と大和繪との

繪 畫

中間を行き、託摩派の殿將とも稱すべき人であるが、便宜上此處に述べた。其の遺作には、東福寺の十六羅漢圖、涅槃像、聖一國師像、達磨像、白衣觀音像、金地院の蝦蟇仙人圖等があり、外にも兆殿司筆と稱せらるゝものは多いが確かな作は尠い、東福寺法堂の蟠龍、三門の彩色裝飾も其の筆と傳へられてゐる。

宋元派の
畫家、遺物

宋元畫派として第一に來るのは如拙である。其の傳記の詳しい事はわからないが、應永年間相國寺に住してゐた事は確である。始めて宋元の畫風を學んだと傳へられてゐるが、其の確かな遺作は、京都府葛野郡花園村退藏院に藏する「瓢鮎圖」一つに過ぎない。此圖は「大相國足利義滿、僧如拙をして新様を座右の小屏に畫かしめ、江湖の群衲に命じ、各一語を著け、以て其の志を言はしむ」との題記を有し、周崇外三十名の讚がある。義滿は應永元年始めて相國に任じ、十五年薨じてゐるから其の間に描か

室町時代

れた事は確である。題材とする所の瓢を以つて鯰を捉えるといふのは禪宗の諧謔であるが、遠山には北宋の特色が現はれてゐる。蘆荻の單純にして竹の柔軟に過ぎるのはやゝ不調和であるが、兎に角如拙の眞筆として、將又北宋派最初の遺物として貴重のものである。次に久しく如拙の作と誤認せられてゐた文清印の畫が、福井東北帝國大學教授の研究によつて文清なる畫家の遺作として立證された。其有名なものは、原富太郎氏藏の「維摩詰像」とボストン博物館藏「山水圖」とである。如拙に學んで出藍の譽あるものは周文である。應永永亨頃の人、初め江州山上永源寺に居り越溪と號した。相國寺に入つて都司となつた。「本朝畫史」によれば、淡彩山水人物花鳥は馬、夏、顔の法を用ひ、墨畫は牧、玉の奥を極めたとある。後の雪舟、宗丹も之れを師とした位で、北宋畫の眞髓は周文によつて始めて會得せられたのである。周文は又彫刻に秀でゝゐた事が種々の記録にあるが、其の遺作は一つもない。禪

繪 畫

學の修養も頗る深く、雪舟と共に當代の畫僧として最も修禪に名が高かつた。遺物として有名なものは、「竹齋讀書圖」(東京帝室博物館)、「四季山水」六曲屏風一双(越前松平家)、「四季山水」襖繪(大德寺塔頭養徳院方丈)、「山水圖」(蜂須賀侯爵家)、「寒山拾得圖」(津輕伯爵家)、「三益齋圖」(岩崎男爵家)、「秋日暮景圖」(藤田男爵家)等である。中で山水圖としては、東京帝室博物館のものや蜂須賀侯爵家のものが最も傑れてゐるが、岩崎家の「三益齋圖」は瀧博士の發見に係り、前二圖にも増した傑作である。猶同家には四季山水屏風一双もある。津輕家の寒山拾得は、確證はないが從來周文と傳へ、表情の巧妙にして衣袂の手法の輕妙なる、多くの「寒山拾得」中の傑作である。同じく如拙に學んだと傳へられる畫家に秀文がある。これは古來周文と同人であるといふ説と別人であるといふ説とがあるが、別人とする方が正しいらしい。多くの文献は明から歸化した者とし、李秀文と稱し、中には曾我氏の婿となり

室町時代

蛇石が其の子であるとしたものもある。又永祿中兵亂を避けて飛驒に入り石浦村に寓し、飛驒秀文と稱されたと云ふ記録(後風土記)もあり、今も同地に遺跡が遺つてゐる。其の作品は從來あまり見られなかつたが、近頃に至つて岩崎男爵家の「花鳥圖」が瀧博士によつて紹介せられ、飛驒の富田豊彦氏藏「山水圖」が『名品綜覽』第一集第一篇中に收められた。共に落款があり、朝鮮畫に似た點もあるが、猶研究を要する。周文を學んだ者で名高いのは、眞能と小栗宗丹とである。眞能は通稱能阿彌、鷗齋又は春鷗齋と號した。東山時代初葉の人で、義政將軍の童朋となり、殿中裝飾の事を司り、書畫器物の鑑識を職とした。又點茶、聞香、林泉造庭の事にも通じ連歌もよくした。其の遺作として有名なものに、妙心寺の「山水」屏風一双、大德寺孤蓬庵の「中達磨左右盧雁」の三幅對、同じく「寒山拾得」の双幅、淺野侯爵の「水月觀音」、井上侯爵の「秋若鶴鴿圖」等がある。眞能の子に眞藝、孫に眞相がある。藝阿

繪 畫

彌、相阿彌と稱し、父子三代で三阿彌と云はれてゐるから、時代は漸次下るが茲に續けて述べる。眞藝は通稱、藝阿彌學叟と號した。父の能阿彌について義政將軍の童朋となり、同じやうな事を職とした。畫も巧であつたが、其の手法は父又は子相阿彌とやゝ異り勁い所がある。其の作品は頗る尠いが、郷男舊藏の「觀瀑僧圖」は代表的傑作で、先頃賣立の際三十數萬圓の高價が附せられ、世間的にも頗る有名のものとなつた。此畫は祥啓（啓書記）が文明十年（一四七八）京に上つて藝阿彌に學ぶ事三年、其の去るに當つて描いて祥啓に與へたもので、その事が上に横川によつて書かれてゐる。これによつて祥啓の畫の淵源も窺ふ事が出来る。南禪寺塔頭天授庵の「楊柳觀音圖」も眞筆とされてゐる。眞相は通稱相阿彌、鑑岳又松雪齋と號した。義政の童朋たる事兩阿彌と同じく、此境遇に祖父以來の遺傳と教育とが加はつたのであるから、製作的方面にも鑑賞的方面にも優秀なる頭腦と手法とを得た事は寧ろ當然で

室町時代

あらねばならぬ。其の畫は父祖の風の上に支那南畫の趣を加へ、獨特の境地を拓いた。又點茶聞香の道にも長じ、後世香道に相阿彌流なるものを生じた。鑑識は父祖傳來の職業であるが、これも一層の精を加へ、東山殿中の名畫名器の鑑題に筆を執つたもので今日に傳つてゐるものが多く、これを東山御物の證左としてゐる。又其の門下及び知人の參考に資する爲め書畫器物等殿中の什寶に關する覺書を記したものがあつた。「君臺觀左右帳記」が即ちこれで、今日に至る迄鑑定鑑賞のオーソリテイとされてゐる。相阿彌は更らに林泉造庭に長じ、我が造庭術に一時代を劃した造園の大家である。而して其の遺作たる龍安寺の石庭（初期）、銀閣の庭（中期）、及び大徳寺大仙院の庭（後期）は我が庭園の傑作である。繪畫の遺作として有名なのは、大仙院の「山水」襖繪大八枚中四枚小八枚を始め、瀟湘八景は岡崎正也氏、前田侯爵、徳川伯爵、福岡子爵、守屋孝藏氏藏等があり、淺野侯爵家の「寒山拾得」、九鬼男爵家

繪 畫

の「仙人騎驢圖」も代表作である。小栗宗丹（一三九八—一四六四）は常陸小栗城主小栗滿重の子、名を助重と云ひ小二郎と稱した。落城後一旦鎌倉に遁れ、後落髮して宗丹と號し、相國寺に入り、晩年は大徳寺に住した。周文を師とし、牧溪、馬遠、夏珪の風を慕ひ、畫で將軍に仕へた。遺作の明かなものが殆んど無い。曾我蛇足は前に述べた通り李秀文の子だとも傳へられてゐるが、又越前の武臣の出とも稱される。周文を師とし、大徳寺に住した。其の畫風は豪放にして奇抜の點がある。遺作は大徳寺眞珠庵に「著色苦行釋迦像」（康正二年（一四二〇）—一五〇六）と單彩の「臨滿和尚像」（一休和尚贊）、山水圖障子畫がある。次に愈々畫聖雪舟（一四二〇—一五〇六）について述べる順序となつた。雪舟は備中赤濱に生れ、俗姓小田氏、名は等揚、雪舟は其の號で、別に備溪齋、末元山主、漁樵齋、雲谷等の號がある。天性畫を好み、幼い時寺に入れられたが、經卷を捨て、畫を描き、師僧の訓戒に従は

雪舟

室町時代

なかつた。壯年となつて京都に出で相國寺に入り、洪徳禪師の弟子となり、又鎌倉に赴いて建長寺の玉隠永瑛に參し、漁樵齋の號は此時師永瑛が與へたものである。此の頃までに如拙、周文を學び、更らに自己の工夫を加へて一家の風をなしてゐたが、寛正四年足利幕府が僧清啓を遣唐使として明にゆく時、年四十四歳にして之れに従ひ明に赴いた。明では名山大川を目睹して大に氣宇を闊き、四明山に登つて天童第一座となつた。明に在る事數年、己を導くべき師がないので、名山大川を師とし、各地を巡遊し、特に西湖の風景を愛して之れを寫し、益々上達した。そこで明の人も雪舟の技に感じ、禮部院の壁畫を依頼し、又明人の爲めに富士、三保、清見の三景を描き、明の鴻儒魯仲和が其の畫に長律一篇を贊したのは有名の話である。在明六年にして文明元年歸朝するに際し、四明の徐漣、爲めに送別の詩を作り、其の技を賞した。歸朝の後豊後府内に天開閣畫樓を起し、續いて山口天華山に雲谷軒を

作つて住し、晩年は石見益田萬福寺大喜庵に移り、永正三年八月八日八十七歳で歿した。雪舟の技は明に遊び、宋元畫の精髓を會得すると共に明の大自然に接して或は形を寫し、或は意を現はし、花鳥人物風景すべてに長じたが、山水は殊に巧に、古今獨歩、以つて我が國第一の畫聖とするに足るものである。其の氣格の豪宕にして、手法或は嚴正に、或は放膽なる破墨法を用ひ、墨の藝術としては極致を示したものである。山水畫として傑作中の傑作は毛利公爵家藏の「山水畫卷」で、黒田、淺野兩侯爵家にも各一本がある。曼珠院の「夏冬山水」も代表作である。破墨山水は東京帝室博物館のものを代表作とし、人物畫としては、本法寺の「釋迦十六羅漢」、愛知縣齋念寺の「惠可斷臂之圖」、益田兼施男藏の「益田兼堯壽像」、花鳥畫としては柳澤伯爵家藏の「花鳥双幅」などがある。可なりの多作家であつたが、僞筆の多い事も驚くばかりである。祥啓は貪樂齋又雪溪と號した。宇都宮に生れ、鎌倉建長寺の書記と

なつた爲め啓書記と呼ばれてゐる。牧溪を學び文明十年京都に學んだ時藝阿彌その作を見て通常の畫家でない事を知り、藏する所の名畫を模寫せしめ、又自ら藝阿彌の畫法を得了し、居る事三年で歸る時藝阿彌の描いて與へたのは、前述の「水月觀音」である。祥啓の遺作の有名なものに、妙心寺靈雲院の「靈雲禪師觀桃圖」、毛利公爵家の「中觀音左右淵明李白」三幅、上野精一氏の「海中文珠」、南禪寺の「達摩像」、秋元子爵家舊藏の「瀟洒八景」、根津嘉一郎氏及原富太郎氏の「山水圖」、宮本仲氏の「布袋」等がある。雪舟に従つて明に入つた畫家に秋月がある、雪舟に似た畫風であるが、柔味がある。伊達宗光男の「山水圖」、岸本吉左衛門氏の「瀑布圖」などその代表作である。雪村は常陸に生れ、始め同郷の畫家洞雪に學び、更らに周文の筆意を慕ひ、又雪舟に私淑し、雪村と號した。中頃以後進んで宋元名家の遺墨を究め、遂に一家を成した。其の作は基く所は雪舟に在るが、其の筆勁健にして生氣畫面に漲

繪 畫

り、構圖奇抜で氣魄があり、飄逸の趣は寧ろ雪村の繪に見られる。室町時代の末葉を飾り、戦國時代を代表する唯一の巨匠である。其の遺作としては、井上侯爵家の「山水畫卷」、瀟湘八景、東京美術學校の「花鳥」双幅、「柳鷺圖」六曲一双、佐竹侯爵家の「風濤圖」、曼珠院の「松鷹圖」、三井八郎右衛門男の「龍虎圖」、益田男の「呂洞賓圖」、原富太郎氏の「竹林七賢圖」、牧野伯爵家の「七隱士山行圖」等有名である。

狩野派の畫家、遺物

以上はすべて宋元派、即ち漢畫派であるが、茲に又漢畫派から出て之れを日本化し、別に一派を樹てた畫家がある。これ即ち狩野元信である。而して元信の父に正信がある。正信は出羽二郎藤原景信の長男で、通稱は四郎二郎、代々伊豆國加茂郡狩野村に住んでゐたので狩野を氏とした。初め宗丹に學び、後周文についた。畫道を以て義政將軍に仕へ、越前守式部大輔に任ぜられ、薙髮して祐清と號し、法眼に叙せられ、それから子

室町時代

孫代々業を襲ぎ、室町將軍家に仕へ、近侍となつた。正信の漢畫家としての位置は、前記の諸家に比して劣るけれども狩野家の始祖として著名なのである。其の遺作には秋元子爵家舊藏の「山水圖」双幅、伊達伯爵家舊藏の「周茂叔愛蓮圖」等がある。元信（一四七八—一五五九）は即ち正信の長子で、文明八年、雪舟が明から歸朝して既に八年、其の技全く圓熟した頃に生れた。四五歳の頃から畫を好み、人物鳥獸草木など、見るものを描き、奇童と稱せられた。十歳の時既に其の技を以つて義政の近侍となり、延徳二年義政薨じて後、將軍義澄に仕へ、永正二年其の薨するに及んで畫筆を載せて諸國を遍歴する事數年、京に歸つてから再び將軍義澄に仕へ、名を大炊助と改め、土佐光信に代つて繪所頭に補せられ、越前守となつた。それより先き光信の娘たる千代女と結婚し、光信の子光茂が幼年だつたので後見をした。斯くして漢畫派の元信は、土佐派即ち大和繪と血族的に合體したのである。其の後將

軍義時の命によつて剃髮し、法眼に叙せられ、永仙又玉川と號した。後に古法眼と稱せられる。元信も始めは牧溪、夏珪、玉澗等から我が北宋派のものを學んだが、後には土佐派の題材及び手法を加へ、漢畫の日本化を試みて成功した。雪舟は漢畫派の泰斗であるが、元信は之れを日本化し、次の桃山時代に大活躍を示す狩野派の基をなした大家である。故に元信を以つて雪舟につぐ室町時代の大家とするのである。其の遺作には妙心寺靈雲院に「山水花鳥樓閣」四十九圖がある。これは元信が妙心寺開山大休國師に參して教を受けた時、靈雲院に起臥し、閑に乗じて障壁に描いたもので、今は掛軸となつてゐる。元信の傑作中の傑作である。外に東海庵の「瀟湘八景」、大徳寺大仙院の著色「花鳥圖」襖貼付八枚、嵯峨清涼寺の「釋迦緣起」五卷、池田侯爵家の「大江山繪詞」三卷、西脇濟三郎氏の「花鳥圖」六曲屏風一双、兵庫縣加茂神社の「神馬圖」額等が代表的のものである。就中大仙院の花鳥圖は、濃麗の彩色

繪卷
肖像畫

を以つて巨松と飛瀑とを描き、其の間に水禽を配し、華麗にして豪宕、實に桃山時代の豪華な花鳥畫の先驅をなすものである。又「釋迦緣起」と「大江山繪詞」の二つは繪卷物で、漢畫の日本化を具體的に示す好例である。元信の弟に雅樂助之信がある。父正信に學び、又漢畫の諸家を學んで山水人物花鳥の大作に長じ、元信に似てゐる。其の遺作には大仙院の襖繪が有名である。無印のものは元信の作と誤まれる事がある。猶當代の漢畫家としては、一休、土岐洞文、鑑貞、宗栗（宗丹の子）、周耕（雪舟に從つて明に遊ぶ）、等春、楊月、等譽、山田道安等がある。其等の遺作はあまり多くないが、山田道安の「鐘馗圖」（鎌倉圓覺寺、及東京帝室博物館藏）などは興味あるものである。鎌倉時代に續いて繪卷の遺物が相當にある。其の主なものには前に土佐派として挙げた外に「破來頓寺繪卷」（徳川義親侯）、「東北院職人歌合」（曼珠院）、「直幹申文繪詞」（酒井忠興伯）、「土蜘蛛草紙」（東京帝室

繪 畫

博物館)、「佛鬼軍繪卷」(十念寺)、善教房繪卷(西脇濟三郎氏)、「市屋道場一遍上人繪詞」(高橋是清氏舊藏)、「祭禮草子」(前田利爲侯爵)、「矢田地藏緣起」(矢田寺)、「道成寺緣起」(紀州道成寺)等がある。又肖像畫にも佳作が多い。其の例としては、「花園天皇御影」(長福寺)、「金澤貞顯像」(稱名寺)、「大燈國大師像」(大徳寺)、「足利尊氏像」(愛知地藏院)、「足利義持像」(神護寺)、「玉隠和尚像」(明月院)、「宗祇法師像」(南部伯爵)等がある。又佛畫には、高野山寶壽院の「地藏菩薩」、妙澤筆「不動明王像」(東京帝室博物館)などがある。併しすべて鎌倉時代よりも繊細、華麗となり、精神は弱くなつてゐる。所詮室町時代の繪畫は漢畫派によつて價值づけられてゐるのである。

五 工 藝 美 術

概 観

當代の工藝美術は、前代に引續いて武士全盛の爲めに甲冑、刀劍の製作盛んに其の名人も現はれた。又東山時代には貴族生活が行はれた爲め漆工が非常に發達し、其の技巧も頗る進歩を示した。次に前代から始まつた茶道が當代に至つて隆盛を極めたので、茶道具の需用を増し、茶の湯釜、茶碗の製作が盛んとなり、金工、陶工の發達を促した。殊に東山殿中の名器は當代工藝美術の粹であつて、今日までも珍重されてゐる。須彌壇と厨子も前代に引續いて作られた。次に工藝の種類に従つて主なる遺物を擧げるに先立つて、一群の遺物は、明德元年(一三九〇)十一月、將軍義滿が日本第一大靈驗所根本熊野三所權現へ寄進した御神輿、御幸船を初め、同年調進の十二の手筥、檜扇、劍其の他の調度である。この中には手筥の外部が漆工、内部が織物、御神輿及び御幸船が金工、木工、神眼が染織等、各種の工藝も代表的作品を含んでゐる。

厨子及び須彌壇

厨子及び須彌壇の遺物には、東禪寺薬師堂厨子及須彌壇、三佛寺文珠堂厨子、常樂寺本堂厨子及須彌壇、鶴林寺本堂厨子、會津中央薬師堂厨子及佛壇、瑠璃光寺五重塔須彌壇等がある。中で東福寺の厨子及須彌壇は、共に「唐様」で、厨子の下部や須彌壇の腰には優秀な唐草彫刻を有し、上部には花形をつけてゐる。三佛寺文珠堂の厨子は「和様新派」で、線形及び蒸股が面白く、扉には桐の紋をつけ、金具を打つたのは珍らしく、寧ろ次代の神社建築に盛んに行はれたやり方である。常樂寺の厨子は二重の疎垂木を用ひ、垂木に線形がある。垂木に線形を施した最古の遺物である。鶴林寺の厨子は其の本堂の如く「和様」と「唐様」とを巧に調和し、會津薬師堂の厨子は「唐様」である。瑠璃光寺五重塔の須彌壇も「唐様」で圓形なのが珍しい。

金工

甲冑は藤末時代の末期に現はれた明珍家が鎌倉時代を経て當代に續き、多くの名人を出してゐる。中にも十代の宗安は將軍義滿の

爲めに白星金甲及唐綾威の鎧を作り重祿を賜はつた。初代から此の十代までの作を明珍家十代の作と稱して世に珍重せられる。十四代義長も名工で、十六代義保の弟義通、子信家と共に三作と稱せられる。義通は十七代で大永、亨祿頃の人である。信家の名作には、諏訪法性の甲、三十二間富士山甲、六十二間勝山甲などがある。明珍家の外には、早乙女を名乗るものがある。中で信康は明珍信家の弟子で、他には家次、家親等がある。此の子孫は次代に至つて水戸家に仕へ代々甲を作つた。遺物としては、天文十一年（一五四二）大内義隆が嚴島神社に奉納したものが同社にある。藍革赤威で、裝飾模様は波に龍を配した意匠で頗る立派である。奈良の春日神社に藏する鍍金蝶梅金物緋威大鎧は南北朝時代の作品で、模様の意匠、手法とも頗る傑れてゐる。兩者とも國寶となつてゐる。猶義通及信家の作つた兜鉢も遺つてゐる。刀劍は前代に吉光、正宗、義弘等の名匠が現はれたが、未だ裝飾には意を用ひな

かつた。然るに當代末期に至つて名人後藤祐乗が出で、將軍義政の命で刀劍の裝飾をなし、法橋となり、元信の下繪によつて彫刻し、更らに法印に陞せられた。祐乗の遺作は俱利伽羅龍の目貫、小柄、筭、濡烏の目貫等が前田侯爵家に遺つてゐるが、其の手法卓抜にして、得意の龍などは殊に活躍して居り、目貫としては比類なき傑作である。二代宗乗、三代乗眞も亦祐乗に亞ぐ名人で、乗眞の遺作には前田侯爵家に蓬萊の小柄がある。刀劍の附屬品たる鍔の製作も亦重ぜられ名人が出た。義滿將軍の頃、三條小鍛冶宗近の子孫に重吉があり、劍工であつて鍔の製作にも長じてゐた。やゝ遅れて宗近十九代の孫と稱する埋忠重忠があり、初代金光、中井光恒なども名工で、劍工たる明珍信家は鍔にも名作を遺した。光恒は長州萩の鍔工の祖である。鏡は當代にも多く作られた。其の遺作には、熊野神宮の白銅架菊文鏡、大國魂神社の雙鶴秋草鏡、故野中完一氏藏の双雀蓬萊鏡、長生殿鏡、故竹内久一氏藏の龜鶴

竹垣鏡、廣瀬都異氏藏の御料桐竹文御鏡（青家次作）などがある。意匠は多少繁鎖の嫌はあるが、茲に挙げたものはとりどりに面白い。茶釜は筑前蘆屋が有名で、義政は土佐光信に下繪を描かして蘆屋に鑄造せしめ、蘆屋の鑄工は雪舟の下繪を求めた。永正以前のもものを古蘆屋と云つてゐる。又下野の天明からも名釜を出し、天文以前のもものを古天明と稱する。この外浪越彌七郎と云ふ名人があつて、義政に仕へ茶釜を鑄造し、薙髪して彌阿彌と稱した。古蘆屋、古天明、彌阿彌等の釜は現存するもの少く、東山物と稱へて今も珍重されてゐる。東京帝室博物館には古蘆屋作の五疋馬模様の釜があり、銀閣寺には義政の使用したと傳へられる彌阿彌作のものがある。前者の馬の模様おもしろく、後者の菊水の模様も自由で巧に出来てゐる。金燈籠は鐵製に法隆寺繪殿前のもものと嚴島神社の釣燈籠とがあり、銅製に吉野藏王堂のもの、高野山御影堂のもの、舊千葉寺（東京帝室博物館現藏）の釣燈籠などがある。

法隆寺繪殿前のものには貞治二年の銘があり、千葉寺舊藏のものには天文十年の銘がある。後者の火袋の扉は竹と梅の模様の意匠がすぐれてゐる。猶金工として、丹後成相寺の孔雀文磬と京都要法寺に渡金寶相花唐草透彫の經宮（天文廿四年在銘）がある。

漆 工

漆工は當代に至つて大に發達し、高蒔繪及び梨子地の製法が完成した。從來の研出平蒔繪は、藤原時代以後の大和繪風の優美な意匠を現はすには適してゐたが、當代の宋元風の強い畫風を現はすには自ら高く肉を盛り上げる必要上、高蒔繪が行はれ始めたのである。これは蒔繪としては濃厚なものである。尤も禪宗や茶道の趣味から淡泊なものが要求され、高蒔繪とは反對に、軽く薄く蒔繪をする事も行はれた。梨子地は藤原時代にも平塵と稱されて多く行はれたが、それは平目地で、眞の梨子地は前代末から現はれ、當代に至つて完成されたのである。漆工の名人には奈良の秀次と

其の子孫がある。秀次は紹鷗に従つて多くの棗を作つた。泰阿彌、清阿彌も名人と稱された。羽田五郎は京都妙覺寺法界門の近傍に住んでゐたので、其の作を法界門塗と稱した。幸阿彌道長は將軍義政の近習で、土佐光信の下繪を用ひ、平蒔繪にも高蒔繪にも長じ、二代道清、三代宗全、四代宗正、五代宗伯相繼いで父祖の業に従事した。又五十嵐信齋も義政に仕へて蒔繪を作り、子孫其の業を繼いだ。遺物の主なものにまづ御物蔦細道文臺及び硯箱がある。在原業平が駿河國宇津山を超え、蔦紅葉の茂つた細道で、僧の修業者に會ひ、歌を詠んで京の人に消息を頼んだ意を現はしたもので、高蒔繪完成期の好標本である。嚴島神社の梅唐草蒔繪文臺及び硯箱は、大内義隆が同社へ奉納したもので、黒漆の梨子地へ梅花及び梅唐草を蒔繪とし、意匠は單純であるが、梨子地は當代に完成された一例となり、蒔繪も傑れてゐる。東京帝室博物館の獅子牡丹蒔繪圓形硯箱は、義政將軍の遺愛品と傳へられるもので、金梨子

地の墨塗の蓋の表面に獅子と牡丹、裏面に牡丹と蝶とを蒔繪とし、表面の意匠豪放、裏面は優美で、東山時代の佳作である。同じく博物館蔵の扇面蒔繪手筈は、蓋の表面を蠟色に塗り、扇面には「しほの山さし出の磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞなく」の意を葦手模様で蒔繪にあらはし、裏面には草花の散し模様を蒔繪としてゐる。此の意匠は藤原時代から引つゞいて日本風のもので頗る優美に出来てゐる。猶此の外に熱田神宮の蓬萊蒔繪鏡、菊蒔繪手筈、速玉神社の桐唐草手筈、東京美術學校の月に千鳥蒔繪合子、松平伯爵家の牡丹唐草蝶蒔繪手筈などがある。

陶 工

陶工は前代から稍々興つて來たが、當代に至り茶道の隆盛に伴ひ大に發展するに至つた。即ち珠光、紹鷗等各々陶工をして其の好みの茶器を作らしめた。又伊勢松坂の五郎太夫祥瑞しんぐいは、文龜、永正の頃支那に渡つて始めて磁器を作る法を學び、永正十年（一五一三）歸朝し、肥前今里

に窯を開いた。その作品には吳祥瑞、又は五郎太甫祥瑞といふ銘がある。猶當代に行はれた各窯について簡単に述べやう。近江の信樂窯は、前代に開けた窯で、一種の陶器である。其の質陶土に透明の小砂を含み非常に堅硬である。其の釉藥は濁黄赤色を帯ぶるもの、淡青色を呈するものがある。これを古信樂と云ふ、永正年間始めて茶器を作り、紹鷗大に之れを愛し、紹鷗信樂と云はれてゐる。尾張の志野窯は、文明年間義政將軍の臣に志野宗信といふ香道と茶道の數寄者があつて、瀬戸の工人に命じて茶器を作らしめ、之れを愛玩したので志野焼の名が出来た。一種の砂器で、白くして小龜裂紋があり、上に花卉を描く。備前窯は應永年間に長足の進歩をなし、當代末葉から花瓶、茶器類を作り始めた。これを古備前と稱へ、陶質最も堅硬緻密である。唐津窯は建武頃から文明年間までに出来たものを根拔と稱する。白土又は赤土を用ひ、釉色は鉛色である。文明から天正の間に出来たものは奥高麗と稱し、

高麗の茶碗を模したものである。釉は黄色又は青黄色である。京焼の一種たる樂焼は、永正中阿米夜と云ふ者歸化し宗慶と稱し、始めて樂焼を作つたが、幾何もなく歿して其の妻尼となり、夫の法によつて焼き、尼焼と呼ばれた。樂焼の名は次代に其の子長次郎の時から起つたものである。以上の陶磁器は相當に遺つてゐる。古今里、備前なども可なりあり、五郎太甫祥瑞の銘ある壺や古碗も東京帝室博物館に在る。

石 工

石工としては石燈籠が最も多く、石獅子などもあるが、茶道及び庭園の發達に伴つて手水鉢が多く作られ、美術的のものが出來た。石燈籠の遺物は澤山あるが、常樂寺本堂前のは比較的大きく、笠石、火袋、竿石の比例よく、銘はないが當代末期の作と思はれる。手水鉢の一例として慈照寺の本堂と東求堂との間にあるものは、各面二尺二寸五分の方形で、高さ二尺三寸五分、殆んど眞四角に近く、側面には一種の變り格子を作り出し、

上方に圓く水を入れる所を彫つてある。豪宕な内に微妙の變化を有し、手水鉢としては頗る卓抜の意匠である將軍義政の遺愛品と稱せられ、數寄者の間に珍重され、此の形式を模したものを銀閣寺形手水鉢と稱してゐる。

能 面 及
其 他

能面作家の事は彫刻の項で述べたが、初期中期を通じて、最も秀でた者十人を選び、之れを「十作」と呼んでゐる。「六作」は東山時代の面工で十作の次に現はれた。十作の中の代表作には、赤鶴作の「武悪」(これは狂言面である)、龍右衛門作の「中將」がある。六作の中の代表作としては、實來作の「小面」及「大天神」、三光坊作の「笑尉」、春若作の狂言面「祖父」等がある。最後に染織物は未だ發達せず、唯支那から輸入した明國の染織物によつて表具などが試みられ、今日も珍重されてゐる。又例の義満から熊野權現へ寄進された調度の中には、薄様襲御衣、御薄衣、御單衣、御唐衣、地摺御裳等の神服があつて當時の染織の有様がわかる。

六 室町美術の特色と價値

模倣時代の
の繼續

室町時代は、鎌倉時代につゞいて模倣時代で、即ち兩時代によつて第二次模倣時代を作つてゐるのであるが、其の内容は大に趣を異にしてゐる。即ち模倣の對手は宋から元に變り、更らに明に及んでゐる。尤も明の影響は寧ろ次の桃山時代又は江戸時代に現はれてゐるが、とにかく鎌倉時代とは趣を異にしてゐる。而して美術の種類から云つても、室町時代に最も著しく模倣の實を示したのは繪畫であつて、宋元畫模倣の最高潮に達し、彫刻は振はず、建築は鎌倉時代の繼續を主とし、他は却つて日本趣味を帶び來り、即ち同化の傾向を高めた。例へば庭園建築の如き最も其の著しい例で、神社建築、住宅建築、茶室建築にも其の傾向が現はれ、宋元畫派でさへ最後には大和繪と合流し、次の桃山時代が立派な同化時代となる前兆を示

してゐる。

五つの
特色

更らに室町美術の特色を約言すると、第一は前述の如く模倣時代であることである。第二は繪畫に於いて模倣時代たる事を最もよく示した事である。第三は庭園建築の出現した事である。第四は神社建築に多くの變態を生じ、且つ裝飾として彫刻を應用する風の盛んになつた事である。第五は義滿及義政によつて再び貴族的色彩が濃厚となり、茶道の隆盛と相待つて一種の尙好を生じ、殊に東山時代としての一特色を作つた事である。

價値ある
繪畫、建築

室町美術には以上の如き特色があるが、其の價値として第一に擧ぐべきものは宋元派の繪畫である。それは宋元の様式、手法を傳へたもので、所詮模倣藝術ではあるが、我が國に於いて畫聖と稱される雪舟を始めとし、如拙、周文、三阿彌、其の他多士濟々として輩出し、宋元の名家とは又違つた趣を發揮し、他時代に見られない特殊の價値を有つもので、

或はこれによつて室町美術の価値を高めてゐると云つても過言でない。又當代繪畫の最後を飾るものは、漢畫と大和繪との結合で、それは狩野元信によつて試みられ、獨創的価値と、桃山時代に絶大の価値を發揮した狩野派の祖としての史的価値を有するものである。しかもこれは模倣時代から一轉して同化時代に入る最初のものとしての価値を有し、金閣、銀閣によつて代表せらるゝ庭園建築に至つては、既に日本趣味に富む美術として、又他の時代にならぬ特殊の建築として大なる価値を有する。猶種々の變態を示した神社建築も相當の価値を有し、これに應用せられた裝飾彫刻は、桃山時代に最高潮に達する前提としての価値を有する。漆工、陶工、石工等も東山時代を中心として貴族趣味の横溢と茶道の隆盛に伴ふ反映として、価値あるものを製出し今日所謂東山時代のものとして珍重されてゐる。

第十章 桃山時代

一 時代の 大勢

概 観

桃山時代は、前の室町時代の末葉、所謂戦國時代の終に當つて織田信長が出で、足利氏は第十六代義昭を以つて滅亡した其の年、即ち天正二年（一五七四）に始まり、豊臣秀吉を経て秀頼となり僅かに四年、徳川家康が征夷大將軍となつた年、即ち慶長八年（一六〇三）を以つて終る。これを桃山時代と稱するのは、秀吉が伏見桃山に居城を築いたからで、或は信長が安土に城を築いたので安土桃山時代と云ひ、又織豊時代と稱する學者もある。其の長さ僅かに二十九年間であるが、始めの數年は未だ戦國時代の繼續で、その後の二十年が秀吉の時代である。しかもその二十年間に天下を統一し、外には兵を朝鮮に出し、大明さへも討たうとする壯圖を有し、内には大土木を起して、或は大阪に築き、京に聚樂の邸を構へ、また桃山に築き

桃山時代

北野に大茶湯を行ひ、醍醐に花見を催すなど、武事と風流と併せて其の英雄主義を發揮し、爲めに斯かる短時日で前代に比類なき美術上の一時代を作つたのである。時代は英雄を生み、英雄は時代を作るといふのは秀吉の如きに當はまる言である。而して其の英雄主義は美術にも現はれ、豪華な桃山美術を作り出した。この點で私は單に桃山時代と云ふのが最も當つて居ると思ふ。しかも家康が征夷大將軍となつた後も、桃山風の特色は、なほ美術界を風靡し、少くとも慶長の末葉、即ち十五年（一六一〇）頃までは純桃山風である。よつて本書は時代の境界として慶長八年をとつたが、遺物を述べる際は十五年頃までを含めるつもりである。何れにせよ三十年の一時代であるから初期末期の別を設ける要はない。

外交

當代は支那では明の神宗の時に當り、初は相當に交通もあつたが、秀吉が朝鮮を打つに及んで、明は朝鮮を援けた。従つて明と我れ

とは敵視する形となつたが、初めから秀吉は朝鮮を従へて、明を討たうといふ計画であつた。しかし朝鮮に於いては相當武威を赫かしたが、明を討つ事は實現されなかつた。たゞ文化は往々にして征服者が被征服者から影響を蒙る。かの亞歴山大王は、印度まで侵入して、却つて東洋文化の影響を受けた。我が國も朝鮮を攻めて朝鮮文化の影響を受けた事が尠くなく、明の影響さへも朝鮮を経て間接に受けてゐる。又歐洲との交通の曙光が現はれたのも此時代である。英人は既に永祿七年（一五六四）來つて通商を乞うてゐるが、葡萄牙船が始めて長崎に來たのは元龜元年（一五七〇）で、翌年も亦來つて貿易をなし、英船は天正八年（一五八〇）平戸に來つて貿易し、同十年には大村有馬が使を羅馬に遣し、大友宗麟は使を葡萄牙に送つてゐる。又文祿元年（一五九二）には葡萄牙船及び西班牙船が來つて貿易を乞うてゐる。斯くの如く歐洲との通商が始まつたのであるが、同時に傳來した天主教を禁止した事から、

漸く始まつた歐洲との交通は殆んど断絶して了つたのである。

佛教
天主教

前代末から當代初へかけ、戰國時代の禍を受けて佛教寺院の焼かれたものが多く、佛教そのものもやゝ衰微に傾いたが、秀吉は秀頼と共に盛んに寺院を再興し、秀吉自ら方廣寺の伽藍及び大佛を創立し、延暦寺を再興し、浄土宗始め再び勢を恢復した。眞宗の本願寺派は、蓮如上人を中興の祖とし、實如、證如の二上人を経て顯如上人の代となり、本願寺を準門跡とした。此の證如上人の時が室町末から桃山時代にかゝり、信長と戦つたが遂に和し、天正十九年京都堀河に寺地を開き、文録元年十一月祖堂を建てた。これ今の本願寺である。天主教の傳來したのは天文十八年であるから前代の末葉で、當時は肥前の平戸に外國の宣教師によつて會堂が建てられたに過ぎなかつたが、當代となり信長は京都四條に土地を興へて會堂を建立し、これを永祿寺と稱し、後に南蠻寺と改めた。茲に於いて天主教は九州は

かりでなく、近畿地方にも行はるゝに至つたが、天正十五年秀吉は之れが禁止を企圖し、慶長十八年家康によつて嚴禁さるゝに及びつひに發展の途を失ひ衰微した。

文學
茶道

文學は前代の中葉以後に於いて平民文學、通俗文學が行はれ、概して平凡庸劣なものに過ぎなかつたと云つたが、當代は僅かの間であつて、他の建築、繪畫、工藝美術などが大發展を爲し、見るべきものを多く遺したのに反し、餘り振はず、唯俳諧が續いて行はれた位のもので、小説、散文にも傑作が出でず、淨瑠璃、歌舞伎芝居も未だ萌芽を見せたのみであつた。かの芝居の濫觸と云はるゝ出雲の御國は、慶長頃の女であつた。茶道は前代から盛んに行はれたが、當代に至つて益々盛んに、殊に秀吉は之れを好み、天正十五年十月朔日北野松原に催した大茶湯會は、實にその頂點に達したものであつた。八月から準備し、集まるもの三百六十餘人に上つたと

建 云ふ事である。秀吉の好む所は下に及び、諸將も領分を貰ふよりも茶器を愛
築 するといふ位であつた。かくして茶室を始め、茶庭、茶器等の發達を促す事
大なるものがあつた。

二 建 築

概 観

桃山時代の建築は、其の様式に於いては前代の繼續を出でなかつ
たが、細部の手法に於いては、一面に於いて複雑になると共に、
雄健の調子を帶び、繪様、線形も頗る發達し、裝飾に至つては殆んど前代と
反對して豪放華麗を極むるものとなつた。しかも種類に於いても、從來の佛
教建築、神社建築、住宅建築の外、新たに城廓建築及び廟建築が起り、茶室
建築も亦盛んとなり、基督教建築も一時出現した。中心が宗教建築から俗建
築に移り來つたのは前代からであるが、當代の城廓建築及び住宅建築は、從

來にない偉觀を呈し、斷然桃山建築の核をなしてゐる。

城 廓 建 築

城廓建築は、住宅建築と共に當代建築の一中心をなしたもので、
しかも當代に大成せられ、當代以後又振はなかつた建築で、全く
當代建築界の特色として日本建築史上に異彩を放つものである。城廓は前代
の末葉、戰國時代に於いて其の必要を感じたのであるが、夫以前は猶山に倚
り險を利用し、土壘又は城塞を廻らし、櫓を建てる位に止まり、戰國時代と
なつて始めて平地に築く事となり、やゝ進歩をなしたが、長足の發達を示し
たのは當代で、戰術の上からも美觀の上からも主要な役目を持つ天守は、天
正四年信長によつて築かれた安土城に始めて造られたのである。次いで天正
九年秀吉によつて築かれた姫路城、同じく十一年の大阪城など、皆天守が造
られた。而して天正、文祿から慶長となり諸侯の領地も定まり、競つて規模
を大にし、堅固なる城廓が建築され、桃山時代の終るまで二十餘りも造られ

建たが、江戸時代に入り、暫くにして元和の末年、幕府は新たに築城することを禁じ、遂に衰微して了つた。當代の城廓は、地勢によつて多少の差もあるが、大低は本丸、二丸、三丸、總曲輪の四部から成り、防備の薄弱な所には出丸を設ける事もある。本丸を中心とし、二丸、三丸は内城であつて、城主以下臣の邸宅を設け、其の外部は外廓で、市街地となつてゐる。之等の周圍には壘壁や濠を廻らす、壘壁は石壁又は土壁とし、土壁の上に石壁を築く事もある。何れも高く厚く造り、上に女牆を設け、之れに銃丸を穿ち敵を打つに便する。この壘壁の平面は不規則とし曲折を設けて敵を打つに便し、隅には隅櫓を設け、入口には柵形を設け、門樓を建て、敵を防ぐ。濠は大低水濠で稀には空濠とする事もある。其幅は二三十間から四五十間に及んでゐる。本丸の中心には天守を建てる。天守は最も重要なもので、大將が此處で指揮をなし、最後まで踏止まる所である。天守の下は石垣とし、其の内部は石藏

に造り、平時から金銀、兵器、糧食を藏し、必ず井戸を掘り、萬一の場合に備へる。而して天守の周圍には一つの廓を造り、入口には柵形を置き又隅櫓を設くる事もあり、副天守を幾個も造ることがある。天守は三重、五重又は七重とし、其の各層の減じ方は三重塔や五重塔よりも遙に甚しく、爲に頗る落付がよく見える。而して各層とも外側は漆喰塗の白壁とし、之れが色彩の方から美觀を作る最大原因となる。屋根は最上層を入母屋造とし、各層に入母屋の破風又は唐破風を付け、又切妻破風を付ける場合もある。これは三重塔や五重塔の單調を破つて變化を作り、しかも落付がいゝので、形の上から美觀を作る主要素となるのである。而して各層とも塗込めとして柱を現はさず、所々に銃丸を作る。最上層のみは外部に出得る様にし、勾欄を廻らし、壁には稀に火頭窓を開くものもある。又最上層の大棟には鯨を載せる。屋根は主に瓦葺で、時に銅板を用ふる事もある。内部入側は化粧屋根裏で、内は

建 棹縁天井の場合もあり、又華美のものは柱に蒔繪を施し、襖に彩色の繪を描き、金鍍金の金具を用ひる場合もある。

桃山城こ
其の遺構

斯くの如き城廓の本丸、二丸、三丸の内には城主以下の邸宅を建ててゐるが、それが即ち書院造であつて、當代住宅の代表的のものを含み、天守は立體的に、書院造は平面的に、當代建築の中心をなし、日本建築史上に誇るべきモニュメントを遺した。茲に先づ伏見桃山城について述べやう。この城は文祿三年（一五九四）、大阪城に遅るゝ事十一年、聚樂第に遅るゝ事八年にして建てられた。秀吉晩年の計劃に係り、規模頗る壯大、二十五萬人を役したと云はれてゐる。内部に宏壯なる書院造を作り、周圍に諸侯の邸宅を建てた。慶長元年七月地震で多少破損したが直ちに修繕し、慶長四年秀頼が大阪に移つてから家康がこゝに止まり、元和九年之れを壊つて、書院造や門を諸社寺に寄附したが、今も本丸、名古屋丸、増田回、長來回、紅

雪堀などの跡が残つてゐる。遺構として、今日現存するものも比較的多く、左記のものは確かなものとされてゐる。

西本願寺書院	同寺唐門	豊國神社唐門
都久夫須麻神社拜殿	寶嚴寺觀音堂	南禪寺方丈(虎之間)
同寺金地院方丈	西教寺客殿	正傳寺本堂(方丈)
大通寺本堂	御香宮神社表門	高臺寺表門

その主なものを簡単に説明して置かう。西本願寺書院は寛永七年將軍家光が西本願寺に寄附し、同九年移建されたものである。規模壯大で實に伏見城の中心となつてゐたものである。大體二部分に分つ事が出来る、それは

一、對面所(鴻之間)。菊之間。雁之間。雀之間。白書院(紫明間、二之間、三之間)

二、玄關。浪之間。太鼓之間。虎之間。

以上の如くで、共に入母屋造であるが、前者は本瓦葺、後者は檜皮葺となし、玄關には唐破風をつけてゐる。全體として當代の書院造で、前者丈桁行十八間、梁間十四間ある。殊に對面所（鴻之間）は伏見城の大廣間であつて、秀吉が臣下に對面する正式の間であつた。桁行十一間、梁間九間の廣い間を上下の二段に分ち、天井は上段の間を折上格天井、他を格天井とし、角柱を二列に並べ、上段之間と下段之間との間に大きい欄間を設け、之れに鴻と葦とを透彫とし、二列の柱の上部にも欄間を作つてゐる。而して上段之間には大なる床と違棚をつけ、張臺飾を設け、更に左に一段高く附書院を作り、それにも違棚と書院構があり、下段之間に向つて大きな火燈窓を開いてゐる。上段之間の床は約三間あつて、張付の繪と共に狩野探幽が張良引四皓謁惠帝圖を描き、格天井には漆を塗り、鍍金の金具を打ち、格間には雁、龍を描き、其他隨所に鍍金の金具を附けてゐる。白書院は之れに亞いで立派で、上段下

段に分たれ、其の間の欄間には藤の花の透彫がある。其の他菊之間、雁之間、雀之間等は何れも襖繪によつて名づけられたものである。玄關は書院造の玄關として大きなもので、浪之間は襖繪によつて名づけられ、太鼓之間は格天井の格間にも太鼓の繪がある。此の二室の中間の欄間は葡萄と木鼠の透彫で、甚だ美事である。此寺の唐門も同時に移建されたもので、伏見城中重要な門の一つであつたに違ひない。入母屋造の前後に大きな唐破風をつけた四脚門であつて、聚樂第の遺構たる大徳寺の唐門より一層彫刻が用ひられてゐる。即ち虹梁、唐破風下の小壁、冠木、扉等一面に雄大なる彫刻で充たされ、冠木上の大臺股の中には孔雀の彫刻がある。全體に臘色塗とし、隨所に鍍金透彫の金具を打つてある。彫刻の意匠が大徳寺の唐門よりもやゝ寫生風となつてゐる點を注意すべきである。豊國神社の唐門は始め慶長十六年秀忠が南禪寺金地院に寄附したものであるが、維新後豊國神社の前に移建した。西本願

建築

寺唐門と同じく、入母屋の前後に大なる唐破風を附けた四脚門である。而して規模はやゝ小さいが意匠は放膽奇抜である。即ち正面冠木上に頗る大なる墓股を置き、其の中に桐唐草を一ぱいに彫刻し、側面頭貫の上にも菊唐草を大きく彫刻してゐる。臘色塗とし、鍍金の金具を用ひてゐる事は西本願寺唐門と同様である。都久夫須麻神社は滋賀縣東淺井郡竹生村（竹生島）に在る。其の拜殿は伏見城の遺構として西本願寺書院について莊麗なもので、五間四面、重層、向拜一間、入母屋造、軒唐破風附、檜皮葺の建物である。内外の柱を臘色塗とし、内部の長押や柱には蒔繪で草花を現はし、二手先の組物、軒廻りにも漆を塗り、總べて鍍金の金具を打ち、又欄間や壁には牡丹、菊等の透彫をつけ、天井は内部は格天井で、入側は化粧屋根裏となつてゐる。建築に蒔繪を施す事は中尊寺金色堂には行はれたが、住宅建築としては前例がない。而して蒔繪ばかりでなく金具が非常に立派で、規模は小さいが裝飾と

桃山時代

しては西本願寺書院以上のもので、日光廟の先驅と見るべきものである。これを日暮御殿と稱するのにも理由ある事である。寶嚴寺も亦竹生島に在る。觀音堂は向唐門、渡廊等と共に慶長七年伏見城から移建されたものである。觀音堂は五間四面、單層、入母屋造、柿葺。向唐門は柿葺、渡廊は低屋根の所で桁行八間梁間一間、單層、柿葺。高屋根の所で桁行二間梁間一間、單層、檜皮葺となつてゐる。臘色塗に鍍金の金具を打ち、牡丹や菊の彫刻を施すこと他の建築と同様である。南禪寺方丈虎之間は探幽が竹に虎を描いた襖のある所から名づけられたもので、同寺金地院方丈西教寺客殿（方丈）等と共に書院造の特色を持つて居る。

城廓の遺物

當代に築造された城廓は可なりの多數に上るが、多くは亡びて今遺つてゐる主なものは左の二十餘である。

天正四年（一五七六）安土城

築 建

同 九 年	(二五八一)	姫 路 城	(現存の天守は慶長十三年)
同 十 年	(二五八二)	廣 島 城	
同 十 一 年	(二五八三)	大 阪 城	(昭和六年天守閣再建成立る)
天 正 年 間		明 石 城	
同		岡 山 城	
同		松 本 城	
文 祿 元 年	(二五九二)	金 澤 城	
同 三 年	(二五九四)	伏見桃山城	
同	(同)	若 松 城	
慶 長 五 年	(二六〇〇)	仙 臺 城	
同	(同)	福 岡 城	
同 六 年	(二六〇二)	熊 本 城	

代時山桃

姫路城
名古屋城

右の中、代表的の天守を有する姫路城と名古屋城とについて先づ述べ、次に他の遺構を略述しやう。一名白鷺城と稱せられる姫路

城は天正八年秀吉が姫路山の上に築き、三重の天守を建てたが、慶長四年池

同 年	(同)	和歌山城	(天主は江戸時代)
同 年	(同)	高 知 城	
同 九 年	(二六〇四)	彦 根 城	
同 十 一 年	(二六〇六)	江 戸 城	(寛永十三年竣工)
同 十 二 年	(二六〇七)	駿 府 城	
同 十 五 年	(二六一〇)	名 古 屋 城	
慶 長 年 間		水 戸 城	
同		鹿 兒 島 城	
同		松 江 城	

田輝政が封ぜられるに及び慶長十三年五重の天守を建て、城廓を擴張した。こゝに現存の天守で、今は姫路市の中央に立つてゐる。天守は高い石藏の上に築かれ、各層入母屋破風、軒唐破風を配置し、長方形の窓をあけ、最上層は入母屋造に軒唐破風をつけてゐる。此天守は比較的末期のもので最も變化に富み、優雅の趣を有し、現存の天守中最も傑出してゐる。大天守に接して小天守があり渡櫓で連ねられ、全體として一層立派の外観を呈してゐる。名古屋城は慶長十五年家康が西國北國の大名二十人に命じて築かしたもので大體二年間で竣工した。天守は五重で加藤清正之れを築き金の鯨によつて今日迄も名高くなつてゐる。外に二重の小天守があるが、それは清洲の城から移したもので、本丸中には多くの書院造がある。これも清洲から移建したものと新に作つたものとある。大天守は高く石垣の上に築かれ、初重の大いさは二十間に十八間ある。屋根は最上層を入母屋とし、各層に大小の入母屋破風

をつけ、各層の減じ方多く軒の曲線のゆるく、従つて落付ある割合に輕快な表現を有する。四重に至る迄節無しの檜を用ひ、柱は木割太く、長押に鍍金の釘隠を打ち、何れも入側即ち武者走をつけ、外に長方形の窓を開き、外側はすべて漆喰で塗り、天井は張らず、入側丈け棹縁天井としてある。最上層は特に良材を用ひ、天井は小組格天井とし、格縁には黒漆を塗り、小組の棧は素木とし、鍍金の釘隠を打ち、入側には舞良戸をつけ、その棧に黒漆を塗る。屋根は初層丈け本瓦葺で一層以上は銅瓦葺とし、最上層の屋上には例の金の鯨を載せてある。この天守は材料、構造最も立派で、其の美的價值も姫路城のものと共に最も高いものである。

其他の遺物

安土城は天正四年織田信長が築いたもので、城廓建築として最初垂れたものである。安土の山上に位置し、東西北の三方は湖に臨んでゐる。

貞享四年に描かれた圖によると、中央の高い石垣の上に七重の天守を建て、石垣の内は石藏とし、南北二十間東西十七間の廣さがある、天守は實に嚙矢となつたもので、初層より上層に至る迄、或は朱漆或は黒漆を塗り、壁や襖は狩野永徳をして花鳥人物を描かしめた。上層は方三間で内外とも布を巻き黒漆を塗り金箔を貼し、内側の柱には昇龍降龍を描き、天井には天人を描く。これらの裝飾は遠く中尊寺金色堂から金閣や銀閣を學び、城廓よりも寧ろ信長の邸宅として設計され、これが桃山城や聚樂第其の他當代の書院造に於いて益々盛となつた基となつたものである。廣島城は毛利輝元が築いたもので、五重の天守が勾配のゆるい石垣の上に立つてゐる。この石垣の勾配の爲め一層落付いて見える。各層とも入母屋造で切妻の破風をつけてゐる。大阪城は始め天文元年本願寺によつて作られたが、秀吉居城と定むるに及んで天正十一年工を起し十三年落成した。三十餘國の大名から石材を徵發し、本丸と山

里丸との間に隅櫓を起すこと十三、二の丸の壘の上には十一の隅櫓があり、海内無双と稱された。大廣間は千疊敷と稱し、其の襖は永徳が描いた。慶長三年秀吉が没してから四年秀頼が移つて多少増築したが、後家康の爲めに三の丸全部と二の丸の一部分とを破壊せしめられた。天守は昭和六年御大典記念として鐵筋混凝土の新材料で再建された。熊本城は慶長六年加藤清正が修築したもので、堅牢無比の城と稱されたが、西南役に兵火に罹り、今日は小天守が残つてゐる許りである。大天守は名古屋城の天守に優る雄大なものであつた。彦根城は慶長九年美濃、尾張、飛驒、若狹等の大名によつて築かれたもので、三重天守である。上層は入母屋切妻破風になつてゐるが、二層目には四方に火頭窓を開き、下層には四角の窓の外、所々に三角形四角形の矢狹間を穿つてゐる。駿府城は家康が退隱所として築いたもので、慶長十二年三月に工を起した。天守は七重で慶長十三年八月二十日棟上をした。造營の

建 奉行は小堀遠州で、棟梁は中井大和正清である。本丸、二丸、外廓を設け、
築 七重の天守には銅瓦を葺き頂上には金の鯨を載せた立派なものであつたが今
日は無い。

聚樂第
其遺構

桃山城の遺構は多く書院造で住宅建築と見做すべきものであるが
天正十五年秀吉が京都に建てた聚樂第は全く住宅建築である。秀
吉は同十四年四月廿一日入京して地を相し、二十三日繩打を始め十五年夏竣
工し九月十八日移轉した。北は一條から南は二條に至り、東は堀河から西は
内野を限つて城池とし、東西四町、南北七町、四方三千歩の石垣を築いた。
材料を諸侯及び奈良に徴し、其の結構は壯大豪華を極め、林泉には社寺の木
石を移した。書院造を主とした住宅であるが天守などもあり、外廓には壘壁
を廻らし邸城と稱すべきものである。翌十六年四月十四日後陽成天皇の行幸
を仰ぎ十八日還御あらせられた。其の盛儀衆目を驚かし、秀吉はそれを機會

に六十餘州の武權掌握を確實にした。文祿の役には秀吉は名護屋に赴き、秀
次が聚樂第に居つたが、秀次は間もなく自殺せしめられ、やがて外廓は壊た
れ、建物は移され、寛永年間には其跡に民家が建てられた。さて聚樂第の遺
構で現存するものは飛雲閣、大徳寺唐門、横濱本牧原氏所有邸宅等である。
飛雲閣は元和元年京都西本願寺滴翠園の内に移建せられ、滄浪地に臨んで建
てられた。聚樂第に於いても林泉の中に配せられてゐたので、金閣や銀閣か
ら脱化した庭園建築である。三層樓で複雑した平面を持つ。即ち下層には主
な間が四つあるが、其中主要な間は上段の間で次の間がついてゐる。上段の
間は招賢殿と稱し、永徳の筆と稱する雪中柳の圖があるので柳の間とも云ひ、
出書院を設け、前に火頭窓を開いてゐる。次の間には瀟湘八景を描き、出張
があつてそこから直ぐ船に乗れるので船入の間とも云ふ。出書院の屋根は入
母屋造で、船入の間の上には唐破風をつけ變化を作つてゐる。中層は二間と

なり、上段の間には天井一面に山樂の筆と稱する葡萄に木鼠の畫があり、杉戸にも山樂筆の三十六歌仙が描かれてゐるので、歌仙の間とも稱する。上層は摘星櫻と稱する一間だけで、床の間には元信の筆と稱する富士山の繪がある。かく立面も亦複雑してゐる。上層は寄棟造であるが、中層には切妻、軒唐破風を用ひ、下層には入母屋、切妻、軒唐破風などがあり、變化の妙を極めしかも其間に統一があり諧調を保つてゐる。屋根は柿葺で其表現は優美輕妙である。上段の間のあるところからは書院造ではあるが略式であり、金閣の如く三層樓の庭園建築と見らるべきものである。唯現在の滴翠園が狭いので庭園建築として其美を發揮し得ないのは遺憾である。大徳寺唐門は切妻屋根の前後に唐破風をつけた四脚門である。全體の釣合極めてよく、細部の手法頗る大膽奇抜に、其表現は極めて豪華である。奇抜な意匠の一例は、頭貫に波の形を彫刻し、其兩端を化して鯉となし柱を貫いてゐるが如きそれである。

る。又冠木には松と孔雀とを透彫とし、兩端には獅子を彫刻し、頭貫の上、唐破風の壁、冠木の上など一面に彫刻し、盛に鍍金の金具を打ち、柱と扉とは素木の上に金具を打つた丈けであるが、頭貫以上は色塗となつてゐる。此門は聚樂第中主なる門の一つで、當代の比較的初期の手法と裝飾を代表する傑作で、伏見城の遺構なる西本願寺や豊國神社の唐門の先驅をなしてゐるものである。横濱本牧原富太郎氏所有の邸宅は、もと攝津の春日出新田に在つたもので、聚樂第の北殿で、淀君の住ひと傳へられてゐる。現在の所に移建されたの大正七年頃である。大體書院造の平面であつて、主な間としては上段の間(襖、壁張付繪傳山樂)、次の間(襖繪永徳)、三の間(襖繪探幽)があり、それから曲折して天樂之間と化粧之間と相之間があり、相之間から階上へ上つて二間あり之を村雨亭と稱する。此建築は大體の平面は書院造であるが、二階があつたり茶室や化粧之間があり、餘程碎けたところがある。すべて木

建築

割細く、竹などを混用し、裝飾も淡泊で、漆や金具や極彩色を用ひず、瀟洒を旨としてゐる。而して上段の間と次の間との椽の前は池に臨み、淀君が釣糸を垂れたと云はれてゐる。林泉とも巧に調和する建築で、淀君の住居に使はれたと云ふ事も恐らく確であらう。飛雲閣と共に當代初期の住宅建築の瀟洒淡泊な方面を代表する好例であり、それが東京近くに移建されてゐる事も注意すべきである。

茶室の本領と利休

茶室建築の起源は前代に建てられた慈照寺東求堂の一室に爐を切つた四疊半からであるが、それは茶室といふよりも小書院の一室に過ぎなかつたので、それには附書院と違棚があつて床の間がなかつた。其後大黒庵紹鷗に至つて一層質素簡單なものとし、山中の閑靜な心境を現はさうとしたが猶書院造の風を脱しなかつた。然るに當代に至り千宗易(利休)出づるに及んで全然書院造から離れ獨立した茶室が出来た。即ち先づ四疊半茶

桃山時代

室を作り、次いで四疊、三疊半、三疊となり、二疊臺目(二疊の外に四尺五寸の疊あるもの)から二疊となり遂に一疊半(實際は一疊臺目)までに至つた。而して構造も頗る簡單となり、材料は有合せの粗末なものを用ひた。即ち柱は押角、丸柱の皮つきの儘を用ひ、垂木も竹又は小枝の皮つきを使ひ、壁は塗壁鏝壁とし、入口も躰上りと稱して約二尺二寸四方のものとし、窓は壁を塗り残して作る。天井も竹縁又は杉の丸太の棒縁とし、竹簧葦簧を張り、又網代天井にもし、屋根は茅葺が普通である。さうして庭園も自然の儘の趣を現はす事につとめた。蓋し利休は有合せの材料を用ひ、簡單素朴に、淡泊冲澹の趣味を極めて自然的に現はさんとしたので、其處に獨特の價値があつたのであるが、後世はその形式に囚はれ、利休の精神を失ふものが多くなつた。併し一方に豪華な住宅建築が行はれた此の時代に斯る瀟洒淡泊な茶室建築の現はれた事は、時代の兩方面を現はし、人生の自然の要求を示した興味ある

建築現象である。而して此茶室建築が次の江戸時代に入つて住宅建築に大きな影響を與へた。

茶室の遺物

當代の茶室の遺物は甚だ尠く、僅に妙喜庵、南宗寺實相院、高臺寺、西芳寺等に在るのみである。妙喜庵は京都府乙訓郡大山崎村に在る。書院(本堂)は室町時代のものであるが、それに接して利休の建てたと稱せらるゝ茶室がある。方二間、單層、切妻造、柿葺の建築で、二疊の外に一疊があり、二疊の隅に薄板張があり、四尺位の床がある。天井は竹棹縁天井で、一方に躰上りを開いてゐる。躰上りの寸法は普通竪二尺二寸横二尺であるが、妙喜庵のは竪二尺六寸一分、横二尺三寸七分となつてゐる。此茶室は有合せの材料で簡單質素の中に趣味があり、利休の趣旨に適つたもので秀吉も屢々臨席したと傳へられてゐる。南宗寺は泉州堺市旅籠町に在る。もと鹽穴寺に在つたのを明治となつて南宗寺に移建したもので、利休が始めて

二疊臺目をこれに試みたと傳へられてゐる。小さいが變化に富み有合せの材料を用ひた好例である。京都の高臺寺では、時雨亭と傘亭とが廊でつながれてゐる。時雨亭は二階造、傘亭は天井を四阿造とし扇垂木のやうになつてゐる。何れも極めて小規模で有合せの材料を用ひてゐる。西芳寺は京都府葛野郡松尾村に在る。湘南亭は本家待合及び廊下から成り、本家は桁行五間梁間二間、單層、入母屋造、待合及び廊下は桁行三間梁間一間、單層、切妻造で共に棧瓦葺である。千少庵の再興したもので、斯道の模範とせらるゝ茶室の一つである。此寺は苔寺といふ名で高く、幽邃の趣が深い。

住宅の遺物

當代住宅の遺物としては伏見城及び聚樂第の遺構が主なものであつて其外には比較的尠い。まづ園城寺に二つある。勸學院客殿は慶長五年に建てられ、方七間、單層、入母屋造、檜皮葺で、當代の書院造として比較的立派のものである。光淨院客殿は翌六年に建てられ、七間六面、

建築

單層、入母屋造、柿葺の建築で、勸學院客殿に比し裝飾はやゝ簡單であるが、室町時代の主殿の面影を傳へてゐる點が面白い。醍醐寺の三寶院は、永久二年に創立されたが、度々火災に罹り、現存のものは慶長三年秀吉が義演僧正に命じて再建を計劃せしめたものである。平面は複雑であるが主な部分は玄關、葵の間、秋草の間、表書院、宸殿、大庫裏、純淨觀、本堂等から成り、全體として一大書院造であるが、表書院は多少武家造の主殿の面影を有してゐる。宸殿（奥書院）には上段の間があり、床、違棚（所謂醍醐棚）、書院構、張臺構を具へ、隨所に鍍金の金具を打ち裝飾を凝してゐる。この宸殿が三寶院中最も見るべき部分で、正式の書院造の好典型である。庭に突出した舞臺造は園池に臨み、宛も寢殿造に於ける釣殿に似てゐるが、書院造にかゝる意匠を用ひたのが面白い。全體としては平面も複雑で自由に出来てゐる上、立面も入母屋と切妻造とを結合し、軒唐破風などをつけて變化を求めてゐる。要

桃山時代

するに伏見城や聚樂第の遺構などゝ違つて始めから其位置に設けられた當代の住宅建築として最もよい例である。庭園も亦意匠面白く、建築との調和もとれ、當代庭園の代表的のものである。同院の唐門（勅使門）は伏見城の遺構と稱し、扉に大なる桐と菊の花を浮彫とし、其手法大膽に全體の恰好も優れ、龍光院の平唐門ひらからもんと共に當代平唐門の二佳作である。瑞巖寺は松島に在る。本堂には佛間があるが書院造である。慶長九年伊達正宗が紀州熊野から材木を取寄せて再建し、同十四年三月竣工した、建築家は中村日向守吉次である。本堂は桁行十三間、梁間右側九間左側八間、單層、入母屋造、本瓦葺で、欄間の透彫や隨所に打つてある鍍金の金具は當代の特色を示してゐる。殊に見るべきものは玄關で、平面が曲折して直接内部が見えないやうにし、立面も面白く、細部の手法は「唐様」で頗る自由奇抜、繪様線形臺段などの彫刻も傑出してゐる。猶庫裡、廻廊、中門、御成門等も同時の建築である。此の外京

建 都建仁寺の方丈は桁行十五間梁間十一間の大建築。嵯峨の大覺寺客殿、大徳寺龍光院書院、觀智院客殿等は何れも當代の住宅遺物である。

廟建築
豐國神社

次の江戸時代劈頭に於いて建築界の王座を占めた廟建築は當代に起つた。之は神社建築と佛寺とを結合し書院造の手法を加へ更に墳墓の意味をも加へたもので、全然新しい性質を持つた建築である。禪宗建築の開山堂、中尊寺の金色堂はやゝ似た性質を持つてゐるが廟建築ほど複雑した意味も形式も持つて居ない。この廟建築の嚆矢で、當代廟建築を代表するものは實に秀吉を祀つた豐國廟（豐國神社）であるが、今は亡びて蜂須賀侯爵家に藏せらるゝ豐國大明神臨時祭の屏風繪や他の記録によつて其面影を偲ぶばかりである。慶長三年二月卅日秀吉の遺骸を阿彌陀峰の上に葬り、其下に廟を建てる事となり同年九月十一日起工し、翌年三月中旬竣工し四月十八日遷宮となつた。其配置はまづ大鳥居があり、之を入ると三間の樓門があ

代時山桃

り、更らに内に中門（樓門）があつて其左右から廻廊が起り四方を廻つてゐる。中門に至る間に櫻樹を植ゑ奉獻の石燈籠を並べ、又多寶塔が建てられた。中門の後方中央には開放しの方三間の建築がある、多分舞殿であらう。其後に又門があつて透塀となり、其内に拜殿と本殿とがある。本殿は五間四面、拜殿は七間三面で、兩殿の間を石の間で聯絡してゐる。屋根は兩殿とも入母屋造で、石の間の上は切妻となり、拜殿の正面には千鳥破風を附け軒に軒唐破風がある。此拜殿の屋根の形式は既に前代神社建築として錦織神社に現はれてゐるが、權現造共通のものである。石の間は奥行三間で一段低くなり階段で上下する様になつてゐる。本殿及拜殿の組物は二手先で椽を受ける爲めの組物は拜殿に三手先を用ひ本殿は三斗となつてゐる。此豐國廟の建築家は平内吉政で、方廣寺大佛殿の建築にも關與し桃山時代の大家であり、子正信は日光大猷院廟を建てた。

宮殿建築の遺物

宮殿建築は前代皇室の式微、戦亂等で振はなかつたが、當代はまづ信長が永祿十一年造營し、紫宸殿、清涼殿、内侍所、昭陽舍等を再興し、次で秀吉は天正十八年前田玄以を奉行として造營した。それも後に火災で亡びたが、後に家康が造營の際、諸寺に賜つたものは幸に現存してゐる。それは南禪寺方丈、仁和寺本堂及御影堂、大徳寺勅使門等である。南禪寺は京都市上京區南禪寺町に在る。其三門は江戸時代の再建である。金地院方丈は伏見城の遺構であつたが、方丈は天正造營の清涼殿と伏見城の遺構（虎の間）とを併せたものである。正面九間側面十二間、單層、入母屋造、柿葺の建築で慶長十一年に移建された。構造は比較的簡單であるが、當代初期の特色を現はし、元信と永徳の襖繪がある。仁和寺は京都の花園村に在る。本堂御影堂共に天正造營の遺構であるが、本堂は紫宸殿を寛永十四年に移建したものである。七間五面、單層、入母屋造、本瓦葺で、正面一間は南廂と

なり廻椽を廻してゐる。正面は全部蔀戸とし側面に妻戸がある。組物は舟肘木、軒は二軒、内部化粧屋根裏で、構造比較的簡單である。佛殿を設けたのは後であるが大體舊態を保つてゐる。素木造で隨所に鍍金の金具を用ひてゐる。御影堂は御所の一殿舎で寛永年間に移建したと傳へられ、方五間、單層、寶形造、檜皮葺で、寶珠露盤を載せてゐる。素木造で正面は蔀戸とし舟肘木を用ひ、宮殿建築の面影を持つてゐる。紫野の大徳寺は三門、唐門、龍光院等も當代の建築であるが、勅使門は天正造營の皇居の南門を賜り、寛永十七年移建されたものである。屋根は左右切妻、檜皮葺の四脚唐門で、現在は左右に僅かの堀をつけ獨立して建てられてゐる。當代初期の特色を有し、墓股其他に透彫の裝飾が用ひられてゐるが、同寺に現存する聚樂第遺構の唐門に比べてみると餘程簡素である。猶近江の園城寺圓滿院宸殿は寛永十八年皇后の殿舎を賜つたものである。十間七面、單層、入母屋造、本瓦葺の立派な建

築 建

物で、上段の間には床の間、違棚、書院構、張臺構を設け、天井は小組格天井で襖繪には金地に山水を描き、書院造の好標本である。

方廣寺
大佛殿

佛寺は始め信長によつて破壊されたが、秀吉と秀頼とによつて再建されたもの頗る多く、加ふるに秀吉は奈良東大寺に倣つて方廣

寺の大佛殿を京都に建立した。天正十四年秀吉は前田玄以、淺野長政、増田長盛、石田三成、長束正家に命じ五人は奈良大佛師宗貞、其弟宗印及び工人を招いて商議し、玄以主として大奉行となり、木材を土佐、九州、木曾、熊野に求め、土佐九州の木材は海路淀鳥羽に送り、木曾の木材は桑名より大阪に送り、畿内中國の諸侯には大佛殿の土地を拓き、石垣築山等を作らしめた。其地域は東西百三十間南北百三十七間、大佛殿の地盤は東西三十七間南北五十五間高さ一間半で、礎石式は天正十六年五月十五日に行はれた。諸侯は競つて石の大なるものを出し、蒲生氏卿が初め三間に七間の大石を出して他を

刺戟したといふ事である。大佛殿は十一間七面、二重佛殿で、上層の屋根は四注、下層は正面中央を一段高くし唐破風とした。大さは桁行四十五間二尺五寸、梁間二十七間五尺五寸とも云ひ、或は正面二十丈五尺奥行十八丈一尺と稱し、東大寺大佛殿より少し大きい位であつたらしい。棟高は廿五間、柱大小九十二本、柱の徑五尺五寸、木割も従つて大きく、大虹梁は長さ十五間幅六尺五寸厚五尺五寸あつたと云ふ。構造手法は鎌倉再建の東大寺大佛殿に倣ひ、「天竺様」に従ひ、挿肘木の七手先を用ひ、軒は一軒、内部は化粧屋根裏であつた。此大佛殿は西面して建てられ、四方に廻廊を廻らし、西の正面に仁王門、南に南門、北に北門を建てた。併し此大規模な建築も慶長七年に焼けて了つた。次に當代の佛寺遺物の主なものは次の如くである。

天正十七年

(一五八九)

大徳寺三門

同 十九年

(一五九二)

七ツ寺本堂 (名古屋市)

代時山桃

築 建

るが、上層の内部は一面に彩色装飾を施し、柱には仁王、壁には波、天井の中間には丸龍、左右の間には天人を描き長谷川等伯五十一歳筆との落款がある。全體の恰好も比較的よく、細部の手法は忠實に「唐様」を守り、装飾も純粹の禪宗風を用ひ、三門として東福寺のものより百六七十年新しいが、純な禪宗風三門としては最古最優のもので、當代佛教建築の傑作である。七ツ寺は名古屋市門前町に在る。此寺の創立は古いが本堂は天正十九年の再建で方五間、單層、四注、本瓦葺の簡單なものである。本尊阿彌陀三尊は藤末時代の代表作である。石山寺本堂は藤末時代のものであるが、外陣即ち禮堂は天正年間の建築に係り、九間四面、單層で舞臺造となり、屋根は四注、柿葺であるが、正面に千鳥破風をつけてゐる。本堂と聯絡して複雑な形を有し全體として面白く出来てゐる。所謂源氏の間が此天正時代の建築に屬してゐる事は面白い。延暦寺は弘仁時代の草創であるが、當初の建築は一つもなく根

代時山桃

本中堂大講堂を始めとし廻廊其他江戸時代の再建が多いが、釋迦堂が鎌倉時代に大乘戒壇院堂と横川中堂とが桃山時代の再建である。大乘戒壇院堂は天正年間に建てられ方五間、重層、寶形造、柿葺の建物で、横川中堂は慶長九年に建てられ七間九面、單層、入母屋造、柿葺の建物である。共に叡山としては第二位の建物であるが、古い調子を持ち、桃山時代の特色も持つてゐる。勝鬘院は大阪市南區天王寺元町に在る。其多寶塔は大阪府南河内郡天野村に在る金剛寺の多寶塔と前後して建てられたもので普通の多寶塔であるが桃山時代の特色を持つてゐる。妙心寺の建築は主として江戸時代のものであるが、三門は大徳寺の三門に遅るゝ事十年、慶長四年に建てられ、五間三戸、入母屋造、本瓦葺の樓門である。すべて大徳寺の三門と同様のやり方で恰好もよく、細部の手法もすぐれてゐる。五大堂は松島に在る。方三間、單層、寶形造、本瓦葺の小建築であるが、當代の特色を有し、島の上に建てられ、自然

の風景と結合して建築美を發揮してゐる。園城寺は仁王門、三重塔、食堂、釋迦堂、新羅善神堂等室町時代の建築も持つてゐるが、他は多く桃山時代のものである。金堂は慶長六年秀吉の後室北政所によつて再建せられ、方七間、單層、入母屋造、檜皮葺の比較的大建築である。平面は天台宗伽藍の特色を存し、手法は「和様」を用ひてゐる。正面には三間の向拜を附し廻椽をめぐらし勾欄をつけてゐる。二手先の組物の間には墓股を置き、股の間には鳳凰、獅子に牡丹、竹に虎等の彫刻を嵌め、向拜の組物に附屬してゐる手挾には蓮や牡丹の彫刻があり、其手法雄健秀拔、當代の特色を發揮してゐる。法華寺は天平時代に總國分尼寺として創建された寺であるが、現在は慶長六年淀君が片桐勝元を奉行として再建した本堂の外、見るべき建築がない。本堂は七間四面、單層、四注、本葺の建築で、出組の組物を用ひ墓股をつけてゐる。内部は比較的簡單で、彫刻裝飾も少いが、厨子は中々美事である。京都の相

國寺は永徳二年足利義滿の創立に係る大伽藍で、高さ卅二尺と稱する七重塔があつたが應仁の亂の中心地となり總べて兵火に罹り、今の本堂（法堂）は慶長十年秀頼の再建である。七間六面、重層、入母屋造、本瓦葺で左右に四間の廊がついてゐる。恰好よく「唐様」の細部も巧に、内部天井は鏡天井で、中央に丸龍が描かれてゐる。禪宗建築として第一流のものであるばかりでなく、法堂最古の遺物である。教王護國寺即ち東寺は、桓武天皇が平安京を造營せられた際、羅生門の左手に東西兩寺を建て、左右兩京の鎮護とせられた一つである。其後嵯峨天皇は之を空海に賜うて宗教流布の根本道場と定められたが、堂宇は文明十八年兵火に罹り、慶長四年八月に至つて秀頼勅を奉じて金堂の再建に着手し、同十一年竣工したのが現存の建築で、今は下京區九條町に在る。七間五面、重層、入母屋造、本瓦葺の建物であるが、此平面は延暦十五年創立の儘で、純粹の眞言宗建築とは違つてゐる。下層の屋根の正面の

中央を破つて一段高くしたのは藤原時代に好んで用ひられた手法で恐らく創建當時の風に從つたのであらう。組物は下層を「天竺様」の三手先とし、上層に「和様」の四手先を用ひ、其間にも平組物を附け軒廻は賑やかである。木割比較的太く雄大の表現を有し、全體の恰好もよく、軒の反りの曲線も適度である。天井は二重の折上組入天井で、それを支へる爲め「天竺様」の挿材木を用ひてゐる。要するに此建築は大體の恰好から細部の手法に至るまでよく整ひ、當代佛教建築として代表的のものである。此寺の門は八脚門を始め鎌倉時代のものが多い。但南大門と大師堂は當代のものである。大徳寺龍光院本堂は桁行六間梁間四間、單層、四注、檜皮葺の簡単な建築で、すべて「唐様」により一寸變つたものである。同院書院は當代住宅の一例である。高臺寺は家康が北政所即ち高臺院の爲めに京都下河原に桃山の宮殿を移し、佛殿、大方丈、小方丈等を興したのであるが、當時の建築は大低焼け、桃山遺構とし

ては表門丈けが遺り、慶長十二年の建築として開山堂と靈屋とが遺つてゐる許りである。開山堂はもと高臺院の持佛堂で五間三面、單層、入母屋造、本瓦葺の建物である。裝飾が非常に贅澤で、内外とも漆を塗り、之れに極彩色を施し、鍍金の金具を打つてある。靈屋は四間三面、單層、寶形造、柿葺の建物で、これも亦裝飾が美事であるが、殊に厨子は扉の内外に松竹、薄、紅葉などを蒔繪とし、金具にも彫刻が施されてゐる。兩建築とも小さいものであるが其裝飾は金具と云ひ蒔繪と云ひ當代の精華を示し、殊に蒔繪は高臺寺蒔繪の範をなし、日光廟などの漆工裝飾の先驅を茲に見る事が出来る。清水寺の本堂は寛永十年の建築であるが、鐘樓と西門とは慶長十二年の建築で、何れも當代の特色を有する簡單なもの。國分寺藥師堂は方五間、單層、入母屋造、柿葺の建築で、内部の厨子が最もよく當代の特色を持つてある。池上本門寺は五重塔と仁王門とが當代末期の建築であるが、位置も江戸に近く、

建 既に江戸時代の特色を有し、恰好もあまりよくなく、當代遺物としては寧ろ
築 悪作である。

神社建築
の遺物

神社建築は前代大いに發達し變化を見せたが、當代はその繼續で
唯裝飾は益々發達した。遺物は四十餘あるが、主なものは

- 天正四年 (一五七六) 大寶八幡神社本殿 (茨城縣眞壁郡)
- 同 五年 (一五七七) 宗像神社邊津宮本殿 (福岡縣宗像郡)
- 同 九年 (一五八一) 鎌宮神社本殿 (滋賀縣蒲生郡)
- 同 十四年 (一五八六) 日吉神社本殿
- 同 十五年 (一五八七) 嚴島神社末社豐國神社本殿 (千疊閣)
- 同 十七年 (一五八九) 稻荷神社本殿 (京都)
- 同 十九年 (一五九一) 太宰府神社本殿
- 慶長五年 (一六〇〇) 吉野水分神社々殿及樓門廻廊

桃山時代

- 同 六年 (一六〇一) 吉田神社齊場所大元宮 (京都)
- 同 九年 (一六〇四) 淺間神社 (静岡縣大宮町)
- 同 年 (同) 鹿島神宮攝社奥宮本殿
- 同 十二年 (一六〇七) 大崎八幡神社々殿 (仙臺市)
- 同 年 (同) 北野神社々殿

等である。大寶八幡と鎌宮神社は共に三間社流造。宗像神社本殿は天正五年
に出來、五間社流造柿葺で、流造としては壯大なもの。拜殿は天正十八年の
建築で、桁行六間梁間一間、單層、切妻切、本瓦葺である。日吉神社は延暦寺
の鎮守として弘仁時代に創建され、其社殿は日吉造又は聖帝造と稱せらるゝ
神社建築の一形式である。五間三面、單層、入母屋造、檜皮葺の建築で、前
面には向拜を附し、背面は切り去つた様な形となつてゐる。猶同所に在る攝
社大神神社本殿及び樹下神社本殿は何れも五間三間の日吉造で、同じく天正

建 築

十四年に建てられたものである。又同年の建築に攝社宇佐宮本殿、同牛尾神社本殿及拜殿、同三宮神社本殿及拜殿、白山姫神社本殿（何れも三間社流造）の外日吉三橋がある。嚴島神社末社豊國神社本殿は俗に千疊閣と云はれてゐる。桁行前十三間後十五間、梁間八間、單層、入母屋造、本瓦葺の大建築であつて内部は化粧屋根裏とし雄大なものである。稻荷神社は五間社流造檜皮葺で、流造としては大きい、向拜は後世の附加である。太宰府神社も五間社流造であるが、末社志賀社本殿は室町時代のものである。吉野水分神社は本殿の前に離れて拜殿を置き、右に樓門、左に幣殿を並べた配置が珍らしい。本殿は三つの社殿（中殿は一間社、左右殿は各三間社）を並べ合の間で連結し、屋根は一つの檜皮葺流造とし、境の所には軒先に一寸凸みをつけ、三社殿の上の一つづつ千鳥破風をもち、椽の前面にも凹みをつけ、階段は別々に附いてゐる。繪様彫刻も多く、色彩も施され鍍金の金具も澤山使はれてゐる。拜

桃山時代

殿は十間三面、單層、入母屋造、檜皮葺。幣殿は六間四面、切妻造、檜皮葺。樓門は三間一戸、入母屋造、柿葺である。吉田神社の齋場所大元宮の建築は慶長六年甲辰宗廣の建てたもので頗る變つた建築である。平面が八角で建物も八角であるが、屋根は八角の上に唯一神明造の切妻造をのせ、正面に破風をみせ、更に向拜を附してある。切妻屋根の上には千木と勝男木を載せてゐるが、大棟には鬼板を附し、中央に寶珠をのせてゐる。内部には八本の柱を立て、中央の一本の柱は寶珠まで貫いてゐる。天井は鏡天井で正面には圓い額のやうなものが懸けてある。而して此八角の建物の背後に六角の建物が聯結されてゐる。此建築は斯くの如く不思議の形をしてゐるが、要するに神社と佛寺とを混合したもので、千木は神社の象徴であるが、寶珠は佛寺のものである。外部を朱塗とし鍍金の金具には桃山風の繪様がある。淺間神社の創立は古いが現在の本殿は慶長九年家康が再建したものである。此建築も從來

建 築

の神社建築に例のない形式を持つてゐる。平面は五間四面、重層であつて上層は三間社流造となつてゐる。裝飾としては墓股、繪様彫刻を施し外部は彩色し當代の特色を持つてゐる。鹿島神宮も創立は古いが現存の本殿及石の間、拜殿、幣殿は江戸時代初期の建築で、攝社奥宮本殿が當代のものである。三間社流造、繪様彫刻に桃山の特色がある。大崎八幡神社は天喜五年源義家の創立に係り、初めは奥州の遠田郡八幡町に在つた。天正の末年伊達正宗が其神體を得之を崇敬し陣中に奉安し、後玉造の巖手山城内に社殿を建てたが、仙臺に移るに及んで慶長九年現在の所に工を起し十二年八月竣工した。棟札が残りてゐるので明かにわかる。大工は日向守家次、棟梁梅村三十郎頼次、刑部左衛門國次、鍛冶雅樂助吉家、鑄師佐久間左京。五間三面の本殿と七間三面の拜殿とを石の間で聯結し權現造となつてゐる。屋根は本殿拜殿とも入母屋造で、拜殿の正面には軒唐破風及び千鳥破風を付け、全く權現造の形式

桃山時代

を有し、俗に八棟造と稱してゐる。裝飾は内外とも漆塗とし又金箔を置き、細密の模様を描き、墓股、彫刻多く、隨所に鍍金の金具を用ひ最も豊麗で、當代代表的の神社建築である。北野神社の創立は天曆元年であるが、今の社殿は慶長十二年秀吉が片桐勝元を奉行として建てたものである。社殿の外、中門、廻廊、透塀、後門、東門等すべて同時に建てられた。此社殿も權現造の一種であるが、拜殿の左右に樂の間があるので一層複雑となつてゐる。本殿は五間四面、拜殿は七間三面で、左右二面宛の樂の間をつけ、前面には向拜を持つてゐる。屋根は本殿拜殿とも入母屋造、檜皮葺であるが拜殿の左右には樂の間の屋根が一段低い入母屋となりそれ丈け複雑してゐる。本殿拜殿樂の間とも廻縁を附し、本殿の天井は内陣折上格天井外陣格天井、拜殿は前二間を二重折上格天井、後一間を格天井とし、その後一間は床を一段低くし、更らに低い石の間に下るに便してゐる。石の間は又幣殿とも稱し七間二面で

建 築 がある。本殿拜殿とも三手先の組物を用ひ、其間には透彫ある墓股を置き、幣殿と東西樂の間とは三斗であるがすべて漆を塗り、隨所に繪様彫刻を施し、鍍金の金具を打つてある。此建築は神社建築として最も發達した形式を有し、規模も大に恰好もよく、裝飾も豊麗であるが、極く末期に屬し、雄太の趣なく、裝飾は細緻纖弱に流れ、大崎八幡よりもやゝ劣つてゐる。

其他の遺物 此頃を終るに當り特殊な建築として擧げて置きいのは能樂堂と浴室とである。西本願寺には當代の能舞臺が二つあつて、聚樂第と

伏見城の遺構と稱へてゐる。前者は正面入母屋造、背面切妻造、柿葺で、後者は切妻造、檜皮葺である。後者の恰好は頗るよく出來て居り、切妻破風の下には大なる墓股があり、透彫を付し當代の特色をよく示してゐる。浴室も西本願寺に在るが、矢張聚樂第の遺構と稱し、桁行十一間梁間四間、單層、四注の簡単な建築で、桁行三間梁間一間の廻廊が附屬してゐる。

三 彫 刻

概 説

桃山時代は建築の時代であると共に繪畫も亦隆盛を極め、工藝美術も亦振つたが、獨り彫刻は鎌倉中期以來の墮落が室町時代を経て當代に及び恢復の兆さへ示さなかつた。尤もこれは佛教彫刻の事で、當代の彫刻は別方面で未だ嘗てない發展を示した。それは城廓や全盛の住宅建築及び神社建築等に裝飾として用ひられた彫刻である。建築の裝飾彫刻は鎌倉時代に端を發し室町時代に漸次發達しつゝあつたが、室町末期からやゝ盛んに當代に至つて非常に發展した。それは木彫であつて、透彫、高浮彫から殆んど丸彫に及び、其意匠は自由に放膽奇拔を極め手法は勇健にして精到、色彩絢爛たるもので、建築の彫刻ではあるが、彫刻として見るに十分なもの、之を建築的彫刻と名づける。しかし裝飾を目的とする所から裝飾美術とし工

彫 藝美術に近いもので、佛教彫刻の如く、本格的の彫刻とは云へない。唯鍍金の金具に施された透彫、筋彫の如く、純工藝美術と見るべきものではなく彫刻の中に入れて差支ないものである。佛教彫刻の衰へたのは、佛教そのもの傾向が變つた爲めで、彫刻のみならず建築も繪畫も工藝も佛教を題材としたものは漸次衰へたのである。方廣寺の大佛の如きも當時の大佛師法印宗貞、法眼宗印等の手腕が大佛鑄造に堪えなかつたものか木彫で済ませ、秀頼再興の際は大佛を鑄造したが間もなく罅が入り、遂に鑄つぶして了つた様な始末である。肖像彫刻も亦振はなかつた。能面は相當に作られた。

京都の四佛所はあれども振はず、名工として擧ぐべきものも出ない。建築的彫刻の大家としては、左甚五郎と甲良宗廣とがある。

彫刻家

此二人は關白近衛信忠の門扉を一板宛彫刻して腕を競つた事が傳へられてゐる。併し左甚五郎については詳しい事がわからず、遺作も西本願寺鴻之間の

欄間や日光東照宮を始め澤山傳へられてゐるが眞偽は明かでない。宗廣は建築家で、日光廟の大棟梁となり、芝臺徳院廟の彫刻もしたから江戸時代に跨る人である。能面の作家としては越前出目派に源助、大野出目派に是閑が名がある。源助は古源助と云はれ、女面に長じ、是閑は秀吉に愛せられ、天下の名を許され、其作には天下一是閑の烙印を捺した。

主な遺物

前述の如き次第で遺物と云つても建築的彫刻を擧げる外はない。それは聚樂第及伏見城の遺構に多く、又神社建築にも澤山あるが大低建築の條下で述べた。中でも代表的のものは、聚樂第遺構では大徳寺唐門、伏見城遺構では西本願寺書院鴻之間の欄間、浪之間の欄間、唐門、豊國神社唐門、都久夫須麻神社拜殿、寶嚴寺觀音堂等である。住宅建築では三寶院唐門、瑞嚴寺玄關など、神社建築では吉野水分神社々殿、淺間神社本殿、大崎八幡神社々殿、北野神社々殿等である。其彫刻は主として動植物である

彫が、植物には菊、桐、松、竹、梅、藤、葡萄、牡丹、蓮など、動物には鶴、獅子、象、獾、孔雀、麒麟、虎、馬、龍、鯉、木鼠など多く、それを一定の

組合せで用ふる風があつた。例へば西本願寺唐門の牡丹に獅子、松に鶴の如き、同浪之間欄間の葡萄に木鼠の如きそれである。併し一つものを獨立させ、又多くのものを自由に配置した例も固より澤山ある。動植物以外に雲浪を配した例もあり、人物も稀に用ひられた。其意匠が放膽奇抜な例としては大徳寺唐門を擧ぐべく、手法勇健の例としては豊國神社唐門を擧げる事が出来る。淺間神社脇障子の浮彫は繪畫的意匠巧妙を極め、建築から離して自由彫刻としての價値が認められる。能面の遺作も多少ある。源助の作で東京帝室博物館に在るのは萬媚である。

四 繪 畫

概 觀

當代は建築の時代であると同時に繪畫の時代である。前代に大發展を遂げた宋元畫派は、猶當代に於ても其後繼者によつて相當に行はれたが、本流となつたものは、前代の末葉宋元畫と大和繪とを結付け所謂漢畫の日本化を試みた狩野派である。此派には永徳、山樂の如き大家現はれ雄大なる構圖、豪宕なる手法、華麗なる色彩を以つて當代の壯麗なる書院造の裝飾に應はしい繪畫を作つた。乃ち當代の繪畫は無論宗教畫でなく、又床に掛ける鑑賞本位のものでもなく、實に建築の裝飾として描かれたもので、それは宛も彫刻が建築の裝飾として用ひられたのと同様であつて、之を建築的繪畫と呼んで差支ない。勿論當代の繪畫で今日鑑賞用として立派のものも多く遺つてゐるが、本領としては書院造の障壁畫、襖繪乃至書院造内部に用ひられた屏風畫の如きものであつた。従つて當代が繪畫の時代であると云つた意味は、室町時代を繪畫の時代であると云つたのと異り、當代は建築的繪

繪 畫

畫の時代と云ふべきである。これかの彫刻が建築的彫刻である事と共に當代が建築中心の時代である事を明示する證である。當代繪畫の流派としては前代の宋元畫派に代つて狩野派が最も勢力を振ひ、狩野派の桃山時代とも云ふべき程であるが、順序として前代からの流派の消長を述べると、先づ土佐派は前代末葉光信の娘千代女が狩野元信に嫁して畫法の上にも血族的にも土佐流を宋元畫派に注入したが、光信の子光茂、孫光元以下益々振はず、當代に至つても光元の孫光則が僅に家風を傳へ、其子光起は土佐流を中興したがそれは江戸時代に入る。猶土佐流の正統ではないが、本阿彌光悅、飛鳥井一位局なども此派の傾向に屬する畫家である。宋元畫派を繼承したものは雪谷等顔と長谷川等伯とであつて、等顔は雪舟第三世、等伯は同第五世と稱し、兩者雪舟の正統を争ひ、等顔が勝つて雪谷派を興し、等伯は別に長谷川派を立てた。等顔の子等屋、等益も父の遺風を傳へたが後は振はない。等伯の後に

桃山時代

は子等周、宗宅等家法を傳へ、久藏信春といふのも等伯の子で元信の手法を取り入れ父以上の名聲があつた。猶宋元畫派の系統で曾我蛇足の後に紹祥が出で、其子(異説あり)に直庵がある。鷹の畫に長じ、子二直庵も亦父について鷹に巧であつた。狩野派は前代末葉始祖正信の子に古法眼元信が出で、漢畫の日本化に成功し狩野派の基を確立したが、當代となり先づ元信の子に松榮直信がある。父の畫風を學び、其子に永徳重信が出た。永徳は當代隨一の大家であるが、其實子の光信、孝信ともに餘り振はず、孝信の子守信(探幽)に至つて祖父の名を耻しめざる大家となつたが之は江戸時代に屬する。又永徳の養子に山樂の如き大家が出で、永徳に學んだ中には海北友松の如き大家が出た。永徳、山樂、友松は當代の三大家であるばかりでなく、日本繪畫史を通じて傑出してゐる。猶友松を學んだものに宮本二天がある。

永徳と山
樂と友松

次に當代の畫家と主な遺物について述べるが、先づ三大家永徳と山樂と友松について記さう。永徳（一五四三—一五九〇）は松榮直信の子であるが、其生れた時は祖父元信が六十七歳で健在し（元信は永徳十七歳の時八十四歳で歿した）父直信は未だ二十三歳の若さ（直信は永徳に遅れる事三年七十四で死んだ）であつたから永徳が父に學んだ事は無論で、祖父にも薰陶を受けた事が想像される。彼は狩野特有の卓拔頸健な筆力と土佐傳來の濃厚豊麗な彩色とを以つて雄大な構圖をなし、先づ信長に用ひられ次で秀吉に愛せられ、英雄の尙好を學び、其感化を受け益々其特色を發揮した。信長の爲めに安土城に描いたのは天正四年、即ち彼の三十四歳の時で、遠寺晚鐘、支那聖賢、龍虎などを描いた。次に秀吉の爲めに大阪城に描いたのは四十一歳の時で、梅や松や人物など、非常に大きいものを描いたと傳へられてゐる。聚樂第に描いたのは四十四歳の時で、飛雲閣の招賢殿に雪中柳の圖

が遺つてゐる。猶大覺寺や智積院の障壁畫も永徳又は山樂の筆と傳へられてゐる。之等の障壁畫は、多くは構圖雄大、手法豪健、彩色華麗なもので、屏風でも御物「獅子圖屏風」や東京美術學校藏の「松鷹圖屏風」や帝室博物館藏の「檜圖」などはその類である。しかし御物「源氏繪屏風」は土佐繪風の美しいもの、又黒田侯爵家藏の「瀟湘八景」の如きは純宋畫風のもので、永徳の畫風の別方面を示すものである。猶「既圖屏風」（上杉伯爵家藏）や「車争圖」（九條公爵家藏）なども變つたものである。永徳は聚樂第には描いたが、其後四年で歿し、伏見城造營の際は既に居なかつた。僅かに四十八歳で歿したが大家の偉さは十分に今日迄光つてゐる。山樂（一五五九—一六三五）は本姓を木村、名を光頼と呼び、永徳に遅るゝ事十六年、永祿二年近江國蒲生郡に生れた。初め武士として身を立つべく淺井氏に仕へ、次いで秀吉の羽柴筑前時代に謁見して其近侍となり、屢々主君に従つて戰場に出入し、會々秀吉に畫才を認

繪 畫

められ、永徳について學び、技益々進み永徳と父子の縁を結んで狩野を名乗り、修理亮と改名し、永徳と共に大阪城や聚樂第に描き、智積院の障壁畫も描いたと傳へられてゐる。大阪城の際はまだ廿五歳であつたが聚樂第の際は廿八歳となつてゐる。飛雲閣には中層の上壇の間の天井に葡萄と木鼠を描き、杉戸に三十六歌仙を描いた。天正十八年永徳の歿した時は卅二歳で、それから山樂の一人舞臺となつた。即ち伏見城造營の際は卅六歳で最も活躍した。其襖繪を始めとし、殿内に用ひられた濃麗無比の桃山百双の屏風も彼の筆又は彼の指導によつて描かれたものである。伏見城遺構なる西本願寺浪之間の襖繪は永徳とも傳へられてゐるが年代の上から山樂筆と考へるのが至當である。次に三寶院再建の際は四十歳となり漸く圓熟の域に進んで來た。秀吉薨じても猶大阪に居たが、大阪城が陥つてから男山瀧本坊に逃れ、後家康に赦されて京都に住し、剃髮して山樂と號した。山樂の繪も永徳の如く構圖雄大、

桃山時代

手法豪宕、彩色絢爛を極めて居るが、永徳に比べては優麗の分子が加はり、題材に於いても永徳は巨松、巨梅、鷲、鶴の類が多かつたが、山樂には楊柳、梅花、秋草、水禽などが多い。遺物としては前記飛雲閣や西本願寺の外、九條公爵家藏の「車争圖屏風」、徳川義親侯爵家藏の「四季花鳥圖屏風」、帝室博物館藏の「虎溪三笑圖」、西本願寺藏の「驚猿圖屏風」、川崎男爵家藏の「耕織圖屏風」等がある。桃山百双と稱して現存するものゝ中、「宇治橋圖」(溝口宗彦氏藏)は構圖色彩頗る美事で、「吉野龍田圖」(根津嘉一郎氏藏)と共に代表的のものである。山樂は永徳と違つて七十以上の長壽を保つたが最も油が乗つた時代は秀吉在世中であつた。海北友松(一五三三—一六一五)は近江國蒲生郡堅田に生れた。永徳よりも十年早く生れたが、永徳に學び、後には宋畫の風を採り、殊に梁楷の減筆法を用ひたと云はれてゐる。其遺作には濃麗豪華のものもあるが、土佐風の優雅のものもある、健勁の筆を以つて描いた水

繪畫

墨の道釋人物など、永徳、山樂とは多少違つた方面の傑作もある。これ友松が當代茶道の大家古田織部正に茶を學ぶ事深かつたのも一原因であらう。遺物は妙心寺と建仁寺とに纏つて澤山ある。妙心寺には濃麗なる一例として「花卉屏風」道釋人物畫の一例として「寒山拾得圖屏風」の外、「三酸圖」、「琴棋書畫圖屏風」等があり、建仁寺には障壁畫として「竹林七賢圖」、「琴棋書畫圖屏風」、「雲龍圖」等があり、御物の「松原圖屏風」は構圖、色調とも優雅を極めた傑作である。

其他の畫家及遺物

雲谷等顔は肥前の人で、初め永徳（松榮との説もある）に學び、後雪舟を慕ひ、毛利氏が雪舟の筆意を傳へた畫家を求めた時之に應じて赴き、周防山口の舊雪舟の住んだ雲谷軒に入つてこれに住し、雲谷を姓とし自ら雪舟三世と稱した。遺作の明かなものは尠いが、もと池田侯爵家藏の「山水圖屏風」を見ると雪舟風を學んだ事がわかる。黒田侯爵家藏の「梅樹

桃山時代

群鴉圖」も等顔筆と傳へられてゐる。長谷川等伯は能登七尾（越前とも云ふ）の人で、代々染工を業としてゐたが、等伯は京都に出で、太秦の廣隆寺に寓し、曾我紹祥を師とし、又松榮等にも學んだが等顔と同じく雪舟に私淑し、筆力勇勁、自ら雪舟第五世と稱し、等顔と正統を争ひ敗訴して長谷川派を立てたと云はれてゐる。遺作甚だ尠く、大徳寺三門の丸龍に五十一歳の落款があり、同寺に襖繪もある。大徳寺三門の再建が天正十七年であるから天文八年（一五三九）に生れた事になる。曾我直庵は紹祥の子といふ事になつてゐるが全く血縁はないといふ説もあり精確な事蹟は明かでない。泉州堺に住し最も鷹を描くに長じ、山水花鳥人物にも巧だつたと傳へてゐる。帝室博物館藏の「龍虎圖屏風」と高野山宗龜院藏の「鷄圖屏風」は、前者は雄大後者は華麗、何れも傑作である。猶帝室博物館藏「花鳥圖屏風」、島津公爵家藏「鷹圖屏風」、遍照光院藏の「商山四皓」、「虎溪三笑圖屏風」、京都隣華院の「鷄圖」等がある。

繪 畫

子の二直庵も父の畫風を學び周文六世又蛇足六世と稱し矢張鷹に長じてゐた。大徳寺の「松鷹蘆鷺屏風」は傑作で、「松竹梅」三幅對（法隆寺藏）、「猫圖」（松井子爵舊藏、「花鳥屏風」（帝室博物館藏）等も代表作である。直庵は慶長頃の人であるが、二直庵は松竹梅の幅に明暦二年の落款がある位で江戸時代初期の畫家であるが便宜上茲に述べた。本阿彌光悅（一五六八—一六三七）は本阿彌光二の子で、家職たる刀劍の鑑定、磨礪淨拭に従事し、太虚庵又は徳友齋と號した。書を永徳（友松とも云ふ）に學び、土佐派の風を加へ一種特獨の手法を發揮した。書にも巧で、近衛三藐院、松花堂昭乗と併せて三筆と稱せられた。又蒔繪や陶器にも卓抜な意匠を施し、殊に蒔繪は光悅蒔繪と稱せられるものであるが後に述べる。遺作の中、繪は甚だ尠く、岡崎正也氏藏の「扇面流し」小屏風があり、書は團伊能氏藏に櫻卷物（繪は宗達）がある。光悅色紙と稱するものは雲母で模様を現はしたものである。宮本二天も同じく友松に學

んだが、一種氣韻ある繪を描いた。内田氏藏の「百舌之圖」、原富太郎氏藏の「鬪鷄之圖」など其特色を發揮した傑作である。劍道の達人であつた事は有名である。

風俗畫
の遺物

最後に風俗畫の遺物について述べる。其規模の大きくしてしかも年代の明かな代表作が三つある。中二つは豊國大明神臨時祭圖屏風で、豊國神社にあるものと、蜂須賀侯爵家藏のものとのある。共に六曲一雙で、圖の様は大同小異であるが、蜂須賀家のものは人物が小さく巧に數百人の群衆を現はし、豊國神社のものは人物やゝ大きく社殿が立派に描き現はされてゐる。而して此方は狩野内膳筆と畫家の名を記し、慶長十一年八月十三日片桐が秀頼に獻納したもので、大祭後二年に出來たものである。次は名古屋城内の風俗畫で、書院造の床、違棚、襖、壁、障子の腰に至るまで悉く描かれてゐる。其題材は愛宕山清瀧川の公家の酒宴、加茂の競馬を始め、鞍

馬神社の祭、吉田神社の探湯の神事、泉州堺大島神社、住吉神社の船祭から大阪難波新地の遊、庶民雑業の態にまで及んである。二つの部屋の四周全部に描かれてゐるので、風俗畫としては最も規模の大なるものである。濃麗の彩色を施し、よく建築と適應し當代の趣味を現はしてゐる。年代は名古屋城の全部竣工したといふ慶長十九年に描き上げられたものに違ひない。之等の風俗畫は前代までの大和繪の系統から出で、次の江戸時代に至つて浮世繪となる経路にあるものである。

五 工 藝 美 術

概 観

當代は彫刻も繪畫も主として書院造の裝飾の爲めに發達したが、工藝美術も亦書院造の支配を受けざるを得なかつたのは、建築と工藝美術との關係から當然の事である。即ち最も多く用ひられた鍍金の金具

(これは神社建築にも澤山使はれた)を始めとし、家具調度、殊に蒔繪の棚や箱の類は豪華豊麗なる障壁畫の内に在つていゝ調和をなしたと思はれる。又茶道の流行に伴つて茶器の製作益々進歩し、その爲め金工と陶工とが發達した。又秀吉は天下を取つたとは云ふものゝ半ば戦に過し、朝鮮征伐などもあつて、其必要上武器甲冑の製作も益々進歩した。厨子と須彌壇も數は少いが、非常に優れたものがある。

厨 子 工

厨子の遺物には法華堂本堂のものと高臺寺靈屋のものが代表的である。前者は全部黒漆を塗り、隨所に鍍金の金具を打ち、其金具の模様が當代の特色を現はしてゐる。後者も全部黒漆を塗り、扉の内外には紅葉、松、竹などを蒔繪とし、鍍金の金具を打ち、華麗を極め、漆工、金工ともに其意匠手法秀抜にして當代獨特の價値がある。木工は建築的彫刻や漆工とも離れられないものであるが、茲には代表的遺物として御物雲龍の鞍

と妙心寺藏棄君車上之像を擧げて置く。此鞍は前後の兩輪に雲龍を彫刻し、素地の儘で漆をかけず、縁だけ黒塗金梨子地としてある。居木の裏に「慶長五年二月吉日」と銘し花押も刻んであるが何人であるかわからない。手法頗る巧にして生氣に富み工藝的木彫として上乘の作である。豊臣棄君車上之像は玩具のやうなものであるが木工の遺物としても面白いものである。

金工

金工には甲冑、刀劍裝飾、釜、燈籠等がある。甲冑は明珍家十九代目の宗家、二十代目の宗信が家業を繼いだ。宗家は久太郎と稱し天正の頃江州安土に住し、家康の爲め大圓平頂山尊靈甲を作つた。宗信は大隅守と稱し、慶長の末年大阪に住した。前代に起つた早乙女家には家春、家則などが出で、常陸新殿之庄に住み家業に従つた。刀劍裝飾の家たる後藤家四代の光乗（一五二九—一六二〇）は父の跡を繼いで法眼に叙せられ、手法に初代の風があり、品位を有し、父祖三代の精粹を萃めて後藤家の技術を完

成した。三代乗眞の二男元乗も名人で、其作に武者を彫刻した小刀柄がある。五代目徳乗は光乗の子で法眼に叙せられ、秀吉に愛せられた。門人の野村正時は子孫傳へて江戸末期に及んでゐる。六代榮乗は徳乗の子で、矢張法眼に叙せられ人物の彫刻に巧であつた。鍔工としては埋忠重吉が橋宗近の二十五代目で、鐵の外に眞鍮、赤銅をも用ひ、新しい意匠で製作し、豊臣三代に仕へ後には明壽と號した。劍工としても有名で諸國から教を乞ふもの多く、門人の埋忠正知は岡田家の祖となつた。其他岡本家の祖となつた岡本友治があり、また小田原鍔を創造した小田原正次は始めて鐵と赤銅鍔の細透を作つた。釜は前代に有名な筑前蘆屋が當代にも作られ、今泉氏の藏品に「天正八年觀音堂覺圓」といふ銘のあるものがある。前代の名人彌阿彌の四代目名越彌七郎は信長に仕へた。西村道仁は茶人紹鷗の釜師で、櫻川、鬼風呂、霰釜、棗目釜等の名品を作つた。其子に九兵衛及び道彌が出で江戸時代に傳へた。辻

與治良（與次郎、與四郎とも書く、一五五六—一六〇三）名は實久、後剃髪して一旦と號した。千利休の知遇を得、秀吉に愛せられ、釜や燈籠を作つた。其作に係る名釜には、宗易好丸釜、阿彌陀堂、尻張、雲龍、萬代屋、針屋、國師、百會霰、龍寶山、少庵好巴釜等がある。方廣寺の巨鐘鑄造を命ぜられ、天正十四年には大佛殿丈六の佛像を鑄造し、文祿三年には伏見桃山百間廊下の金燈籠を作り、秀吉薨後、燈籠を鑄て豊國神社に寄進した。それには「奉寄進鐵籠慶長五庚子年八月十八日天下一釜大工與次郎實久鑄之」と銘した。帝室博物館藏の球形のものにも「天正十一年未年五月日釜大工與治良作」といふ銘があり恰好もよく透彫も巧である。弟子には彌四郎及び藤兵衛の名がある。名越三昌は善正の子で、通稱を彌右衛門と云ひ後剃髪して淨味と號した。慶長十九年秀頼の命で、方廣寺大佛殿の巨鐘を鑄造した、銘に「治工越前少椽藤原三昌」とある。寛永十四年歿し子昌高が繼いだ。門人に名工多く、宮

崎寒雉、堀淨甫、大西淨清、西村九兵衛等皆江戸時代に涉つてゐる。作者は不名であるが下野鏝阿寺に當代の釣燈籠が二個ある。一つは「奉寄進慶長十五年庚戌十一月吉日大久保新十郎御母儀様」と銘し、透彫の文様が優れてゐる。一つは「奉寄進足利大日堂慶長十九年九月吉日大久保石見守敬白」と銘し、透彫の上に毛彫を施した意匠手法とも凡でない。

漆工

漆工は前代に高蒔繪及び梨子地を完成したが、其後の戦亂に工人離散し、秀吉亂を平げて後、之を烏丸に集めて製作せしめ烏丸物と云つた。其後意匠技術とも進歩し、慶長十二年に出來た高臺寺靈屋の須彌壇、厨子及び調度類には全部蒔繪を施し、之を高臺寺蒔繪と稱してゐる。工人の名あるものには先づ本阿彌光悅がある。光悅の事は繪畫の項でも述べたが、繪と書に巧い外、茶を古田織部正に學び、作庭をもよくし、蒔繪、陶器にも卓抜なる意匠を以つてよく當代の豪華の趣味を現はすものを作つた。こ

れ實に宗達、光琳の先驅をなしたものである。遺物としては春日山と杉に鹿を現はした經箱（岸光景氏藏）、舟橋硯箱（帝室博物館藏）、忍草硯箱（谷森眞男氏藏）、子の日の棚（蜂須賀侯爵家藏）等が有名である。舟橋の硯箱は「東路のさの、舟橋かけてのみ思ひわたるを知る人ぞなき」の歌意をとり、蓋を半球状に高め、鉛で橋を嵌入し、歌の文字や浪や舟などを金蒔繪とし、地は金粉溜としてある。全體の恰好が面白く、意匠手法とも放膽である。忍草硯箱は忍草を蒔繪とし、鉛で和歌を現はし、蓋裏には貝及び鉛で兎を現はしてゐる、歌の文字は近衛三藐院の筆である。子の日棚は高さ二尺一寸五分、小松、扇面、夕顔、檜垣、手車、楓葉、散松葉などを以つて意匠し、中の扉から下の蓋へかけて檜垣を現はした意匠など奇抜で技巧殊に優れ、當代工藝美術の代表的遺品の一つである。他の名人には幸阿彌長晏、二代秀次、野路善鏡、盛阿彌紹甫等がある。長晏は前代の名家幸阿彌道長七代の孫で、天正十五年後

陽成天皇御即位の調度を作り慶長八年歿した。二代秀次は前代の奈良の秀次の後で、千利休の愛顧を受け、其好の茶器を作り、秀吉から天下一の名を得た。野路善鏡、盛阿彌共に千利休の爲めに茶器を作り、秀吉によつて天下一の名を與へられた。猶漆工の遺物として挙げたいのは嚴島神社の平家納經の唐櫃である。此納經は平清盛が奉納したもので、經軸、經函等は藤末時代の立派な工藝品であるが、福島正則は慶長七年更に上箱として唐櫃を寄進した。黒漆を塗り、表面に蔦の蒔繪を施し、裏面には經卷の名を記してある。

陶工

陶工は前代發達の後を承けて更らに大發展を遂げた。其理由は當代の他の美術と同じく秀吉の爲めで、秀吉が茶道を好んだ事が第一である。第二には千利休、細川幽齋、古田織部正等茶道の名人が出で、各其好む所の陶器を作らしめた事である。加ふるに第三の理由として文祿征韓役の結果、諸侯が彼地の陶工をつれ歸つて、各其封土で陶窯を開かした事

は我が陶工發達史上に大なる力があつた。先づ從來あつた窯で振つたのは、信樂燒、樂燒、唐津燒、備前燒等であつた。信樂燒は前代に紹鷗信樂があつたが、當代には千利休、千宗旦も之を愛し、其好みのもものは利休信樂、宗旦信樂と稱されてゐる。樂燒の起源は前代の宗慶であるが、其子長祐、常慶の二人は父に陶法を學び、天正五年信長に茶器製作を命ぜられた。兩人は利休の意匠によつて赤、黒釉の茶碗を製し大に賞せられた。此長祐の作品は京燒又は今燒と稱せられたが、天正十五年秀吉は聚樂第内に陶窯を築き、茶器及び瓦を作らしめ、其瓦に樂字の印を捺さしめた。これから聚樂燒を略して樂燒の名が高くなつた。樂燒は陶質柔かにして白く、黄土を塗つて更らに焼いたものが赤色を呈し、加茂川石を細末とし釉藥としたものは黒色を呈する。すべて指頭を以つて捏造し、其形に雅味がある。長祐(一五一六—一五九二)は通稱を長次郎と稱し、樂燒としては初代である。其遺作は赤樂茶碗「玄翁」

(帝室博物館藏)、水指(妙喜庵藏、天下一ラク長次郎の銘あり)等がある。弟常慶(一五三五—一六三五)は通稱吉左衛、樂を以つて姓とし、兄の歿後二代を嗣ぎ、聚樂第内にあつて作陶に従事し、矢張天下一の號を許された。三代目樂道入(一五九九—一六五六)は通稱吉兵衛、異名をノンカウと號し、樂燒中の名工であるが、寧ろ江戸時代に屬する人である。本阿彌光悅は此道入に陶法を學んだといふが、或は常慶ではなからうか。兎に角光悅の多能は陶法にも亦現はれ名品を遺してゐる。其遺作に赤樂茶碗「鷹峰」(帝室博物館藏)同「太郎坊」(岸光景氏藏)「緋威」(徳川義親侯藏)、「七里」(益田男爵家藏)、「大光悅」(岸光景氏藏)等がある。唐津燒で慶長以後の作品は繪唐津と呼ばれるものが多い。赤土、鼠土の二種があり、青黄黒を兼ねた釉を施し、黒釉で笹葉様の繪の判然しないものを古いとしてゐる。備前燒としては天正年間から始めて茶器を作り、三日月六兵衛といふ名工が現はれた。其作品には弦月形の

記號があり、多く薄青色の釉を施し、茶褐色に變ぜしめたものである。秀吉が中國に出陣した時、伊部村の陶工大響五郎左衛門の家に滞留し、陶工木林、森、寺見、金堂、頓宮等をして茶器を作らしめた。次に當代に起つた窯には美濃焼、織部焼、清水焼、今戸焼等がある。美濃焼は瀬戸の陶祖加藤景正の後裔で藤與三兵衛景光といふもの天正十一年土岐郡久尻村に来て陶窯を築いたのに始まる。信長其作を見て嘆賞し朱印を賜つた。景光に四郎右衛門尉景延、彌左衛門尉景頼の二子があり、景頼の養子半左衛門景増其居を多治見に移し窯を築いた。これ多治見窯の創めである。尾張の織部焼は茶道の名人古田織部正の創意により慶長年間始めて一種の茶器を製した。其質志野焼に似て稍柔かに、黒褐色及青色釉を施し、多くは草繪が描かれてゐる。帝室博物館の獅子鈕香爐は、青織部釉を施し、蓋の表面に「加藤佐右衛門熱田大神宮へ寄進」の周圍に「慶長十七年熱田大神宮加藤佐右衛門寄進仕候九月吉

日」の銘がある。京都の清水焼は慶長年間以後に始まる。茶碗屋久兵衛を祖とする云はれ、江戸の今戸焼も慶長から始まつたと傳へられてゐる。猶當代に諸侯が朝鮮から陶工をつれ來つて窯を築かしたものに左の諸窯がある。

高取焼(筑前) 黒田侯によつて慶長頃始まる。其頃の作品が古高取。

萩焼(長門) 慶長三年朝鮮の陶工李敬始む。

上野焼(豊前) 慶長頃鮮人尊楷、細川侯の命により開窯。

薩摩焼(薩摩) 慶長頃より鮮人陶工芳仲平意等に藩窯を開かした。

有田慶(肥前) 慶長三年鍋島侯鮮人陶工に開窯せしむ。

石工

石燈籠と手水鉢とが當代にも澤山作られた。其一例として松平伯爵藏のものは竿石の長さ三尺、それに五三の桐及び「天正十三年

乙酉二月日」の銘がある。もと大阪城に在つて秀吉の遺物と傳へられてゐる。各部の比例よき石燈籠である。猶染織については次代に併記する。

六 桃山美術の特色と價值

同時代

室町時代は鎌倉時代について猶模倣時代であつたが、其末葉には日本化の傾向を現はし、將に第二次同化時代が來るべき兆を示してゐた。即ち建築に於て神社、住宅、茶室、庭園建築等が著しく日本趣味を帯び、繪畫に於いてはさしも隆盛を極めた宋元畫派が土佐派を加へ漢畫の日本化として狩野派が現はれた。桃山時代に入ると、其同化の機運益々高まり、加ふるに信長、つゞいて豊太閤なる大英雄が現はれ、其趣味によつて一層同化の機運を助長し、進んで獨創的の分子も加はり、其時代は頗る短かつたにも拘らず全く前後になき特色を發揮した。

四大特色

桃山美術の四大特色は同化時代で日本的である點と獨創のある點とであるが、更らに四つの特色を擧げる事が出来る。第一は英雄

的といふ事である。過去の美術史に於ても聖德太子、聖武天皇、藤原道長、同清衡、平清盛、足利義滿、同義政など皆偉人として當時の美術に感化を與へ、各特色を作つたが豊太閤には及ばなかつた。殊に上世中世は大に佛教の力が加はつてゐたが、太閤の場合は佛教は寧ろ關係が淺く、純粹に豊太閤なる英雄の感化を受けてゐる。第二は非宗教的といふ事である。鎌倉時代迄は宗派の差こそあれすべて佛教の勢力から逃るゝ事が出來ず、美術は即佛教美術であつたのであるが、室町時代から佛教の勢力を逃れて漸次俗的となり、桃山時代に至つて俗的美術が中心となつた。この宗教美術から俗的美術に移つたといふ所から第三の特色として近代モダイン的といふ點を擧げる事が出来る。室町末期の暗黒時代を経て燦然たる桃山時代に入つた所は、歐洲の文藝復興ルネッサンス期に似てゐる。第四に表現から云へば豪華といふ點である。建築に建築的彫刻に繪畫に工藝に、桃山美術の最も主な特色は豪放華麗に在る。尤も一方に瀟

酒の表現を有する所は、英雄が大兵を動かす一方に茶道を好むといふ二方面を美術に現はして興味深き點である。

價値は獨創が第一

以上の如き特色ある桃山美術の價値は、英雄主義の具體化、豪華の表現に在る。これを具體的に云へば、建築に於ける城廓と書院造、權現造の神社、それらの内外の色彩裝飾、金屬裝飾、彫刻裝飾、及び障壁畫、屏風、更らに調度としての漆工、陶工等である。遺物としては姫路名古屋の天守、伏見桃山城と聚樂第の遺構、それらの内部の障壁畫、又永徳或は山樂と稱する智積院の柳櫻春草、紅楓秋草の二圖及び友松の屏風光悅の蒔繪、樂の茶碗の如き、すべてこれ豪放華麗、桃山卅年の美術の粹であつて、支那の同化より進んで日本趣味の獨創の美を發揮したものである。而して美術に最も重要な點が獨創に在る事を思へば、桃山美術の偉大なる價値は説明する迄もない事である。

第十一章 江戸時代

一 時代の大勢

概観

一代の英雄秀吉によつて燦然たる一時代を日本美術史上に印した桃山時代は僅かに三十年内外で終り、家康が征夷大將軍となつた慶長八年（一六〇三）に江戸時代は始まつた。尤も美術上の特色から慶長年間には猶桃山時代として見るべきであるが、兎に角これを時代の限界として、徳川將軍の續く事十五代、將軍慶喜の時に至つて大政を奉還し將軍を辭した慶應三年（一八六六）十月江戸時代は終る。これを江戸時代と云ふは事實上政權を握つてゐた徳川幕府が江戸に在つたからであるが、同年孝明天皇崩御となり、翌年明治天皇即位あらせられ、明治と改元し、二年江戸を以つて帝都とし、東京と改稱された。江戸時代は前代が僅かに三十年であつたのに比し頗る長く實に二百六十三年に達する。よつて之れを幾期かに小區分する事が出

江戸時代

來る、その分け方は色々あらうが、私はこれを三分し、四代家綱將軍の終まで（一六〇三—一六八〇）を初期とし、五代綱吉將軍の初から九代家重の終（一七六〇）までを中期とし、十代家治から後を末期とする。秀吉が急に織田氏に代つて天下を取つたのと違ひ、家康は徐々豊臣氏を制し、征夷大將軍となつてから元和三年豊臣氏を亡ぼす迄實に十三年を費してゐる。しかも自分は將軍職にある事僅に二年で子秀忠に譲り、黒幕となつて徳川氏の礎を固め、元和二年三月太政大臣となり四月薨じた。秀忠將軍たる事十八年にして子家光に譲り、家光は父祖二代の覇業の後を承けて立ち、先づ諸大名の譜代外様の別を廢し、封建の制を固め、徳川十五代の礎を完成した。而して次の四代家綱は唯守成に一步を進めた丈けであるから、要するに初期は桃山時代を繼承して江戸時代を開く基礎の時代で、過渡期であつた。此の間に文化は京都から江戸に東漸し、江戸を中心とする美術の搖籃時代とも云ふ事が出来る。

これを具體的に示すものは江戸城と日光廟と東叡山寛永寺の三つである。中期は學を好み能樂を愛する綱吉將軍によつて始まり、天和貞享を経て元祿となり、華美にして淫靡なる所謂元祿時代を現出し、文藝の華一時に榮えた。六代家宣、七代家繼は在職合せて七年、八代吉宗將軍は徳川氏の中興と稱せられ、政紀は緊張したが文藝はやや衰ふるに至つた。末期は十代家治を経て十一代家齋將軍の代となり徳川氏の最盛期に達し、天明寛政から文化文政に至り、所謂文化文政時代として文藝の盛況は元祿時代にも劣らぬ位であつた。併し家齋の治世は前後五十年に及び、晩年は内外の風雲漸く穩かならざる有様となつた。即ち文化十四年（一八一七）既に英船浦賀に現はれ、翌文政元年又浦賀に入港し、五年にも來り、弘化元年には蘭船長崎に入港して國書を呈し、同三年には米艦二隻浦賀に來つて互市を乞ふた。而して嘉永六年（一八五三）となり、遂に米國水師提督ペリー軍艦四隻を率ゐて浦賀に來り久里濱

に上陸し、大統領の教書を將軍に致し、翌安政元年ペリーと和親條約を結び、下田函館の二港を開くに至つた。かくて美術など顧みる餘裕もなく、鎖國三百年の夢は破れて歐米文化輸入の大勢は既に江戸末期に現はれたのである。

外 交

江戸時代の外交は一口に云へば所謂鎖國主義であるが、其間に自ら對外關係があり、しかも其相手國に大變化を生じた。支那は當代の初既に明亡びて清朝となつたが、我國との交通は特に著しい事なく、却つて米國及び和蘭、葡萄牙、英吉利等との交渉を生じて來た。歐洲は十七世紀の初葉に當り文藝復興期の文化は將に高潮に達し、藝術と共に科學も發達し、航海の術も進歩し、英蘭共に東印度商會を設立し、通商交通を東洋に求め、我國にも既に室町時代末葉から來朝し、基督教を輸入した。然るに基督教は秀吉によつて禁止せられ、其勢を殺がれたのであるが、江戸時代に入り家康となつて其禁が弛み再び盛んとなつた。然るに慶長十六年其信徒中に陰

佛 教 の 大 勢

謀を企てたものがあつたので家康も之を嚴禁し信徒を極刑に處した。これが反動として殘黨は寛永十四年（一六三七）天草によつて亂を起し、幕府大兵を發して之を殲滅し、延ひて鎖國主義を執り、蘭人以外は歐洲人の來朝を禁じ、我國人の洋行を止め、大船を造る事を嚴禁するに至つた。従つて其後は僅に蘭人のみ來つて通商に従事するに過ぎなかつた。若し此徳川幕府の鎖國主義が行はれなかつたならば明治時代は少くとも百五十年以前に來たであらう。しかし嚴重なる鎖國主義も到底世界の趨勢に抗する事能はず、末葉に至つては遂に開國するの止なきに至つた。即ち米、露、英、佛、蘭と通商假條約を結んだのは安政五年（一八五八）であつた。これから歐米の文化は堤を決した如くに流入したが、正式に歐米との外交が始まつたのは次の明治時代である。

前述の如く基督教は禁壓されたので、主として佛教が行はれた。佛教は天台宗を始めとし、眞言、臨濟、曹洞、淨土、日蓮宗等の

外、新に黄檗宗も開立されたが、徳川氏は政策として寧ろ之を敬遠し、諸法度を制定し、寺院の等級位階を定め、法衣法服の末に至るまで上下の秩序を正した。よつて京都の諸大寺は其名美しく位は高いが、空名を擁するのみで多くは衰頹に傾き、江戸を中心として武家政治の下に開立し、幕府に擁護せらるる大寺のみが勢力を有するに至つた。而して此力を助けたのは禪宗の崇傳と天台の天海とである。崇傳は南禪寺の長老であつたが慶長十五年家康の命で駿府に金地院を建立し、公家法度を始め比叡山法度、關東天台法度、五山十刹諸山法度、浄土宗法度等皆長老の手になつたと云はれてゐる。天海僧正は慶長十二年家康に召されて叡山の探題執行となり、十八年家康の命で日光山の別當となり、元和九年秀忠に説いて東叡山寛永寺を建てしめた。崇傳が政治的に偉らかつたのは諸法度の制定でわかるが、天海僧正も中々政治的手腕があつたらしく、寛永二十年寂し慶安元年慈眼大師と諡せられた。又徳

川幕府は公家寺家に對しても力を文教に注がしめ、其結果永祿享保の頃は佛敎界にも中々學者が輩出した。以下各宗について述べるが、先づ天台宗は日光山や東叡山等幕府と特別の關係があり、天海僧正の如き偉い者も出たが、他には妙立、電空の二師が同宗で異説を立てた。眞言宗には慶長元和の頃三寶院に義演大僧正が出で、他に亮賢、契沖、明惠、浄嚴等の高僧が現はれた。勢力のあつた寺は仁和寺、大覺寺、三寶院、勸修寺、金剛峯寺、長光寺、智積院等である。臨濟宗は室町時代に全盛を極め、足利氏の滅亡と共に衰へたが、當代初葉に澤庵禪師が出で、品川に東海寺を創め、妙心、大徳兩寺の出世を復し、中期に白隱禪師出で、宗風大に振ひ、其門下には東嶺圓慈、遂翁元廬を始め三十餘人の高僧があつた。曹洞宗も應仁以後衰へてゐたが當代に至つて隆盛となると同時に中心は北國から關東に移つた。永平、總持の兩寺は固より兩本山であるが、下總の總寧寺、武藏の龍隱寺、下野の大中寺を以

つて一宗の總僧録とし、又江戸の總泉、青松、泉岳の三寺を江戸觸頭とし、以上六寺を關府六ヶ寺と呼んだ。尤も遠三駿豆の四國は可睡齋が統べた。而して中期に月舟、卍山の兩和尚が出で大に宗風を張つた。其他天桂、指月の兩禪師、本光、面山の兩和尚等の高僧いで、學寮梅檀林は江戸吉祥寺に開かれ、人物齊々として輩出した。淨土宗は桃山時代にも盛んであつたが、當代は徳川氏との深い關係から其勢諸宗に冠たる有様であつた。初期には東に觀智國師、西に滿譽僧正出で、殊に觀智國師は家康と謀つて關東十八檀林を興し、學事を奨勵し、増上寺を中興した。滿譽僧正は知恩院に住し之を中興した。觀智國師の門下には吞龍、廓山、了的、聞諦、隨波、了學等の高僧いで、隨波の下に檀通上人、其下に祐天上人が出た。別に觀智國師に前後して靈岸上人いで、始め奈良に靈岸院を開き、次で房州に謫せられ又靈岸院を建て赦されて伊勢山田に靈岸寺を創し、家康に召されて江戸に靈岸島を築き、道本

山靈岸寺を開き、後智恩院に住し殿堂を修し洪鐘を鑄造した。門下の珂山上人は寺堂が焼けたので靈岸寺を今の深川に移した。同じ頃に幡隨白道がある、觀智國師と法議を上下し、上州館林に善導寺を建て智恩院に住し、江戸に還つて新知恩寺(幡隨院)を開いた。淨土眞宗は顯如上人京都六條に本願寺を創立し、文祿元年上人寂して長子教如上人後を嗣いたが、弟は母と共に秀吉に頼み教如を廢し法嗣となつた、之准如上人である。然るに關原大戰後、教如は家康の爲め寺地を貰ひ東七條に佛堂を建てた。これ東本願寺で大谷派といふ、茲に本願寺が東西に分れたが、之家康が本願寺の勢力を割く策だと云はれてゐる。爾來兩寺の反目甚しかつたが、興學の風は何れも盛んであつた。鎌倉時代に臨濟、曹洞二宗傳來以後、支那高僧の來朝も絶えてゐたが、當代初葉に隱元禪師來朝して黃檗宗を開いた。禪師は年廿九の時黃檗山に上り、後同山の法席を嗣いだが、承應三年(一六五四)六十三歳の時弟子と共に長崎

に着した。福濟、崇福、興福の諸寺競うて請待し、攝津を経て萬治元年江戸に上り、將軍家綱に謁し、翌二年山城宇治に土地を賜り、妙心寺の龍溪大徳と謀つて寺を建て、寛文元年八月竣工し、黄檗山萬福寺と號し、一山の制規皆支那の例に依つた。以來徳門益々高く、延寶四年四月二日上皇から大光普照國師の號を賜り翌三日寂した。木庵禪師其後を嗣ぎ、門下に鐵手、慧極、潮音あり、潮音は上州館林に廣濟寺を創め、始めて關東に黄檗禪刹が開かれた。普化宗は支那の普化禪師を祖とし、鎌倉時代に傳へられたが、江戸時代に至つて禪の一派として法度を定め、勇士浪人の隱家武者修行の宗門とし、武士以外の入門を禁じ、制限を嚴にし、木太刀懷劍の携帯を許し、宗徒の外一切尺八を禁じた。此虚無僧の法度は浮浪の輩の便宜となり宗徒年々増加したが、虚無僧改を諸國に派して品行を監督した。江戸幕府は佛教寺院を以つて文教の府たらしめんとし學問を奨勵し、其結果佛教界に學者が出ると共に

神儒の學者も輩出し、長く一隅に偏在してゐた神儒の學問が漸く勢力を得、神儒佛三者鼎立の狀を現出した。即ち林羅山は初め建仁寺に學んだが、僧たる事を嫌つて藤原惺高の門に入り、山崎闇齋も僧侶から還俗して朱子學に就き、木下順庵も佛道から儒道に轉じたと稱せられる。神道には跡部光海、玉木章齋出で、佛教を排し、儒道には新井白石、熊澤蕃山、伊藤仁齋、荻生徠等いで、佛教と相納れず、後には本居宣長、平田篤胤等神道の古い所を研究して佛教を攻撃する者も出た。

文學

當代は泰平と徳川氏の學問奨勵と印刷術の進歩とによつて大に盛況を呈した。尤も初期は勃興時代で、僅に和歌に中院通勝、烏丸

光廣、松永貞徳がある位で、貞徳は俳諧にも長じ弟子に野々口立圃、松江重頼、安原貞室が出た。この古風の俳諧に對して、西山宗因は所謂檀林風の俳諧を起した。小説は前代末葉に「恨之助」當代に入つて「薄雪物語」が出たが大

したものではない。浄瑠璃や歌舞伎も猶幼稚に過ぎなかつた。中期の元禄時代に入つて始めて燦然たる光を放つた。先づ俳諧には松尾芭蕉いで、従来の俳風を一變し俳聖と稱される。芭蕉は伊賀の人、後旅にいで多くは江戸に居つたが、之に對して攝津の伊丹に上島鬼貫が出で、芭蕉に「いだ大家であつた。かく俳諧に大家が出たが、元禄文學の粹は小説と浄瑠璃とで、小説の井原西鶴、浄瑠璃の近松門左衛門は、元禄のみならず我國軟文學の大立物である。西鶴は初め俳人であつたが天和二年傑作「好色一代男」を出してから一躍快樂本位の小説の大家となり、中途に「武道傳來記」の如き武士を題材としたものを書いたが、再轉して「日本永代藏」や「胸算用」の如き町人小説の優れた作を出した。近松は初一條家に仕へたが浪人して都萬太夫座の爲めに歌舞伎脚本を作り、次に宇治加賀椽、井上播磨椽等の爲に浄瑠璃を作り、貞享二年竹本義太夫（筑後椽）が道頓堀に竹本座を立てるに及び、其座附作者として續

々新作を出し、其題材八分は時代物で、世話物は二分に過ぎないが、今日傑作と稱せらるゝ「天の網島」を始め藝術的價值ある作は世話物である。實に西鶴の小説と近松の浄瑠璃とは元禄時代の半面をよく現はしたもので平民文學の至寶である。翻つて硬文學では先づ漢學には木下順庵、貝原益軒があり、古學には伊藤仁齋、荻生徂徠が現はれ、別に國史の方面では徳川光圀、新井白石が出で、萬葉の研究家として契沖があり、國學には荷田東麿が出た。歌舞伎も元禄時代となつて大に發達し名優輩出した。京には坂田藤十郎が出で、江戸には荒事の名人として初代市川團十郎同じく二代相嗣ぎ、和事師として中村七三郎が現はれた。末期の文學は中期の活躍に比してやゝ振はなかつたが、種々の大家は相當に出た。軟文學では小説に山東京傳と曲亭馬琴が現はれた。馬琴は長篇の中に巧な結構を回らし、尙古的文體を以つて美辭を列ね、其内容は勸善懲惡主義であつた。「八犬傳」は代表作として有名である。京傳

馬琴と同時代に滑稽作家として十返舎一九と式亭三馬がいで、次で柳亭種彦と爲永春水とが出た。又別に無名の作家により所謂黄表紙と稱せらるゝ小説、及び洒落本と稱する遊里の様を寫した小説が行はれ、狂歌も盛んで太田蜀山人の名高く、柄井川柳も現はれ川柳の名によつて流行した。次に國學では一世の大家加茂眞淵が現はれ、其門に加藤子蔭と村田春海とがいで、香川景樹は歌學者として名があつた。又俳壇には天明に與謝蕪村が出た。芭蕉歿後の墮落した俳壇を革新した偉才で、繪畫でも一世の大家として許されてゐる。やゝ末葉に現はれた國學の大家は本居宣長で、其門下に平田篤胤が出た。既に中期光圀の「大日本史」頃から勤王愛國の精神が鼓吹されたが、末期に至つて眞淵、宣長、篤胤等の國學は之を助長し、明治維新の一原因となつた。

武士と町人
地方文化

元和偃武の後、天平泰平となり、しかも武士道の精神が其間に發揮され、利弊ともに高調に達したのは興味ある事である。山鹿素

行の如き之を研究し、大石良雄の如き實行者も現はれた。武士は義理を重んじ金錢を輕んじ、所謂武士は食はねど高楊子といふ氣概があつた。而して町人は武士とは全く階級を異にし、武士の袴に觸れても斬られる事を當然と考へるやうな有様であつた。併し武士氣質は江戸時代の半面で、他の半面は町人によつて作られ、文學、美術、遊藝の如きは主として町人の方面に發達した。尤も武士の方には大名があり、大名は各地に在つて藝術の保護者となり、文藝を奨励し、地方文化の發達を示したのもある。例へば加州の前田侯の如き五代松雲公時代の九谷焼、加賀染を始め金工、漆工、陶工すべて非常な發達を遂げた。勿論各藩により文化の程度も異り特色を異にした。又大名の參勤交代の制は、地方との聯絡を生じ、地方の文化を吸収すると共に、江戸の文化を地方に傳播した。しかし大體に於いて従來の京都中心の文化は漸次東漸して江戸中心となるに至つた。

二 建 築

概 観

初期は前代の繼續で、其種類、様式、手法とも前代の風を襲うてゐる。即ち書院造が中心となり、神社、佛寺、茶室等が壮大豪華の風から漸く繊巧に流るゝ傾向の下に建てられた。前代に榮えた城廓建築は禁止された爲めに一二の例外を除いて全く衰へ、前代に端を發した廟建築が當代特殊のものとして初期に光を放つてゐる。中期から末期へかけては、書院造は中位のものゝが諸大名によつて江戸及び國元に作られ、小規模のものは旗本乃至家臣の住宅として建てられ、又一般人民の住宅發達し、商店建築も進歩し、神社と佛寺の建築は漸次衰へた。但し儒教の勃興につれ儒教建築の興つた事は注意すべきである。茶室は不相變建てられ、劇場建築の如きも漸次發達の道程に在つた。要するに宗教建築衰へて俗的建築之に代り、殊に住

宅建築が中心となる傾向が強くなつて來たのである。

建 築 家

中世以前の建築は如何に名作でも建築家の明かなものは頗る稀であるが、江戸時代には相當に明かとなつた。其主なものを擧げると、先づ江戸では幕府の大棟梁として甲良宗廣、平内正信、鶴正昭、辻内景家等がある。甲良宗廣は日光東照宮の總棟梁を勤めた外、上野東照宮五重塔を建てた。平内正信は日光大猷院廟の建築に従事した。次に名あるものは木原義久、鈴木長次、子長恒、宗廣の子宗次、宗久、孫宗清、宗賀、曾孫宗員、木原義永などである。木原義久は芝臺徳院廟、日光大猷院廟、上野東照宮、淺草寺、貫前神社等に關係し、鈴木長次は臺徳院廟、鹿島神宮、貫前神社の建築に與り、鈴木長恒は上野東照宮、嚴有院廟、淺草寺、日枝神社に關係し、甲良宗次は臺徳院廟、同宗賀は善光寺の建築に與り、同宗員は元祿の日光廟大修繕に大棟梁を勤めた。京都では中井正清が近畿の大工頭となり。久能山

建 東照宮の棟梁を勤めた。これ等の棟梁は何れも木割法を定め、甲良は建仁寺
 流、平内は四天王寺流と稱し、他に太子流、立川流など稱するものあり、何
 れも細部や木割の末法に拘泥し、子孫相繼いで之を墨守し、墮落して了つた
 のである。

宮殿建築
と廟建築

宮殿建築は寛政に御造營となつたが安政元年回祿し、同二年（一
 八五五）すべて寛政の制に倣ひ、紫宸殿、清涼殿を始め諸殿が再
 建された。これ現在の京都大宮御所である。廟建築は前代豊國神社に創るが、
 それは亡びて當代に入り日光東照宮を始め、徳川家各代のもの及び伊達家の
 ものがある。今これらと廟建築に近い神社建築（權現造）で、特に東照宮建築
 とも云ふべきものを併せて次に掲げてみやう。

元和三年（一六一七） 東照宮（久能山）
 同 年（同） 東照宮（日光）

同 七年（一六二二） 東照宮（和歌浦）
 同 年（同） 東照宮（水戸）
 寛永九年（一六三二） 臺徳院廟（芝）
 同 十三年（一六三六） 東照宮（日光）
 同 十四年（一六三七） 瑞寶殿（仙臺）
 同 十八年（一六四一） 五社神社（濱松）
 慶安四年（一六五一） 東照宮（上野）
 承應二年（一六五三） 大猷院廟（日光）
 元祿十二年（一六九九） 嚴有院（四代）廟（十代十一代合祠）（上野）
 寶永六年（一七〇九） 常憲院（五代）廟（八代十三代合祠）（上野）
 正徳三年（一七一三） 文照院（六代）廟（十二代十四代合祠）（芝）
 享保二年（一七一七） 有章院（七代）廟（九代合祠）（芝）

日光の東照宮

日光の東照宮は、一旦久能山に葬つた家康を更に日光に改葬して建てられたもので、徳川家の祖だけに廟建築としても代表的のものであるから最初に述べる。始め藤堂高虎、本多正純が奉行となり元和二年十月工を起し三年三月迄に本殿、本地堂、廻廊、御供所、厩等を建てたのであるが、其後家光に至つて松平正綱、秋元泰朝を奉行とし、甲良宗廣を總棟梁とし、全國から工匠を集め、寛永十一年十一月起工し同十三年四月迄、僅に一年五ヶ月の間に工費約二千萬圓（歐洲大戦前の時價に換算して）を費して現在の諸殿を造營した。其建物は鳥居、五重塔、表門、三神庫、厩、水舎、經藏、鼓樓、本地堂、陽明門、廻廊、神輿舎、護摩堂、神樂殿、唐門、透塀、本殿、拜殿、石之間、坂下門の外、後方に奥院寶塔及び拜殿等がある。而して之等二十餘個の建物は、あまり廣くない一區域に下から漸次上へ、曲折して纏つて配置され、配景と建物相互との關係を考へ、巧に繪畫的構圖をとり、

しかも主な建物は對稱的に置かれてゐる。即ち先づ鳥居があり之を過ぎると左に五重塔がある。正面の石段を上ると表門（仁王門）があり、之を入ると左に折れ、右手に三神庫、左手に厩、水舎がある。それから道は右に折れて社殿に一直線に向ひ、家光奉獻の銅鳥居があり、鳥居の左に水舎、水舎の先に經藏がある。鳥居をくゞつて石段を上ると正面に有名な陽明門があり、其手前の右に鐘樓、左に鼓樓がある。陽明門の左右から廻廊が起つて社殿を圍んでゐる。陽明門内には護摩堂と神樂殿とがあり、左に神輿舎がある。正面には唐門があり、更に其左右から玉垣が延びて社殿を圍んでゐる。而してそれから拜殿、石之間、幣殿、本殿があり、護摩堂と神樂殿との間から道が曲折して奥院につゞいてゐる。次に之等の中主な建築を説明すると、先づ五重塔は文化十二年雷火の爲め焼け、文政年間再建したので、江戸末期の墮落した恰好、手法、裝飾を持つてゐる。表門は八脚門で屋根は切妻造、銅瓦葺、大

建體の恰好はまづよく、彫刻及び色彩裝飾を豊富に用ひてゐる。即ち柱と「唐様」の組物とは本朱塗、其他は臘色塗で、貫、臺輪、丸桁等には極彩色を施し、組物間には墓股があり、其中には牡丹に唐獅子、竹に虎などを彫刻し、中の間受には象頭の丸彫、前後の木鼻には菊の籠彫、妻には獏頭を丸彫とし、すべて極彩色を施してある。三神庫は下のは曲り角の所で西面し、中のは表門に對して南面し、上のは一番奥で西面し、屋根は中が入母屋造で上と下とは切妻造として變化をつけてゐる。外壁を校倉造としてあるが夫は單に化粧丈で構造上の意味がない。東照宮の建築の組物は大抵「唐様」であるが、神庫が「和様」なのは變つてゐる。既に流造で其側面から見た曲線は中々美しく、長押の配置も面白い。此建築は軒裏と建具の蠟色塗なのと、長押上の欄間の松に猿猴の彫刻に彩色したのを除けば全部素木造で、華麗な日光諸建築の中に在つて殊に清楚の感を與へる。水舎は花崗岩の角柱を三本宛四方に立て、

正面に大きな唐破風をつけてゐるが、夫が大きすぎるので恰好がよくない。經藏は方五間、重層の寶形造で、正面中央を戸とし、左右の四間には火燈窓を開いてゐるが、その輪廓には餘計な曲折をつけ墮落してゐる。鐘樓と鼓樓とは何れも重層の入母屋造で、上層に朱塗の勾欄を廻らし、下層は銅張りの袴腰とし、其形は中々いゝ釣合を持つてゐる。組物は上下共極彩色、軒は蠟色塗、垂木は扇垂木となつてゐる。兩樓を左右に對稱的に配置し、形なども殆んど同様であるが、尾垂木の鼻を鐘樓の方丈け龍頭の丸彫とし變化をつけてゐる。鼓樓の奥に本地堂がある、寶形造のやゝ大きな建築であるが裝飾は比較的簡單である。次は陽明門である、三間一戸の樓門で屋根は入母屋造、四方に軒唐破風をつけ、上層に勾欄を廻らしてゐる。柱、貫、組物、勾欄、其他すべて彫刻で填められ、彫刻化した建築と云つてもよい位である。陽明門の左右から廻廊が延びてゐるが、其胴羽目と腰羽目には動植物の彫刻を極

彩色とし、柱、貫などは朱と黒との漆塗である。彫刻の彩色は眼を幻惑せしむるほど絢爛なものであるが、朱と黒との強い輪廓の中に在るので比較的落付いて見える。左甚五郎作として有名な眠猫の墓股は東廻廊に在る。次の唐門は四脚門で、彫刻裝飾は豊富であるが、極彩色を主とせず、白と金とを大體の調子としてゐるので、一種清楚の感を與へる。彫刻は左右の柱に昇降の二龍、幣軸には梅と竹、扉の羽目には梅、菊、牡丹など何れも唐木の寄せ彫物で、臺輪の上には人物の群像を付けてゐる。唐門の兩端から起つてゐる玉垣も欄間や羽目に極彩色の彫刻がある。次に社殿は本殿方五間、拜殿九間四面の間を四間三面の石之間でつなぎ權現造となつてゐる。屋根も權現造共通の形式を持ち、初めは唐門、陽明門、本地堂などと共に檜皮葺であつたが、今は銅瓦葺となつてゐる。拜殿は六十三疊敷の廣さがあり、中央を大廣間とし右に將軍着座の間左に門主着座の間がある。大廣間は柱を總金漆塗、極彩

色金欄卷とし、天井は折上格天井で、格間に丸龍を盛上彩色で描き、長押の上には動植物の極彩色彫刻をはめ、上に三十六歌仙の扁額を掲げてある。將軍着座の間は、二重折上天井とし、二本の胴羽目は桐に鳳凰を唐木の寄彫とし、門主着座の間もほゞ同様である。石之間は拜殿より一段低くなつてゐるが、彫刻と色彩の裝飾は矢張澤山用ひられてゐる。石之間から上ると本殿で、其前通り即ち外陣を幣殿と稱し、其柱は全部浮彫で側扉には菊と梅の高蒔繪を施してある。それから内陣であるが、其西壁には二十五菩薩來迎の圖を描き截金を施し東の壁にも壁畫がある。天井は格天井で、格縁を蠟色塗とし、唐草の金蒔繪を施し、格間は地板に漆箔を貼し、それに唐木透彫の一枚板を嵌めてある。其透彫は意匠卓抜、手法流暢である。又其肘木も蠟色塗に金蒔繪の唐草をつけ、曲線の調子もよく出来てゐる。其中が内々陣で宮殿となり、東照大權現を祀つてあるのであるが、其宮殿の正面は特別に結構な裝飾で、

彫刻と彩色とは遺憾なく施され、全く「日光の結構」なる所以がわかる。特に幣殿以内は寛永創建の儘、其後の修繕を加へず、全く桃山風を繼承し頗るよく保存されてゐる。以上略述した日光東照宮の建築は、普通虚偽な構造を有し裝飾過多に陥り墮落したもので我國のロココ建築であると云はれてゐるが、必しもさう貶す事は當らない。第一に其配置は巧に土地の高低を利用し曲折して變化を求め、しかも中心の社殿附近は對稱シメトリを守り、統一を保つてゐる。かの嚴島神社の建築が山を背景とし海中にまで延び長廊を以つて聯絡したのに比べ、之は高低を有し、一長一短はあるが、何れも自然と調和し繪畫的配置に成功してゐる。第二に個々の建物を見ても鐘樓、鼓樓の如く又既の如く江戸時代としては珍らしく優秀の恰好を有し、其他も再建の五重塔を除いては甚しく醜いものはない。第三に彫刻裝飾が過多であるのみならず、構造上必要のものを彫刻化して虚偽の構造に陥つたもの例へば拜殿の蝦虹梁を龍の

形として上から吊下げた如きは當然非難さるべき事であるが、彫刻裝飾の過少な日本建築としては、大體に於て珍とすべく、色彩裝飾も華麗に過ぎた點もあるが、之は多くは文久年間修繕の際悪化したもので、寛永創建の當時は未だ桃山風を存し、曲線の如きも中々美しい。それは本殿内部の創建當時の儘のものを見ればわかる事である。要之日光東照宮の建築は、上世、中世の建築とは別の意味に於て相當の價值あるものである。

臺徳廟臺
大猷廟大猷

二代臺徳院廟は寛永九年二月土井大炊頭利勝が造營總奉行となり關東の諸侯之を助け芝山内に起工した。大棟梁は鈴木近江守長次、

添頭梁は木原杵之允義久、作事請負人伏屋次兵衛、石屋甚兵衛等で、同年七月上棟した。超えて同年九月更らに御廟は平内大隅守正信、佛殿は甲良左衛門宗次、彫刻は甲良豊後宗廣、繪畫は狩野探幽兄弟之を分擔し、寛永十二年諸堂、門垣悉く竣工した。即ち日光東照宮より早く出來たものである。配置

は總門から勅額門、唐門、社殿と一直線上に列べられ、各門の前に數階の石段がある丈で、日光の東照宮や大猷院廟に比して簡單である。總門、勅額門とも恰好上乘とは云へない。唐門は恰好よく、蝦虹梁の形、象鼻なども中々よく出來てゐる。彫刻は他の芝の廟や上野の廟に比べて非常によく、金欄卷なども優れてゐる。社殿は本殿と拜殿とを石之間でつないだ權現造の形式であるが、他の廟と違つて餘程佛寺の風を帯びてゐる。本殿を二重屋根として天井を張らず、化粧屋根裏とし、四本の長い柱を立て、内陣とした所など禪宗建築に似てゐる。殊に化粧屋根裏の構造が扇垂木を始め佛寺風で巧妙を極めてゐる。内陣には大なる須彌壇を置き、其上に宮殿を安置してある。須彌壇は朱塗で腰には牡丹と唐獅子の彫刻をつけ、勾欄には天人の彫刻を嵌め其形意匠とも見るべきものがある。宮殿も二重屋根で總蒔繪とし頗る華麗なものである。猶本殿、拜殿、石之間の屋根の形式は權現造の普通の形で、初め

は檜皮葺であつたが、承應三年臺徳院二十三回忌を期とし修繕の際銅瓦葺に改めたのである。裏に奥院がある、其處には拜殿があり其奥の小さな唐門を潜ると八角二重の堂内に臺徳院の寶塔がある。八角圓堂も珍しいが内部の寶塔は實に素晴らしいものである。石の蓮座の上に安置せられ、初めは全部蒔繪にする計劃であつたのを島原一揆が起つて國事多端となつた爲め中止し、組物以上は極彩色としたのだと傳へられてゐるが、其塔身は蒔繪のみならず所々に水晶を嵌入し、金具には七寶を鏤め、非常に立派なものである。此臺徳院廟は東京に於ける徳川家の靈廟中最も古いのみならず、日光東照宮と同じ建築家裝飾家が關係し、様式手法共未だ桃山風を失はず、芝上野の數廟は皆之を範として出來たものである。三代大猷院廟は慶安四年四月家光薨じ、遺命によつて日光に葬り、三年を費し承應二年廟の建築が成つた。棟梁は臺徳院廟と同じく木原義久と平内正信である。大猷院廟は建物の數も少く配置

も簡單であるが東照宮の如く曲折はある。先づ仁王門があり入ると左に寶庫があり、少し進むと右に水舎があり、そこから左に折れ石段を上ると二天門（左右に袖塀）がある。之を潜つて右に折れ石段を上り更に左に折れて石段を上ると左右に鐘樓と鼓樓とがある。それから石段を上ると東照宮の陽明門に當る夜叉門（左右に廻廊）があり、之を入つて唐門（左右に玉垣）を潜り拜殿、相之間、本殿となるのである。本殿の右手に皇嘉門といふ龍宮造の門があり、それを入つて石段を上ると石塀の一廓があつて、内に銅の寶塔がある。仁王門は東照宮と同じく八脚門であるが、裝飾としては金箔を多く用ひ、彫刻も極彩色も少く、先づ此第一門で、東照宮と大猷廟との著しい相違に氣がつく。寶庫は東照宮の神庫の簡素なもの、水舎は屋根の形よく、四方にある三本宛の柱も「轉び」をつけて踏張つてゐるのが東照宮の垂直なのに比べて非常によい効果を與へてゐる。天井の龍も狩野安信の筆で、中々よく描かれてゐる。

二天門は三間一戸の樓門で入母屋造、銅瓦葺とし、組物は「唐様」の詰組を用ひ、上層には極彩色を施し、腰組は黒塗である。すべて大猷廟の方は組物でも上だけは極彩色とするが、腰組は一色塗とし、柱、長押、貫、丸桁等の裝飾も略されてゐる。鐘樓と鼓樓とは東照宮のものと同じ形式であるが、裝飾は簡略になつてゐる。夜叉門は三間一戸の樓門で東照宮の陽明門に當り、流石に彫刻裝飾も多く、極彩色も盛んに施されてゐるが、陽明門に比べると簡單になつてゐる。唐門は金箔を主とし、殆んど九分通り金色に光り、東照宮の唐門が白の分子を多く交へたのと異り、其印象も一段劣つてゐる。透し金物を用ひた事と金具に「いろゑさし」と云つて、唐草模様の餘地を黒く塗つた事は東照宮と違ふ點である。「いろゑさし」は唐門のみならず他の門の金具にも用ひてゐるが、模様を鮮明にさせる効果は悪くないものである。本殿は方五間、相之間四間一面、拜殿七間三面をつゞけて權現造とし、屋根の形式も

東照宮と同様であるが、相之間は東照宮の石之間と違ひ拜殿と同じ高さの床が張つてある。又本殿は内部に四本の柱を立て其内に須彌壇の上に二重の宮殿を安置し、餘程佛寺風になつて居り、東照宮よりも芝の臺徳廟に似てゐる。其結構裝飾は東照宮に似て簡單になつてゐる。皇嘉門は龍宮造で下層を純白の蟻壁とし、上層は丹塗と金箔に、組物を極彩色とし、上下の色の對比面白く、日光兩廟建築中に一異彩を放つてゐる。銅の寶塔は即ち家光の墳墓で、其恰好は中々よく出来てゐる。大猷廟は東照宮及臺徳廟に遅るゝ事僅に二十年、地位は東照宮に隣して日光山中幽邃の地を占め、東照宮と比べては規模裝飾共に大に下るが、簡單な中に又一種の趣があり、廟建築としては東照宮に次で見るとべきものである。

其他の廟
及東照宮

徳川家靈廟建築の第四に擧ぐべきものは上野に在る四代嚴有院廟である。此廟は初め天和元年鈴木修理長恒によつて建てられたの

であるが、元祿十一年九月江戸の大火で焼け、同年十一月戸田山城守忠昌が奉行となり再建に着手し、翌十二年三月廿九日上棟三月七日遷座があつた。後十代十一代が合祀された。正面に勅額門（左右に廻廊）があり、之を入ると拜殿、相之間、幣殿、本殿とつゞいて權現造をなし、廻廊から拜殿へも廊がつゞいてゐる。此形式は隣の常憲院や芝の文昭院廟も同様で、神社にも二三其例がある。勅額門と拜殿との間に鐘樓と水舎がある。鐘樓は重層で下層を袴腰とし、廟附屬の鐘樓共通の形式を持つてゐる。相之間は一段低くなり、本殿の前通一間が幣殿となつてゐる。すべて柱には金欄卷を施し、組物、長押、貫等は極彩色とし本殿内陣は裝飾最も豊富である。其内に四個の宮殿が安置されてゐるが何れも二重で立派に裝飾されてゐる。此廟は芝の臺徳廟よりは約五十年遅いので、其裝飾は大體同じ風を追つてゐながら桃山の精神は殆んど失はれてゐる。次は嚴有院廟の隣に在る五代常憲院廟である。之は大

工頭片山三七郎満國頭梁となり、寛永六年十一月十九日上棟した。後八代十
三代も合祀された。此廟の配置は全く嚴有院廟と同様で、拜殿、相之間、幣
殿、本殿の平面、裝飾等も同様であるが、十年遅いので一層軟弱となつて
る。第六は芝公園に在る六代文昭院廟、第七は其隣の七代有章院廟である。
前者の建築家は上野の常憲院廟と同じく、後者には畫工として狩野永叔主信、
佛工として康傳が關係してゐる。前者に十二代十四代を合祀し、後者に九代
を合祀してゐる。此二廟とも權現造の普通の形式をとり裝飾は豊麗であるが
何分年代も下り、日光東照宮と比べては百年近くも距つてゐるので桃山風は
殆んど亡び墮落したものである。尤も文昭院廟拜殿の百花百鳥の彫刻が寫生
風で巧に出來てゐるのを始め裝飾の中には見るべきものが無いでもない。徳
川家の靈廟は日光東照宮芝臺徳院廟を初めとし七代の有章院廟が終りで、あ
とは夫々合祀されたのであるが、合計七廟其間約百年、廟建築の變遷を示し、

裝飾の推移を現はし、初の桃山風からつひに墮落した有様は、他の建築や建
築裝飾にも共通で、甚だ興味あることである。廟として徳川家以外のものに
は仙臺に伊達家の瑞寶殿がある。これは政宗を祀り、二代三代の廟も近くに
在る。老杉鬱叢たる坂を上りつめると左手に四脚門があり、之を入つて更に
石段を上ると拜殿がある。拜殿は七間三面、單層、入母屋造で向拜を有し、
其裝飾は比較的簡單であるが、次に石之間の代りに渡廊があり、其後に本殿
がある。石敷の上に建てられ方三間、單層、寶形造で、彫刻及び色彩裝飾多
く、扉や外壁は金箔の上に草花の繪が描かれてゐる。細部は禪宗風で、内部
も石敷となり中央に宮殿を置き中に政宗公の像を安置してある。宮殿は裝飾
頗る美しく臺徳院廟の宮殿を思はしめる。其他内部を石敷とした禪宗風も臺
徳廟に似てゐる。伊達家のものだけに徳川家のものより規模は小さいが、違つ
た點もあり、寛永十四年の建築で最も初期に屬する所からまだ桃山風が残つ

築 建

て居り、徳川家以外唯一の廟建築として見逃す事の出来ぬものである。建築家は瑞巖寺や仙臺城と同じく中村日向吉次である。次に廟建築ではないが東照宮建築の遺物を附加へて置かう。先づ久能山の東照宮は元和二年四月家康が薨じて久能山に葬つた翌年、中井正清を棟梁として出来たもので権現造である。即ち方三間の本殿と五間二面の拜殿とを一間の石之間でつなぎ、屋根は本殿拜殿とも入母屋造、銅板葺である。外に唐門、東門、廟門、渡廊、玉垣等が附屬してゐる。上野公園内の東照宮は初め元和九年四月藤堂高虎が天海僧正と計り、曾て高虎が拜領し下屋敷としてゐた忍ヶ岡の地をトし東照宮社殿を創建せん事を秀忠に乞ひ、其許を得て起工し寛永三年十一月竣工し、翌四年九月十七日遷宮の式があつた。而して慶安二年七月二日後光明天皇が勅額を賜り之を勅額門に掲げた。然るに家光は翌三年三月十五日社殿の造替を命じ、同年六月十七日外遷宮をなし、幕府の大工頭鈴木修理長恒、木原左

之允義久の兩人によつて改造に着手し、同九月二日立柱式、同四年四月十七日正遷宮の式が行はれた、之今の社殿である。勅額門は慶應三年十二月焼失し、勅額は今拜殿に掲げられてゐる。方三間の本殿と七間三面の拜殿との間を相之間でつなぎ、平面も屋根も普通の権現造である。拜殿の天井は小組格天井で長押、貫、組物等總べて極彩色である。相之間は一段低く、裝飾はほとんど同様で、羽目には金箔の上に松や梅を極彩色で描き、欄間には牡丹などを彫刻し極彩色を施してゐる。相之間から段を上つて本殿となり、其裝飾は最も華麗である。臺徳廟から二十年後の建築で、形に於いて桃山風を繼承してゐても精神は餘程變つてゐるやうに見える。猶和歌山、水戸、仙臺、川越等の東照宮、濱松の五社神社等皆権現造である。

江戸時代

江戸城と二條城

城廓建築としては、和歌山城の天守と松山城の天守とが當代の再建である外、江戸城と二條城とは書院造を住宅建築として取扱ふ

べきであらう。尤も江戸城は明治六年五月殆んど焼けて了つたが、當初の有様を少し述べて置かう。初は室町時代の中葉長祿元年太田道灌が之を築き天正十八年徳川家康關東八州を領するに至つて之に移り、文祿慶長年間之を再築し、殊に慶長十一年から大工事を起し、寛永十三年家光外廓を修築するに至つて規模全く成つた。大體本城、西城、吹上御苑の三區劃から成り、本丸を主として宏壯な殿舎を作り、南に五重天守を建て、其南に二之丸、三之丸がある。本城の西は西城（今の宮城の地）で内に西之丸があり、將軍の隠居所として廣大な書院造がある。而して之等の北一帯が吹上御苑となつてゐる。本丸の殿舎は屢々火災に罹つたが、毎回大體舊の如く再建された。それは廣い書院造で、表中奥の三御殿に分かれ、玄關、遠侍、大廣間、白書院、黒書院、御座の間、御休息の間等完備し、各室とも狩野家に命じて花鳥、山水、人物等を描かしめ、雁之間、芙蓉之間、柳之間、松之間など繪によつて命名

され、大廣間は千疊敷と稱し七十二間の長さを唯一本の巨松で描き填めたと傳へられてゐる。西之丸の書院造も表奥の兩御殿に分かれ、本丸の殿舎に亞いで宏壯のものであつた。之等すべてを内廓とし、大手、清水、竹橋、雉子橋、田安、半藏、外櫻田、日比谷、馬場先、和田倉の十門の外、西丸、坂下、内櫻田の諸門を開き、更に外廓を設け、それには淺草、筋違、小石川、牛込、市ヶ谷、四谷、赤坂、虎、幸橋、山下、敷寄屋橋、鍛冶橋、吳服橋、神田橋、一ツ橋等十六門を設け之を見附と稱した。此宏大な城廓書院造も明治六年祝融の災に罹り、殿舎樓門殆んど焼け、更に後市區改正、震災後の整理等で樓門、枳形、石垣等除去されたもの多く、今は天守と田安、坂下、櫻田（改築）等僅に數個の門に昔を偲ぶばかりである。二條城は慶長七年家康が板倉勝重をして經營せしめ同九年から寛永元年に亘つて修築し、桃山城の天守を移さしめなどしたが、其後殿舎を仙洞御所其他に移し、又本丸、天守は火災に罹

建り、今は唯隅櫓と二之丸(二條離宮)丈け残つて居るに過ぎぬ。之も宏大な書院造で、車寄、遠待、大廣間、黒書院、白書院から成り、平面は曲折して、屋根も入母屋造を面白く連絡し又離して葺いてある。其壯大な事は書院の天井の高さ二十尺、柱は方八寸から一尺に及んで居るのでわからう。格天井、襖、床之間などには狩野興意、探幽、尙信等が描き、壁と襖とを通じて一本の巨松を描くやうな繪としても大規模なものがある。上段之間には床、違棚、張臺飾、書院構などを設け、欄間には彫刻を施し、隨所に鍍金の金具を打つ。現存せる書院造としては最も規模大なる代表的のもので、猶桃山時代の特色を十分に持つてゐる。庭園も亦立派な作である。

其他の住宅遺物

當代の住宅遺物は時代が新しいので相當あると思ふが茲では京都の桂離宮新書院、修學院離宮、石川縣の妙成寺書院、京都の妙法院大書院、大徳寺方丈、眞珠庵方丈、智恩院大方丈小方丈、妙心寺大方丈小方

丈、孤蓬庵本堂(方丈)及書院等を擧げて置く。其中で桂離宮は元來豊太閣が正親町天皇の皇孫智仁親王の爲め桂の里に設けた別荘で、東は桂川に接し西は西山一帯をながめ、北は遙に嵐山を望み、閑靜な地である。建築庭園とも小堀遠州の作と稱され、庭を主とし之に建物を配し、庭園と建築とを結びつけたものとして室町時代の金閣などと共に代表的のものである。尤も古書院と中書院とは秀頼が桂宮の爲に造營したもので、新書院が遠州作として確かなものである。比較的簡単な建築であるが、一之間は三疊の上段之間と六疊とから成り、天井は楓の格天井、附書院及棚は意匠最もすぐれ、殊に棚は桂棚として有名である。修學院離宮は承應年中、徳川氏が後水尾天皇の爲め經營したもので、御園の内が地勢の高低によつて三ヶ所に分れ、上の御茶屋中の御茶屋下の御茶屋となつてゐる。東山の北に位置し、遠く北山、西山を眺め風景絶佳の地に上中下三段の趣も變り、全くの別天地である。中の御茶屋

築 建

は創立の時、樂只軒が建てられ、其後此處に佛殿建立の叡旨があり、第一皇女緋の宮落飾遁世されたので、寛文三年此地を賜うて聖明山林丘寺の勅號を賜り、後屢々殿舎林泉が造營された。即ち主なる建物は林丘寺に屬したもので、書院は入母屋造、柿葺の建築であるが、庭園を主とした點は、桂離宮と同様で、庭園建築と稱すべきものである。正殿の棚の意匠殊に優れ、床に並んで設けられた棚は五段となり、長短各々異り、變化の中に諧調を保ち、かの桂棚と共に代表的のものである。妙法院大書院は東福門院入内當時の舊殿と稱し、桁行五間梁間六間、單層、入母屋造、柿葺で、七間四面、入母屋造、柿葺の玄關がついてゐる。(因に庫裡は桃山時代)。大徳寺方丈は桁行前四間後八間梁間左三間右四間、單層、入母屋造、檜皮葺の建物で、六間一面、向唐破風、檜皮葺の玄關がついてゐる。此庭は叡山をとり入れた借景園として傑れた作である。同寺眞珠庵方丈は七間六面、單層、入母屋造、檜皮葺の建築

代時戸江

である。智恩院大方丈は九間六面、單層、入母屋造、檜皮葺の建物で、それに二間一面向唐破風の玄關と十間の歩廊がついて居り、小方丈は方五間、單層、入母屋造、檜皮葺で、七間の歩廊がつき、何れも立派な書院造である。妙心寺の大方丈は桁行前五間後六間、梁間四間、單層、入母屋造、檜皮葺で、小方丈は桁行前四間後六間、梁間左七間右五間、單層、入母屋造、柿葺で、五間一面、切妻造の玄間がついてゐる。大徳寺孤蓬庵本堂は七間三間、單層、入母屋造、棧瓦葺で、同書院は方六間、單層、入母屋造、左切妻、棧瓦葺の建物である。猶諸侯の江戸及び領地に於ける邸宅は、當代住宅建築の重要なものであるが多くは亡び、遺るものも改築多く、殊に江戸のものは數度の火災で焼失し、門丈けに多少の遺物がある。即ち高輪御殿の門、本郷帝大の赤門、舊華族會館の門、久松伯爵別邸の門等二十位ある。

神社の形式と遺物

神社建築の形式については神明造の伊勢神宮を始め其都度説明して來たが、其神宮が二十年毎に再建せらるゝのと、日吉造の日吉神社が桃山時代の再建なのを除いて、他はすべて當代の再建である。

- 大社造—出雲神社 延享元年 (一七四四)
- 住吉造—住吉神社 寶永五年 (一七〇八)
- 春日造—春日神社 文久二年 (一八六二)
- 流造—賀茂御祖神社 本殿 文久三年 (一八六三) 他は 寛永五年 (一六二八)
- 賀茂別雷神社 本殿 文久三年 (一八六三) 他は 寛永三年 (一六二六)
- 八幡造—宇佐神宮 文久元年 (一八六一)

以上の如く宇佐神宮、春日神社、賀茂兩神社本殿何れも當代末期の再建であるが、流石に古い調子を持つてゐる。出雲大社と住吉神社とはやゝ古い方である。賀茂兩神社は本殿を除いては何れも當代最も初期の再建で、御祖神社

の樓門、舞殿、幣殿、祝詞舎、東西廊、東西樂屋、四脚中門、透塀、細殿、神服殿、供御所等何れも桃山風を失はず、殊に樓門、舞殿の如きは藤原時代の調子さへ現はし、概して平安朝時代の流造の優美な趣味が現はれてゐる。次に他の神社遺物は比較的尠い。

- 元和五年 (一六一九) 鹿島神宮社殿 (茨城縣鹿島町)
- 同 年 (同) 二荒山神社本殿 (日光)
- 寛永十二年 (一六三五) 貫前神社本殿 (群馬縣北甘樂郡一宮町)
- 同 十八年 (一六四一) 石清水八幡宮社殿 (京都府綴喜郡八幡町)
- 承應三年 (一六五四) 八阪神社本殿 (京都)
- 萬治二年 (一六五九) 日枝神社々殿 (東京)
- 寶永三年 (一七〇六) 根津神社々殿 (同)
- 享保十五年 (一七三〇) 氷川神社々殿 (同)

建築

享和元年（一八〇一） 香椎宮

（福岡縣糟屋郡香椎村）

鹿島神宮の創立は神武天皇頃と傳へられてゐるが、現在の社殿は當代劈頭の再建である。本殿は三間社流造で、其前に五間三面入母屋造の拜殿と二間一面切妻造の幣殿とを有し、本殿と拜殿との間には二間一面切妻造の石之間がある。大工頭鈴木長次によつて建てられ、本殿は流造であるが拜殿石之間をつけた所が權現造に似て居り、繪様彫刻は桃山風である。二荒山神社も創立は古いが、今の社殿は始めて東照宮が建てられた時に續いて建てられたもので、本殿は方五間、拜殿は五間四面、共に入母屋造、銅瓦葺である。貫前神社本殿は鈴木長次と木原義久によつて建てられ、方三間、入母屋造の妻入で檜皮葺である。内陣を二段とし、中央の階を上ると神座がある。其形式が珍しい。内外に漆を塗り、彫刻彩色も豊富に施されてゐる。石清水八幡の本殿は一種の八幡造であるが、三社殿があつて之を左右の相之間で連結し、透

江戸時代

塀を廻らし、幣殿、樓門があり、樓門から廻廊が起つて本殿を圍み、加茂神社の如く一廊をなしてゐる。裝飾豊麗、猶桃山時代の風を傳へてゐる。八阪神社の前の本殿は紫宸殿を模した建築であつて、現在のものもそれを學んだものと傳へられてゐる。七間四面の四方へ廂を付け、向拜を設け、入母屋造とし、一種特別な形で祇園造とも呼んでゐる。因に此神社の樓門は鎌倉時代の建築である。日枝神社は初め文明年間に太田道灌が創立し、江戸城の守護神としたもので、慶長年間秀忠が麴町一丁目の元山王に再建したが、明暦の大火に焼け、萬治二年家綱が今の所に再建した。建築家は鈴木修理長恒と木原義永の兩人で、東京市内の神社としては最古最優の一つである。根津神社の創立は不明であるが、太田道灌が再建したと傳へられ、今の社殿は家宣が寶永三年再建したもので、東京の權現造としては代表的のものである。建築家は幕府の小普請方村松淡路宗章と依田伊豫盛昭の二人である。氷川神社も

建築

創立は明かでないが、現在の社殿は吉宗の再建に係り、普通の権現造である。香椎宮は本殿の内部を内中外の三陣に分ち、外陣の左右は外に出で、獅子間を成し、端に車寄を附けた珍しい平面である。屋根は入母屋で、外陣の兩翼を切妻造とし、前に向拜を附け、千鳥破風を有し、立面も奇抜であるが、時代が下るので細部は墮落してゐる。猶東京の富岡八幡、神田明神、龜戸天神等も江戸時代の社殿を持つて居たが、何れも大震災で焼失した。

創建の佛寺

佛寺の遺物は信仰の衰頹から少いのが當然であるが、鎌倉時代以來久し振で輸入された支那風の遺物があるのは珍らしい。即ち

- 寛永元年（一六二四） 寛永寺 （東京）
- 同 六年（一六二九） 崇福寺 （長崎市）
- 萬治二年（一六五九） 瑞龍寺 （富山市外）
- 寛文二年（一六六二） 萬福寺 （宇治）

江戸時代

以上の中、寛永寺を除く三ヶ寺がそれである。寛永寺は秀忠の本願で寛永元年天海僧正が京都の比叡山延暦寺に擬して草創し東叡山と號した。其配置は幕府の大棟梁甲良若狭棟利の所持してゐた圖によれば、先づ今の公園の入口に仁王門があり、少し進めば右に觀音堂左に辨財天堂がある。夫から正面に文珠樓があり、左には大佛がある。小松宮殿下銅像の所には鐘樓があり、其先に法華堂と常行堂とが左右に連結して建てられた。更に進んで左右に輪藏と多寶塔とがあり、正面に中門、門を入つて中堂があり、門の左右から廻廊が起つて中堂に接してゐる。斯く境内は今の公園全部を蔽ふ位廣大で、建物も規模壯大、輪奐の美を極めてゐたのであるが、明治元年五月兵燹に罹つて殆んど全部烏有に歸し、今は僅に清水觀音堂、辨財天堂を残してゐる許りである。觀音堂は京都の清水觀音堂に擬して舞臺造とした點が面白く、辨財天堂は特に云ふべき事もないが、大正三年工學博士伊東忠太の設計で龍宮造の

築 建

天龍門が建てられた。五重塔は今寛永寺に屬してゐるがもとは東照宮のもので、寛永二年土井利勝が建立し東照宮に獻じたものである。然るに同十六年焼失し、同年甲良宗廣と次子宗久によつて再建された。東京市内で最も古く且つ最も形のいゝ五重塔である。崇福寺は寛永六年僧超然によつて草創せられた。現在の建物は正保二年（一六四五）の大雄殿が最も古く、外に鐘鼓樓（同五年）第一峰門（明曆五年）、護法堂（享保十六年）、三門（嘉永二年）等がある。何れも構造、様式、手法、裝飾等總べて純然たる明風で、彼地の工匠の手になつたものである。大雄殿は本堂で五間六面、重層、入母屋造、本瓦葺。鐘鼓樓は三間二面、重層、入母屋造、本瓦葺。第一峰門は四脚唐門で入母屋造、本瓦葺。護法堂は關帝堂又は觀音堂と稱し、桁行三間梁間五間、單層、入母屋造、本瓦葺。三門は三間一戸の樓門で入母屋造、本瓦葺である。瑞龍寺は前田利長が工匠山上嘉廣に命じ支那徑山萬壽寺を學んで建てしめ、萬治二年

代時戶江

佛殿竣工し、三門、大方丈、禪堂、庫裡、浴室、東司、茶室、書院等其前後に出來たが、現存するのは當時の佛殿の外、二三の再建に過ぎない。佛殿は方五間、重層、入母屋造、鉛板葺の建物で、禪宗風を學んだのであるが、構造、手法當代初期の風に從ひ、新しい繪畫彫刻を施し、從來の禪宗伽藍とは大に違つた趣がある。萬福寺は隱元禪師が明の黃檗山萬福寺に模して建立し、主なる堂宇は總門（漢門）、三門、天王殿、佛殿（大雄寶殿）、法堂、威德堂、牌堂（祠堂）、座禪堂、鼓堂、鐘樓、祖師堂、開山堂、舍利殿、伽藍堂、東西方丈等で、その内總門（元祿六年）と三門（延寶六年）とを除いては、大抵寛文元年から同八年までの間に建てられた。其配置は總門、三門、天王殿、佛殿、法堂等を一直線に並べ嚴正な對稱シムメトリを守つてゐる。而して其形式は明風を模してゐるが、細部は多く日本風で多少明風が加つてゐる位である。蓋し日本の工匠が明風を模したので、崇福寺が明の工匠によつて建てられたのに比べる